ギリシア語の「割符」ということばを語源にもつシンボルは、人類の想像力・抽象力の極致といわれる。神話や伝説、宗教や美術に表われるだけでなく、現代の表現活動の多様なジャンルの中にも生かされている。本書は、人間が自然や動植物、モノにたいして何をイメージし、シンボルとしてどのように具象化したかをコンパクトに、しかし、世界や身近かな細部を新鮮な眼で見直すのに十分なリストとして編まれた異色の事典。

●カバーデザイン=ローテ・リニエ

ジェイナ・ガライ
中村凪子[訳]

シンボル・イメージ小事典

Air
Fire
Water
Stone
Silver
Gold
Gem
Ivory
Pearl
Egg
Milk
Salt
Oil
Heart
Blood
Head
Hair
Breath
Eye
Ear
Hand
Food
Bone
Lion
Bear
Ape
Hare
Ass
Fox
Pig

Cat
Lamb
Dog
Camel
Ram
Rat
Raven
Goose
Owl
Swan
Eagle
Sparrow
Peacock
Partridge
Crane
Wren
Snake
Frog
Crocodile
Snail
Dolphin
Whale
Turtle
Worm
Bee
Scorpion
Spider
Beetle
Grasshopper
Ant

Fly
Laurel
Yew
Cypress
Fern
Myrtle
Cedar
Olive
Palm
Poplar
Willow
Fig
Poppy
Apple
Pomegranate
Lily
Anemone
Bean
Rose
Bell
Crown
Horn
Key
Ladder
Shell
Arrow
Anchor
Horseshoe

Jana Garai
THE BOOK OF SYMBOLS

現代教養文庫

シンボル・イメージ小事典
J・ガライ著
中村凪子訳
教養文庫
1356
D
022
¥520
(505)

現代教養文庫

1356

シンボル・イメージ小事典

J・ガライ著
中村凪子訳

社会思想社

現代教養文庫

1356

シンボル・イメージ小事典

J・ガライ　著

中村凪子　訳

社会思想社

ルイス・A・ニコルス博士に

はじめに

幻影と象徴から真理があらわれる

ジョン・ヘンリー・ニューマン枢機卿
エッジバストンに在る、本人の詩文による墓碑銘

象徴主義(シンボリズム)とは、人間のもつイメージ(心像、概念)をめぐる一つの思考方法である。西欧世界では、およそ三百年まえ、デカルトその他の人たちの唱える理論――当然、のちに否定されることになったが――によって、徐々に消滅したものとされてきた。しかし、象徴主義という言葉こそ死語も同然だったが、そのじつ宗教や心理学、芸術の分野について考えれば、消滅したかにみえても、それは表面上のことであって、象徴も神話も、人びとの無意識下ではいぜんとして活動していたし、それはまた自然な活動であった。事物に「象徴」なるものを生じさせる無意識という未知の世界に、はじめて解釈をあたえたのがフロイトであった。そして、そのフロイトを越えて、ユングは、意識下に生まれたイメージに、深く精神にかかわる意味を見出し、その源をさぐって、神を希求する人間の心を浮き彫りにした。フロイトは人間の本能的な精神上の姿勢を「原始的な幻想」と表現し、こ

れを原型にユング学説は発展した。人間が生まれながらにもっているこうしたイメージや感情は、神に似せて造られた人間の本性に向かう精神的な成長や発展を表わすものであり、また、広くそれを象徴するものとも言える。

象徴とは、人間の内面的な感情や思考が外面に投射されたときのイメージである。たとえば、復活や死などの概念は人間の理解を超えているため、象徴によって表わすほかに伝えようがない。象徴は隠されたものを示唆することであり、それはアナロジー（類比）に基づいているため、容易に説き明かせるものではない。象徴とは、目に見えないものを、目に見える形として表わされた記号、しるしなのである。

象徴（シンボル）と表象（サイン）は、しばしば共通する語として使われるが、厳密には異なった意味をもつ。表象は、一定の事物あるいは思考を表わすために意識的に用いられる。徽章や紋章がそれにあたり、何かを表示し、定義づけるものであり、人間によって造られたものでありながら人知を超えた神秘性をもっている。

多くの哲学者が説くところによると、アナロジーは原始的であり、また非理性的ではあるが、しかし、あらゆる象徴原理の土台である。象徴とは人間内部の葛藤や実体を明らかにし、ついで認識にいたる手段なのである。合理性が優越し、科学時代と言われる今日においてなお、われわれの先祖たちが心に抱いていた恐怖なり、希望なり、欲望なりは、力を弱めた形であれ、神話や素朴な儀式、あるいは東洋の文化を通じて生きつづけている。

象徴主義はアナロジーを通じて外面的世界を内面的世界に、また精神性を物質性につなぐものである。たとえば、創世の過程や生命の循環は古代エジプトのオシリス神話によって語られている。エジプト神話の「神のなかの神」オシリスは弟に殺され、妹イシスによって復活する。ギリシャ神話では、ディオニュソスはタイタンに虐殺されたが、プルタークはこれを「破壊されて消滅し、生を放棄したのち甦った神」と書いている。いま一つ象徴的アナロジーの例に橋と虹をあげよう。橋と虹は、象徴的には同義語であり、人間と神をつなぎ、また有形の物と無形の物をつなぐものを表わす。虹は洪水の終焉のしるしであり、また、そのような大洪水が「すべての生命を破滅させること」は二度と起こらないという、イスラエルの民に対する神の契約の象徴である。

われわれは、古代ギリシャやローマの文化、ユダヤ教やキリスト教の継承者であるが、また他の文化のもつ洞察力から得るものも多いはずである。遠く異なる文明が示す象徴や、ホメロス時代の人びとの幻影、また古代の予言者が語った象徴を通じて、われわれは普遍的な真理に到達するのである。

シンボル・イメージ小事典——目次

鳥——113

泥と水に棲むもの——139

昆虫——159

大地とその恵み——

いずれの宗教、文化、神話も共通して、人間は大地によって生み出されたと考えていた。大地は、母なる神として人間に食物や住処をあたえるだけではなく、そもそも人間が生まれ、つくり出された起源と創造の象徴である。大地の神格化は旧石器時代以来のものであり、生命の象徴としても最古のものである。

万物を生み出す女性、すなわち母なる大地のイメージは、アメリカ・インディアン諸族の神話によく表われている。それによると、最初の人間たちはある期間、大地の深奥部に住んでいた。内部はひたすら闇に閉ざされていたが、ある日、一人が裂け目を見つけ、そこから這い出して地表の光と美を見出したのだという。すぐさまほかの者たちも続き、彼らは太陽のもとで鹿を追い、植物を味わって生きるようになった。この伝説は明らかに妊娠期間と出産の寓喩であろう。インディアンが大地をこのようなものとして捉えていたとすれば、彼らが大地を耕すことをたびたび拒んだのも不思議ではない。彼らにとって土は母の肉体であり、石はその骨、草や穀物はその頭髪だから、耕せば生みの母が傷つくのである。

それよりははるかに発展した文明をもつギリシャの神話でも、まったくの混沌から最初

に出現したのは「母なる大地」であった。オリュンポスの天地創造伝説によれば、母なる大地は眠っている間に天を意味するウラノスを出産し、ウラノスは感謝のしるしに、大地の隠れた裂け目に雨を注いで川や海をつくった。すると、大地は鳥や獣とともに花や草木を生み出したという。イスラム教の『コーラン』も女性と土地の神秘的なつながりを記している。「汝らの女は田野としてあたえられた」のであり、男は種を授けるものと見なされている。

現代ヨーロッパ文明においてさえ、その底流には、生まれた土地との神秘的な一体感がひそんでいる。それはセンチメンタルな愛国心や郷土愛ばかりでなく、より普遍的な、宗教的とさえいえるような観念であって、「土は土に、灰は灰に、塵は塵に」という、永遠の生命を希求する不変の復活願望である。こうした大地への不思議な絆は、家族や同族に対するよりも強い。おそらく、人間は大地からやってきたものと無意識下で信じていて、子供は川や洞窟から生まれるとか、あるいはカエルやコウノトリが運んでくるという発想はそこから生まれたのであろう。おもしろいことに、ローマ人は私生児を「大地の息子」と呼び、今日でも、「花の子供」とか、また「自然の子供」などの言い方をする国もある。

もし大地を万物の創造主であり、乳母であると考えるならば、子を生み育てる女性は、まさにそれらの機能を成就してあますところがない。人間が死に臨んで、母なる大地、すなわち自分の生まれた土地に還りたいと願う気持ちは根強く、だからこそ、伝説はもちろ

ん、現代的意味での伝統にも、それは深く根づいているのである。

古代から、北半球は光を象徴してきたが、これは中国でいう陽、すなわち肯定的な概念に一致する。それに対し、南半球は闇、あるいは否定的な陰の概念に結びつけられ、歴史的に見ても、文明の進展はおおむね北から南へと移ってきた。概して言えば、母なる大地は正義と道徳の守護者である。にもかかわらず、殺戮と近親相姦の果てに不毛の地と化した古代ギリシャの昔から、そして現在にいたるまで、母なる大地は悪と犯罪に辱められてきたのである。

空気　*Air*

ああ、願わくばこの肉体を
空気に洗われ、長い木の葉に覆われる所に置きたいものを

アルジャーノン・チャールズ・スウィンバーン
『ヴィーナス礼讃』

空気とは、人間と大地をとりまく広大な未知の空間、つまり、暑さと寒さ、また降水と渇水をもたらす希薄な物質で、ありとあらゆる霊気が発する空間である。宇宙の生成が主として何に起因しているのか、それについて諸説があるなかでも、空気はもっとも名誉ある地位をあたえられてきたようである。火と同様に、空気もまた活動性という男性的資質と関連づけられ、酸素を送って炎を燃え上がらせる一方で、圧縮されることによって火花を飛びちらせる。錬金術の根本は土、風、火、水の四大元素の変成であり、これらの元素はそれぞれが、いわば他の元素に生じる変化をとおして変化するに過ぎず、したがって最終的には、造り手が息を吹き込んで活動させなければ完結しない。神はアダムの鼻孔に息を吹き込むことによって生命をあたえ、また、天地創造を命ずる言葉の一語一語を発する

たびに息を吐いた。空気とは神のなせる創造の「息吹」が形となったものである。

空気の、より激しい形は風である。多くの神話で風は災いをもたらす神であり、あるいは恵みをもたらす神であった。北欧神話の天地創造伝説では、霜の巨人ユミルが寒気のなかで、暖かい南風を吹きつけられてとけ出し、その雫から最初の男と女が生まれたとしている。エジプトやギリシャでは、風は悪をなす力を持つと考えられ、エジプトでは悪神セト、ギリシャ神話ではテュポーンに化身して、ハリケーンの精であると同時に、多くの怪物の父親でもあっ

た。しかし、ギリシャ人にとって悪である風も、トラキアの山あいに住む神ボレアスがはげしい北風を吹かせて、攻めよせるクセルクセスの艦隊を追い散らすと、一転して善になるのである。神話や宗教において母系制が支配的だった当時、この同じ風神ボレアスは再生の力と、女性を妊娠させる力をもっていると信じられていた。俗に雌馬は後半身を風にむけて受胎すると言われるのはこれに由来する。

火 *Fire*

この世は火に包まれて滅ぶという者があり
氷に閉されて滅ぶという者がある
好みの点からいえば
わたしは火を選ぶ者に与しよう

ロバート・フロスト
『火と氷』

四大元素の一つである火は、生と死、善と悪を象徴する。原始的な種族はおおむね火を地上の太陽とみなし、あるいは口から火を吹く怪物の姿として描いた。また、サラマンダー（火トカゲ）に見立てた時代もあった。伝説によれば、サラマンダーは火のなかでも無傷で生きていられたという。火による懲らしめや清めは聖書の昔から見られ、悪徳のはこびるバビロンの都に対する神の裁きは「高い城門は火で焼かれる。今や、多くの民の労苦はむなしく消え、諸国民の辛苦は火中に帰し、人々は力尽きる」というものであった。マタイによる福音書では、悪しきキリスト教徒の運命を、よい実を結ばないために「火に

投げ込まれる」木になぞらえている。また、使徒たちを描いた初期の絵画では、炎は異教徒に与えられる地獄の責苦を意味していた。

エジプト人にとって、火は制御、すぐれた精神的発達、旺盛な精神を象徴した。ギリシャ人は、プロメテウスが神々からこっそり火を盗んで人間にもたらしたとして、プロメテウスを崇めた。また、イスラエル人にとって、神は闇夜に荒野をさすらう彼らとともに在り、神はそのことを燃えさかる火柱となって示した。また、紀元前五百年頃にペルシャで行われたミトラ信仰でも、太陽とその炎は善の根源であり、悪と闇を征服

するものであった。人類学者によれば、松明（たいまつ）をかかげ、かがり火をたいて豊作を祈り、幸せを願う原始的な儀式の多くは、現代のクリスマスの照明や花火、その他の火祭りに符合するという。

十六世紀の錬金術師であり、医者でもあるパラケルススは、火と生命は、どちらも他の生命に依存して生かされているという点で共通していると指摘した。

水

Water

永遠のまぶたがあいて見つめている
忍耐強く、眠りをとらぬ大自然の隠者のように
流れる水はまさに僧侶の勤行
地に住む人間の河岸を洗い浄める

ジョン・キーツ
『輝く星』

「水は昼も夜もとどまることがない。高きを流れて雨露となり、低きを流れて河川となる。水は至高の善をなす」これは、自然界における水の循環を生命の本質と見た老子の言葉である。しかし、老子のみならず、天地創造の神話や伝説のほとんどが、原初の生命は底知れぬ淵、あるいは混沌から出現したと説明し、水は、具体的な生命の根源を象徴している。各種の聖典にも、水は

天然資源として他のいずれよりも頻繁に言及され、その非常な重要性ゆえに、太古から聖なるものとして儀式や信仰に関わりをもってきた。東洋では、水は生命を守護するものであり、また、血液、雨、樹液などの液体の形をとって自然界を循環していると考えられている。すなわち、万物に生命をあたえるという意味で、水は、母なる要素なのである。

水のもつ浄化という特質は、バビロンやアッシリアの昔から認められており、主として偉大なるユーフラテス川で清めや禊ぎの儀式が行われてきた。水に浸るという行為はのちに神聖な洗礼の儀式となったが、これは罪や穢れを洗い流すことを意味しており、悪を絶滅し、人間あるいは魂の絶えざる復活を象徴するのである。さらに広い意味では、各古代史のいたるところで見られる大洪水もまた同じような象徴的意味を持っている。

古来、海や湖、川、泉など、形態を問わず、あらゆる水が神聖視されて、ほとんどの神殿が何らかの水の近くに建てられた。神に属する水の神秘はその他にも多く、水による占い

がエジプトの神官や妖術師によって広く行われていた。この水占いが、おそらくは現代の「茶の葉」占いの起源であろう。こうした占いでは、水の色、潮の干満、水に投じた小石が作りだす模様が重要な意味を示していた。エジプト人はまた、左右に水を分けて川床や海底を露出させる技を手中におさめていたと伝えられる。この技があればこそ『出エジプト記』にあるように、モーセは手を差しのべて紅海を割り、イスラエルの民を、乾いた土地の上を歩くように海を渡らせることができたのである。占い杖によって地下水脈の正確な場所を探しあてることは今もって行われているが、これは古代ローマ人に「二叉の棒」として知られていた二叉のハシバミの杖による占いが、後の世のエリザベス一世治下のイギリスに復活したものである。

石

Stone

目ざめよ！
夜の窪みに、朝が投げた石が
あまたの星を追い散らす

エドワード・フィッツジェラルド訳
『オマル・カイヤームの四行詩』

どっしりと堅い石から、人間はつねに力強さや不変性を連想してきた。死や衰退、生物体としての変化に絶えずさらされているこの世では、石は永続性のある物質として強い信仰の対象であった。文字どおり天から降ってくる隕石が生命の謎を解き明す手がかりになるように、火山の爆発による石も生命の起源を明らかにしてくれる。太古の文明はこれらの石を神体として崇拝していた。そうした石の中でもっとも有名なものに、シリアのエメッサで、太陽の象徴として崇拝された隕石がある。またメッカのカーバ神殿にある黒い聖石もそうした石の一つであり、現在でもこのモスクに参る巡礼の人びとは、必ず口づけをしてゆくという。この黒い石も隕石であり、マホメッド（モハメット）以前数世紀の昔

から崇拝されていて、いまではすべてのイスラム教徒にとって神聖不可侵のものである。この石は天から降ってきたときには白い石であったが、人類の罪業のために黒くなったとイスラム教徒は信じている。

寓話や伝説にもさまざまな魔法の石が登場する。また鷲の巣で見つかる鷲石は癲癇を治し、早産を防ぐと伝えられている。プリニウスによれば「その石は大きくて、中にもう一つの石がはいっているから、振れば、瓶のなかに石を入れたようにガラガラと音がする」という。これから連想するのは、当然、子宮内の胎児である。試金石にはふつう黒みがかった碧玉が用いられたが、ローマ人によく知られていいた

「リュディアの石」はこれである。試金石は金の含有量を調べるものだが、十七世紀、トマス・フラーは次のように言っている。「人間は試金石をつかって金をはかるが、金は人間をはかる試金石である」

銀

Silver

一摑みの銀ゆえに彼は行ってしまった
コートにとめるリボンのために

ロバート・ブラウニング
『失われし指導者』

LA TEMPERANCE

火で試された白色の貴金属、銀は純粋と純潔を象徴する。「銀の舌を持つ者」とは福音伝道者やその後の多くの伝道師、たとえば、十六世紀、イングランドのヘンリー・スミスなどの人びとを指して呼んだ名である。これは彼らの雄弁を指したもので、『詩篇』十二の「主の仰せは清い。土の炉で七たび練り清めた銀」に由来するものであろう。

銀は月につながりをもつ金属で、神秘、闇、無意識と結びついている。ゆえに、光と生命の象徴である太陽につながりをもつ金とは対極にある。しかし、タロット・カードでは、この二つが見事な調和を見せる。「節制」あるいは「時の天使」と呼ばれる十四番目の

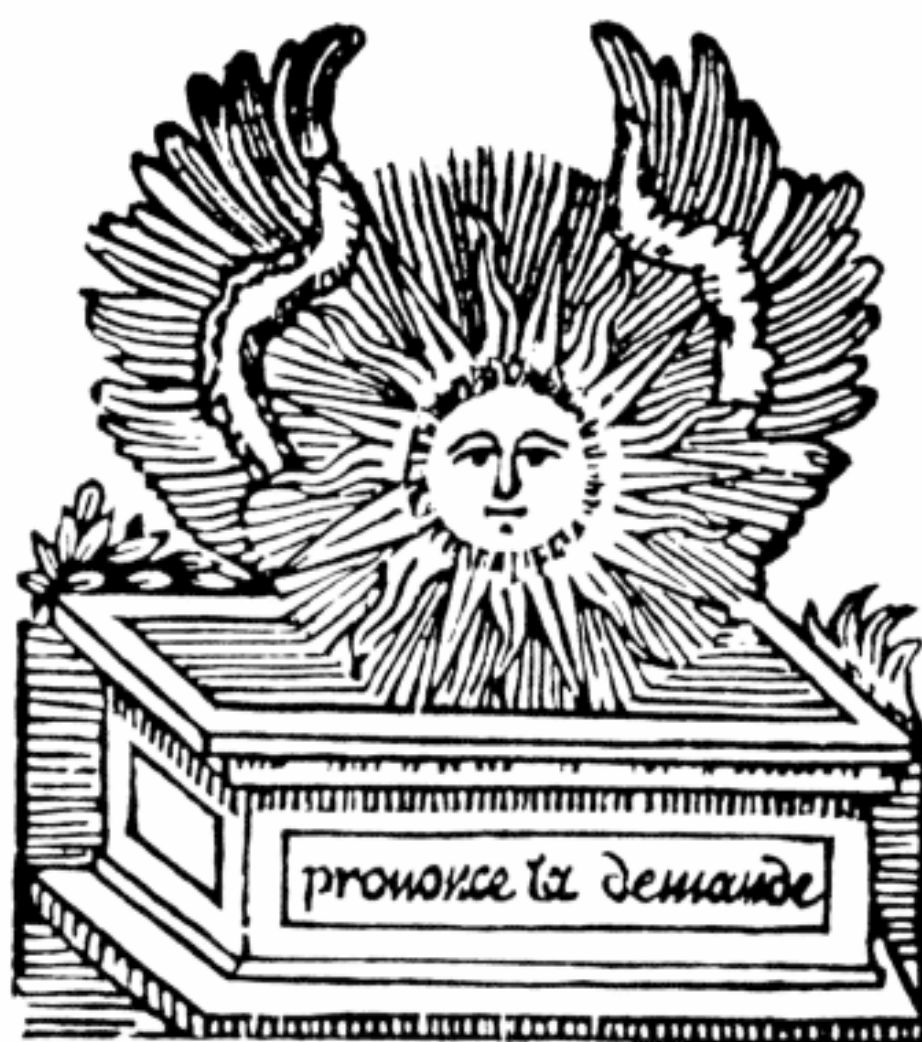
カードには、銀の杯から金杯へ液体を注ぐ絵が描かれている。銀が月を、金が太陽を表わすとすれば、流れる液体は霊なる力であるから、意識と無意識が混ざり合って、よりすぐれた知識、力、強さが生まれるのである。

純粋を象徴し、また月と結びつくことによって、銀は護符や魔除けに最適な金属とされ、モハメッド（マホメット）は銀以外でつくることを禁じた。十八世紀の呪術の本には、月が一定の条件をそなえたときに刻まれた銀の護符を持っていれば明るく、健康で、名誉と富に恵まれるが、家のそばに鉛の護符を埋めれば、その家に災いをもたらす、と記されている。

金 *Gold*

金はこの上なくよいお客だが
ただし、それは空に輝いているとき
手にした者には悪いお客だ

プルターク
『ヘロドトスの悪意』

金は貴重な金属であり、太陽の光と同じ色をしているために、太陽の神秘性を表わすとされる。太陽があらゆる純粋さ、神聖さ、善の源とされるように、金は優れたもの、聖なるものすべての象徴である。すべて金色のもの、あるいは金でつくられたものは完全性を備えているが、地上の富の対象としては、聖書や伝説でしばしば罪深いものとされている。触れるもののすべてを金に変えたミダス王や、金の子牛を崇拝したアロンの物語では、金は貪欲と偶像崇拝の象徴であった。しかし、秘宝探しの神話や伝説にみられるように、金はまた、精神的な富を表わすうえでも重要視されている。

一方、全き金属としての金が象徴するものについては、錬金術上の言葉、そしてまた錬金術と精神世界のつながりを考えることによってよく理解できる。真の錬金術師の基本公理は「黄金をつくり出そうとする者は、黄金から始めねばならない。なぜなら、人は真実の自分自身になってはじめて真理を発見することができる」ところにある。錬金術の「偉大なる術」の主要な諸段階は、誕生から衰退、死、そして再生へと移行する自然の周期をなぞるものであり、またこれは人間の精神的発展を象徴している。卑金属は、まず、いわゆる「原物質」へと変成されなければならない。「原物質」は形を変えた金属であり、形を変えると同時に内蔵する生命の隠れた本質を解き放つのである。この過程は、死によって肉体から魂が解き放たれるのと相似している。この解き放たれた本質がさらに他の物質と結合して、より複雑な物質へと一変し、これが最終段階の「賢者の石」で

あり、これはあらゆる物質を金に変える絶対的な力をもつのである。

伝説にある不老不死の霊薬もまた金と結びついている。十六世紀最大の神秘家パラケルススは金から不老不死の霊薬をつくり出したと主張した。液状のその薬は万病を癒すが、金と心臓はともに太陽に支配されているゆえに、とりわけ心臓疾患に特効があるというのだった。事実「飲用の金」の処法が残っているが、成分は赤ワインの酢三パイント、一塊の錫を灰にしたもの、金一オンス、少量の塩である。

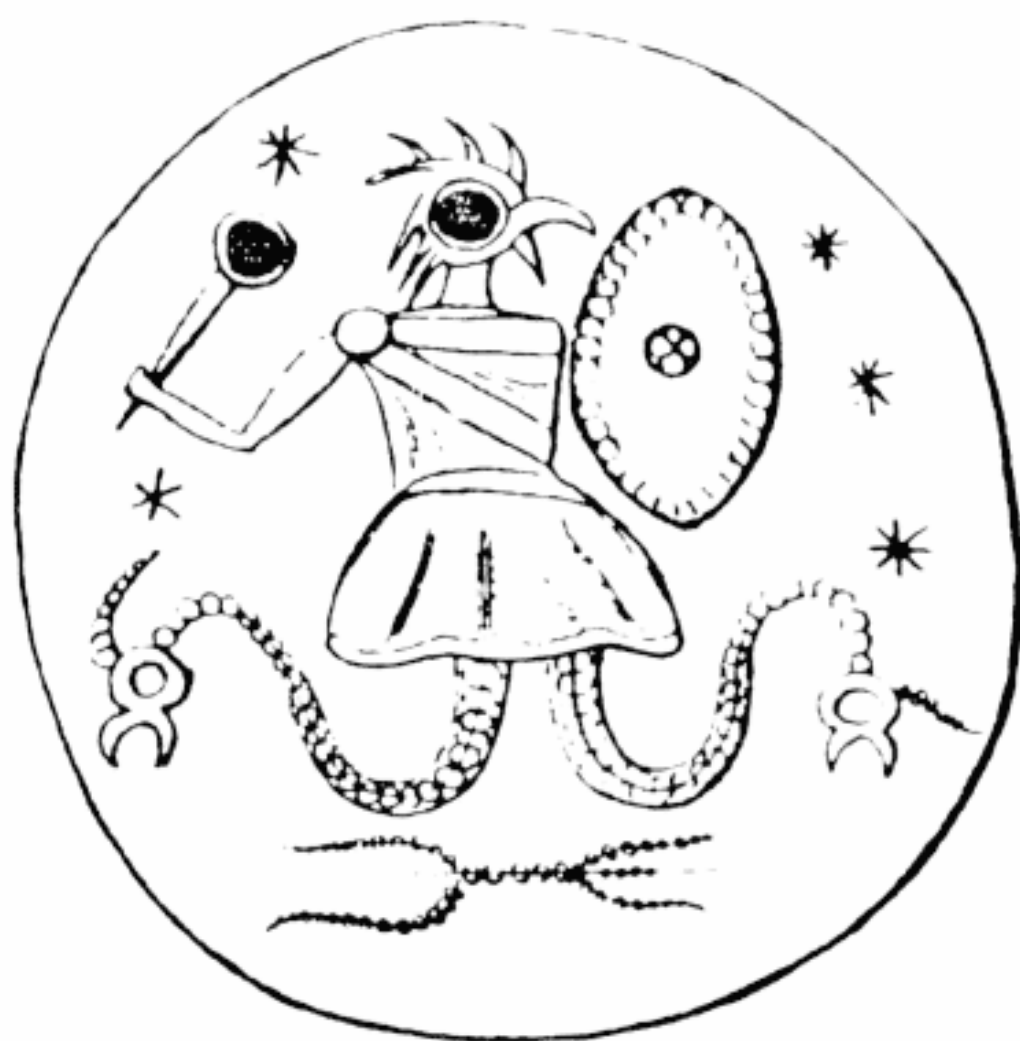
金と、王の神聖性との結びつきは非常に古く、その起源はやはり金の至上性にあった。金は神に属する栄光を象徴するのである。イギリスの歴史にその例を見れば、かつてリンパ腺の病気である瘰癧（るいれき）は王の手で触れることによってのみ治る、と信じられていた。ヘンリー七世によって始められた触手の儀式では「癒しの黄金」と呼ばれる貨幣が配られた。しかし、この儀式も、一七一二年、アン女王がジョンソン博士に行ったのを最後として絶えた。たぶん何の効果もなかったからであろう。

宝石 *Gem*

わたしたちが地に捨てたもののいかに多くが
人に拾われて宝石になることか

ジョージ・メレディス
『当世風の愛』

宝石や貴石は至高の知識と霊魂の真理を象徴する。宝玉探しのテーマは各神話にあり、また竜や怪物に守られた秘宝譚は、すなわちこの至高の知識を得んがためにあらゆる困難を克服しようと苦闘する人間の物語である。ユングによれば、洞穴に隠され、あるいは地中に埋められている宝玉にからむ多くの民話も、われわれのだれもが持っている直観的、無意識的認識に関わる物語なのである。

古代の人びとは、宝石や貴石には魔力や治癒力があると考えた。たとえば、黄道十二宮にはそれぞれ固有の石が定められている。ギリシャ人は、蛇に噛まれたときある種の石を

砕いて粉にして傷口にふりかけると治ると信じていた。また農夫が身につけた碧玉は、彼らの土地の豊饒を約束するものであった。中国人にとっては、翡翠(ひすい)はいかなる宝石にもまして清純、神聖であり、その力は無限であった。おもしろいのは、暗い色合いの宝石は男性的特質、明るい色合いのものは女性的特質をもつとされていたことである。たとえば、宝石をちりばめたサウル王のターバンについて、ブラウニングは「堂々たる男らしいサファイアと勇敢な心を持つルビー」に飾られていると書いている。

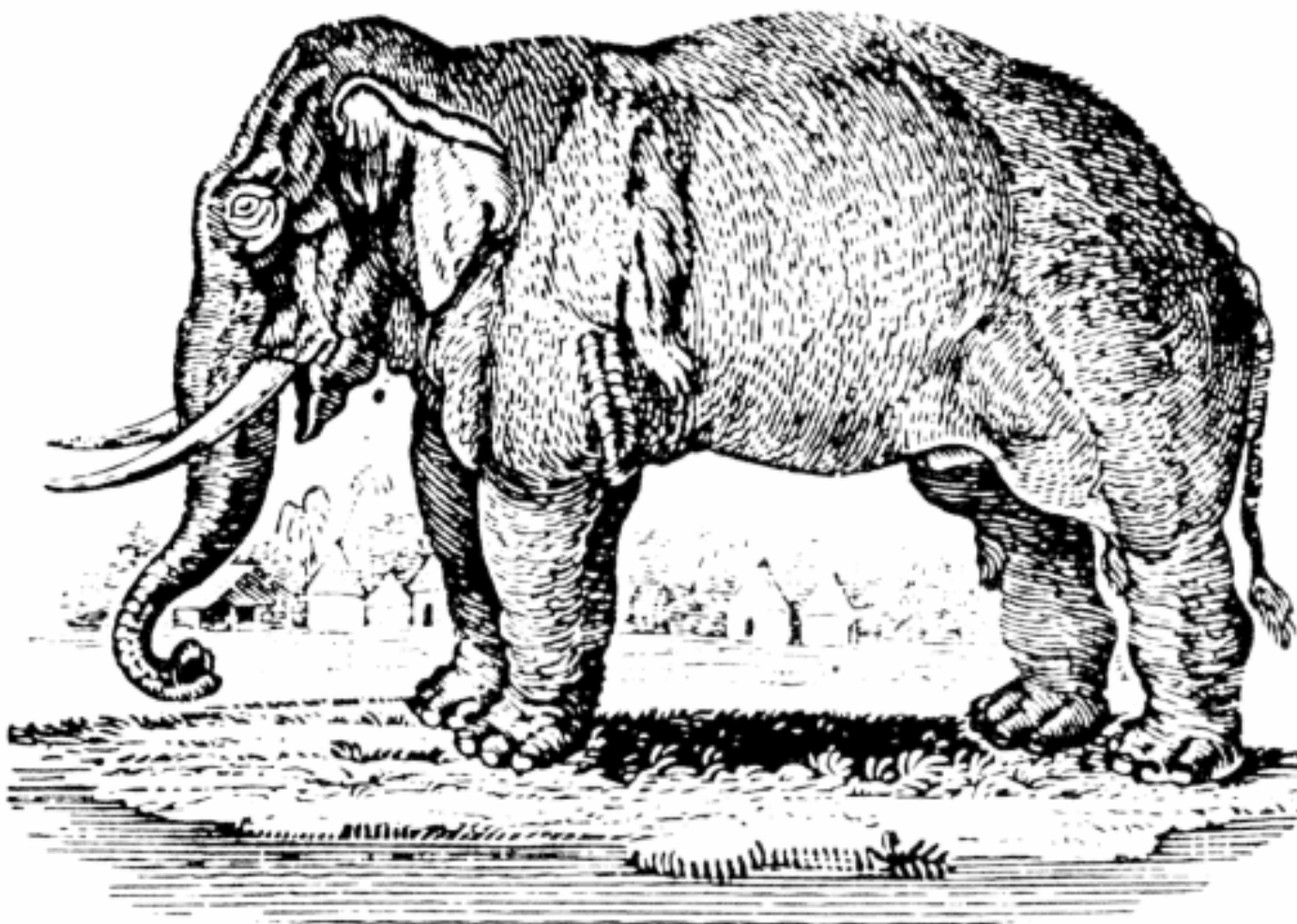
聖書時代には、宮殿や寺院に宝石や貴金属をはめこむ習わしがあった。ヨハネの『黙示録』には、都の城壁の土台に十二使徒の名を刻んだ宝石を埋め込んだと記されている。同様に、モーセが作るように命じられた有名な胸当てには、十二の宝石が四列に並べられていた。赤玉(サージウス)、トパーズ、ざくろ石が一列、エメラルド、サファイア、ダイヤモンドが一列、黄水晶、縞めのう、紫水晶が一列、そして最後の列が緑柱石(ヘリル)、オニックス、碧玉である。

象牙

Ivory

もしもわたしがただ一人の韃靼(だったん)の支配者だったら
ベッドは象牙、玉座は金箔で
つくるものを

ウォルター・デ・ラ・メア
『韃靼』

太古の昔から、象牙はこの上なく人間を魅了してきた。そして、旅や移動がきわめて困難だった原始文明の時代には、金や宝石に劣らぬほどに重要視されていた。象そのものが神秘的な動物であり、その一部である象牙の歴史も謎を秘めている。象牙は稀少で、また二つの優れた特徴をもっていた。第一の特徴はその白さであり、これは清浄を象徴した。第二には素材の驚くほどの硬さであり、そのため、後

世のキリスト教徒は、墓に眠るイエスの肉体が腐敗しないことや不屈の精神を象牙になぞらえた。象牙にキリストの十字架像を彫ることは、おそらく、こうした点から発したのであろう。

象牙のもつ性質のうちもっとも重要なのはその不変性であろう。金や銀は鋳直し、あるいは溶かすことができるし、宝石は容易に嵌(は)め直せるが、象牙はいったん彫刻してしまえば変えることができない。この特質が古代美術の流れにあたえた影響は大きい。彫刻された象牙は持ち主を変え、国から国へと移動するうちに、新しい芸術様式と美的価値にすぐれた彫刻を生み出した。

十七世紀のサー・トーマス・ブラウンは象牙にまつわる不思議な話を書いている。われわれの見る夢はすべて、角(つの)か、あるいは象牙でできた門を通ってくるというのである。また「象牙の門」から入ってくる夢は人を惑わせ「角の門」を通り抜けてくる夢はかならず正夢だと信じられていた。

真珠 *Pearl*

真理は尊く、神聖なもの――
肉欲の豚に真珠は高貴にすぎるのだ

サミュエル・バトラー
『ヒューディブラス』

真珠貝のなかにひっそり身をひそめた真珠は、「神秘の中心」、あるいは肉体に覆われながら肉体よりも尊い人間の魂を象徴する。古代インドの聖典『ヴェーダ』は「天から生まれ、海から生まれた真珠のもつ聖なる力を称えている。「神々の骨は真珠となり、生命を得て海の底を動く。われ、汝に生命と活力と力をあたえん、幾年の永き生命を。真珠が汝を守らんことを！」

中国人の間では、真珠は豊穣のしるしであり、それを生み出す真珠母は陰（いん）の性質をもち、出産に力があると言われた。好んでさまざまな宝石を散りばめたお守りを身につけたギリシャ人やローマ人は真珠には不思議な力があり、愛と結婚に幸運をもたらすと考えて

いた。狂気や熱病や黄疸の薬として真珠が用いられたのは、その昔、真珠が呪術や宗教の分野で重要視されていたからに他ならない。しかし、キリスト教の到来とともに、真珠は救いの象徴となった。ちなみに新約聖書には次のようなイエスの言葉がある。「天の国は次のようにたとえられる。商人が良い真珠を探している。高価な真珠を一つ見つけると、出かけていって持ち物をすっかり売り払い、それを買うのである」

ただ一粒の真珠が真理の象徴として深遠な意味を持つ一方で、富の対象としては、しばしば贅沢と華美を誇示するものとしてもてはやされた。クレオパトラはマルカス・アントニウスの気を引くために、ぶどう酒に「溶かした」真珠を加えて飲んだと言われるが、トマス・グレシャムは王立取引所開設の際、エリザベス一世に敬意を表して一万五千ポンドもする高価な真珠をワインにまぜたと伝えられている。

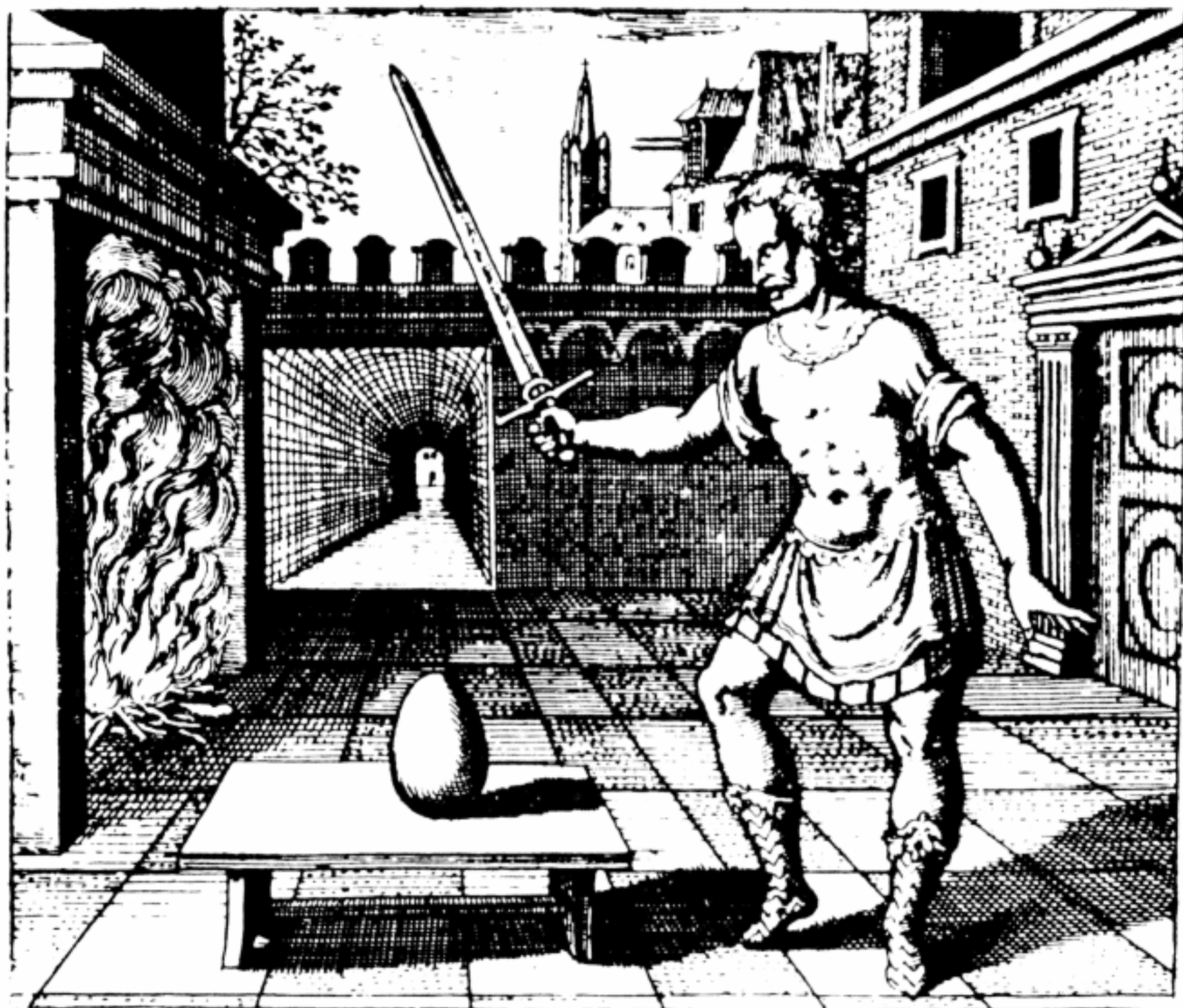
卵

Egg

雌鶏は、卵がつぎの卵を産むための道筋にすぎない

サミュエル・バトラー

『生活と習慣』

生命の根源を秘めた生命の種のように見える卵は、事実、生命の種のようなものであり、それゆえに、動物界のみならず、宇宙全体の再生の象徴とされる。かつて多くの文明が、世界は卵形をしていると信じていた。世界は、偉大なる創造主——それが何であれ——が生んだ卵からかえったのである。中国やインドの神話、とりわけエジプト神話は、こうした世界観のうえに構築されている。エジプト人は永遠の生命を願って太陽神ラーを崇拝し、ラーはしばしば、生まれ出で、まだ卵に包まれた姿で描かれる。また初期キリスト教時代に盛んだったオルペウス（オルフェウス）教の創造神話では、偉大な母なる女神と蛇の姿の神オフィオンが結ばれ

て宇宙の卵をかえし、太陽神アポロンを生み出したとする。それ以来、蛇の卵はふつう太陽の熱で孵化するため、アポロンは、太陽とその軌道に結びつけて考えられるようになったのである。

錬金術の発祥はおそらく古代エジプトであろうが、生命を隠されて在るものと考え、そのことから、のちの神秘学へ発展するのであるが、これは卵の神秘性に由来するのかもしれない。錬金術では、血液、水、精液など、あらゆる液体に生命が宿っていると信じられていた。そのため、まさに液体である卵黄や卵白は、具体的にも、また抽象的にも、生命とその不滅性を表わしていたのである。

雄鶏はオルフェウス教では復活の鳥とされ、アポロの息子で、死者を蘇らせると言われた名高い医神アスクレピオスに捧げられた。そうしたことから、蛇の卵はやがて鶏の卵にその地位を譲り、とりわけ春祭りを盛大に祝うケルトのドルイド教では早くから鶏の卵を使うようになった。卵は太陽を敬う意味で赤く塗られ、復活祭の行事として卵に彩色する風習はこれに由来する。

伝説に有名なドルイド教の卵についてはプリニウスの興味深い記述がある。プリニウスはドルイドの卵を一つ持っていたが、その卵は何匹かの蛇がシューシュー吐く息に支えられて空中に浮かんだまま孵化したという。蛇に襲われることなくこの宙に浮いた卵をとってきた人間は、よほどすばしこかったに違いない。なにしろ、その蛇の毒は猛毒なのだから。この卵には魔力があり、持ち主は大いに富み、いかなる競技においても勝利をおさめることができたという。『金の卵を生んだ鵞鳥』の民話は、おそらくここから生まれたものであろう。

ふつう、卵はまず殻を割ってから食べる。ローマ人は、食べかすの卵の殻で敵が呪術を行うことを防ぐために、食べたあとの殻を砕く習慣をもっていた。古代ローマ人にかぎらず、人間が食べた物と、食べたあとに残された物との間にはきわめて強い絆があると考えられてきた。多くの原始人は、残された物に害を加えることによって、それを食べた人間にも害を及ぼすことができると信じていた。

乳 *Milk*

彼のまわりを三重に囲み
おそれかしこみ、目を閉じよ
彼は楽園の蜜を吸い
乳を飲んで育った者だ

サミュエル・テイラー・コールリッジ
『クビライ・カン』

乳は豊饒と豊潤の象徴であり、また、ときに純潔を意味する。乳はつねに善を善たらしめている本質であり、それ無くしては非常な困難と苦痛に見舞われるものと考えられてきた。比喩としての「乳と蜜の国」とは神に祝福された約束の地であり、神はイスラエルの民をエジプトからそういう国に導くことを約束されたのである。また「黄金の民」の国も、約束された「乳と蜜の国」であり、そこではクロノスの民が働きもせず、心配事もなく、気ままに乳を飲み、地上の果実を食べて楽しく暮していた。いま一つの神話では、ゼウスを生んだ女神レアの乳がほとばしり出て、できたのが天の川だという。

原始呪術では、豊饒を願う儀式を司ることが重要な役割の一つであり、女性や家畜の乳の出をよくするという、さまざまな呪い(まじない)があみだされた。翡翠(ひすい)を粉にして、乳と蜜とともに用いれば乳の出がよくなるとされ、ある種の石をお守として身につけることもあった。また、ケルト族の魔女が野ウサギに変身して、牛の乳を飲みつくしてしまうこともあれば、乳にはまた別の利用法があった。すなわち、牝牛の糞で火を起こし、そこへ乳を入れた鍋をかけて針を煮るのである。やがて煮立った鍋のなかで針が激しく動きだすと魔女は体じゅうを刺され、たまりかねて本性をあらわして慈悲を乞うという。

中世の魔女狩りの時代には、魔女は

それぞれ悪魔から授かった眷属をもっていると考えられていた。多くの場合、それはヒキガエルや猫だったが、魔女の脇の下には悪魔のやっとこでつくられた第三の乳頭があり、その乳頭からその動物に乳を飲ませるのだと言われていた。悪魔の乳頭らしきものがあるとされて、無実の者が処刑されることも少なくなかったのである。

塩 *Salt*

他人のパンがいかに塩辛く
他家の階段の上り下りがいかに辛いか
肝に命じてよくわかるだろう

ダンテ・アラギエリ
『神曲』天国篇

塩は力と優越を意味する。山上の垂訓で、キリストは弟子たちを「地の塩」、すなわちもっとも善き人間、もっとも完全な人間と呼んだ。同様にユダヤ教の聖典『タルムード』においても、塩は「トーラー（律法）」を象徴する。なぜなら、この世は塩なしには存在しえないように、トーラーなしのタルムードはありえないからである。「塩の上手（かみて）」が名誉をともなう優位の席を意味するようになったのも、塩を尊ぶこうした概念に基づくものであろう。この言葉は文字どおりの意味でもあった。当時、それぞれの家庭には銀の大きな塩壺があり、いつも食卓の真ん中に置いてあった。そして大事な客は家長と塩壺の間に坐り、そうでない客や家族は下座につくのであった。

塩はしばしば食物の腐敗防止の目的で使われることから、物を清浄化する力があるとされ、不滅性の象徴であった。それゆえ、イスラエルの民に関して神がアロンになした約束は、聖書によれば「塩の契約」であり、永久に守られるのである。同様にアラブ人の間には、一度塩を分かちあえば永遠の友情が結ばれ、客のほうからも、また主人のほうからも断ち切ることができないという不文律があった。ギリシャ人やローマ人、またイスラエルの人びとも、神に犠牲を捧げる儀式にはしばしば至純の象徴である塩を使ったが、カトリック教会では、今なお聖水を準備するにあたっては塩が使われている。歴史的に、悪魔は塩を忌避するとされてきたのである。

未開人は塩には魔力があると信じ、呪いをかけるにはきわめて有効であった、呪いをか

ける相手の背後から塩を投げつけると、犠牲者ははなはだしく興奮して、いらだちのあまり夜は眠れず、昼は徘徊せずにはすまなくなるのだった。興奮をひき起こす塩はまた、性とも結びつけて考えられ、結婚に先だつ儀式でしばしば重要な役割を与えられた。また塩を媚薬にまぜて用いると情熱をかきたて、想いをかける人の髪にふりかければ、心だけでなく肉体（からだ）をも引きよせることができるとも言われていた。

油 *Oil*

その徳において、この世で彼女にまさるもの
汝が『並ぶものなき油』マカッサルをおくべし！

バイロン卿
『ドン・ジュアン』

いつの時代も、油はその鎮静作用によって知られ、清めの儀式にはかならずといってよいほど使われてきた。キリスト教では神の恩寵を象徴するものであり、現在でも洗礼や聖職叙任の儀式に用いられている。

アッシリアでよく行われた占いは、水に油を注ぎ、それがつくる模様で爾後の行事を決定するというものであった。宮殿や寺院の建立はかならずこうした神託にしたがって行われた。七三一年に書かれたベードの『イギリス教会史』には、嵐の海を渡る人びとに油の壺をあたえた聖エイダンの話がある。荒れる海に壺の油をそそいで一行の命は助かったが、それが油の神性による働きなのか、あるいは、たんに大量の油が高波をいくらかでも鎮めたためなのか、それについては書かれていない。

呪術で油を使う例は数えきれないほどである。呪術の女神ヘカテーとその祭司たちは厳しく身を律し、儀式にそなえては体に香油を塗り込んだ。カルシストたちは白魔術、すなわち治療や救済のための善き呪術を行なうとき、オリーブ油、没薬（もつやく）、シナモン、コウリョウキョウを体にふりかけた。中世には、悪魔にとりつかれると聖油の助けを借りて悪魔を払ったという。しかし、アフリカの象狩り人は油の魔力を恐れ、狩りに出かけるときには、留守中に妻が髪を切ったり、あるいは体に油を塗ったりすることを禁じた。もしそういうことをしたなら、象は網を破って罠から逃げ出すからである。

人間——

人間は、人間そのもののうちに、小規模なかたちで全宇宙を象徴しているという意味で特異な存在である。人は太陽であり、月であり、星であり、地上のものすべてである。人間が神をかたどって造られたのか、あるいは、神が人間の姿に似せてつくり出される必然性があったのか、そのことはあまり重要ではない。なぜなら、いずれの宗教も人間に神性を認めているからである。人間は、自らを人間であると同時に神性を備えた存在であると自覚していればこそ、象徴と見なしうるのである。こうした自覚の上に、呪術や、ユダヤのラビが唱えるカバラ、またヨーロッパ、あるいは東洋のあらゆる哲学が生まれた。人は学習や瞑想によって聖なる状態に到達することができる。ギリシャ神話やローマ神話には、人間が半神半人や神になる物語がある。東洋や、またさらに古い文明では、人間の肉と骨を大地に、呼吸を空気に、体温を火に、血液を水になぞられて四大元素の重要性を示している。古代の占星術では、肉体を宇宙と結びつけ、この場合は頭が天に、呼吸が空気に、腹部が水になり、脚と生殖器が大地を表わしていた。

また数論の分野でも、人間を宇宙の象徴としている。ピタゴラスによれば、世界は数の力の上に成り立っており、人間の各部分を五等分することは、ヘブライ人やギリシャ人か

ら始まったようである。人体に関連する神聖な五という数は五芒星形で表わされて呪術に用いられるが、それはまたキリストの五箇所の傷ともかかわっている。人間には五感、四肢、一頭が備わり、手には五本の指がある。さらに、秘教的なユダヤ教のカバラでは数字の九、すなわち三の三倍の数は人間の力の本質とされる。この三という数字は極東の道教の教えにも肉体、生命、霊の三分割として登場する。さらに、それぞれの特質をあげれば、能動的、受動的、その中間ということができる。

人体の位置や姿勢もまた、当然、象徴的意味をもっている。なぜなら、それは精神的進歩や発展を表わしているからである。横たわる人間は休息していて受動的状態にあり、立っている人間は活動と生命を暗示している。両手足を伸ばした姿勢は、頭をふくめて角が五つの五芒星の形になる。手足だけなら砂時計のようなX形であり、すなわち世界と魂の結合を示す。腕だけを伸ばした形は十字架の形であり、キリストの磔と見なされて、天と地の結合、あるいは死と復活に結びつけて考えられるようになった。

古い伝承に、そもそも人間は両性具有の存在であったという説があり、ユダヤ伝説では、アダムは右半身は男性、左半分は女性であったが、それを神が引き離したと伝えている。これは人間が神によって造られたという説を正当化し、さらに、人間に両性が存在する理由を説明している。近代の心理学では、人間の左半身は無意識を、右半身は意識を象徴すると説く。錬金術では男と女を硫黄と水銀にたとえ、その二つから「金属」ができる

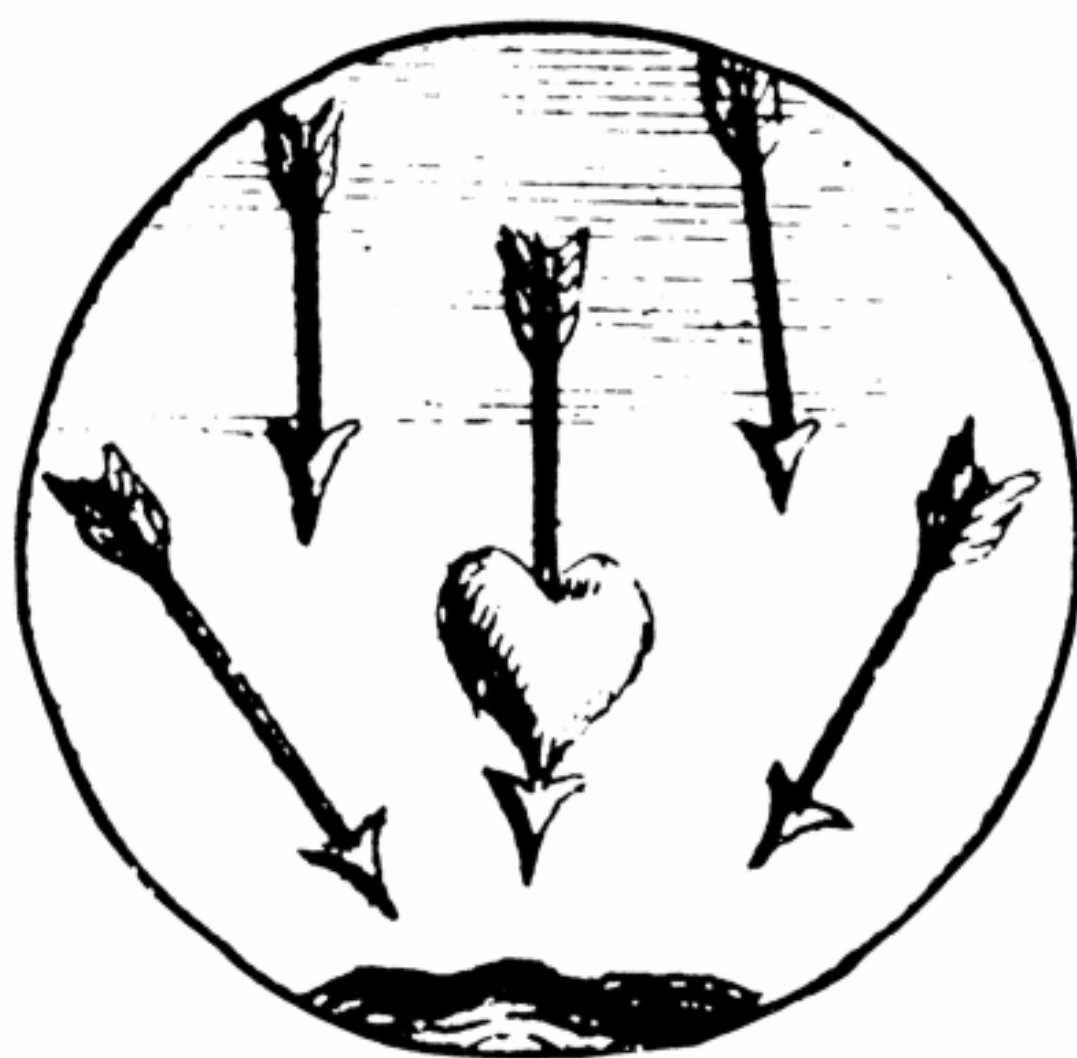
とした。また、男女の結合、すなわち意識と無意識、あるいは左側と右側の結合によって神聖な状態にいたるとされていた。

心臓

Heart

この世の頭脳を全部集めても、善き心（臓）一つにかなわない

エドワード・ブルワー・リットン
『承認されざるもの』

プラトンは人間の魂を心臓にあるものとし、心臓が感情と知性をつかさどると考えた。人間に関してもっとも重要な三点は、心、心臓、生殖器であった。心臓は人体の真中に位置するゆえに、あらゆるものの出発点であり、また、あたかも車輪の軸のように、あらゆるものが巡る中心なのであった。心臓はヘブライ人、のちにはキリスト教徒に神聖視され、愛、勇気、献身、理解を象徴した。『サムエル記』には、「人は目に映ることを見るが、主は心によって見る」と記されている。錬金術師にとって心臓は人間の体

内にある太陽ともいうべきものであった。そして、愛はすなわち特定の中心に引きよせられることを意味するため、心臓と太陽の結合は愛の象徴であり、矢をつがえたキューピッドに表わされる。

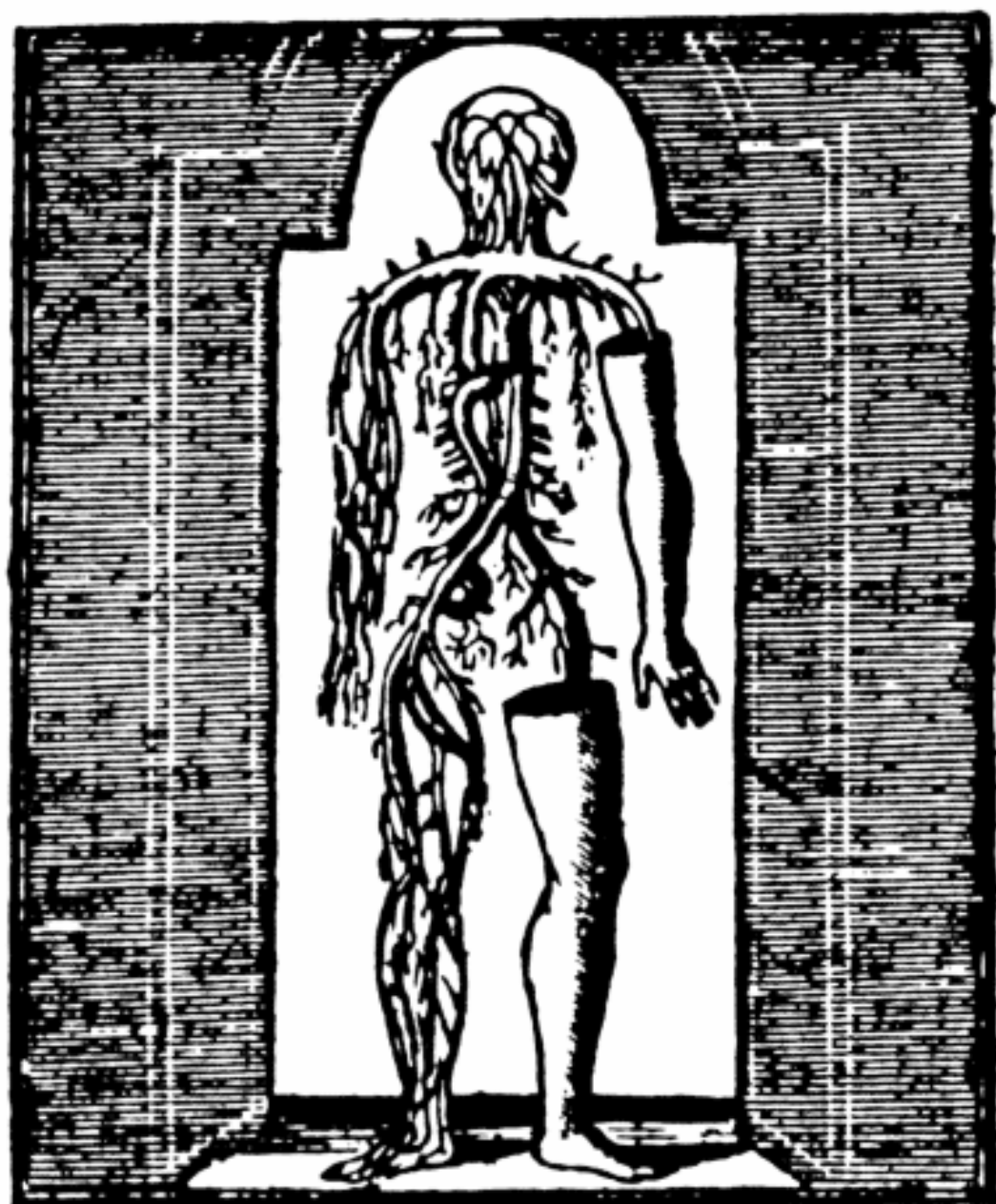
心臓はまた永遠を意味し、人間の永遠不滅の生命を確実にするために、遺体をミイラにするときには、唯一手を触れないままでおかれる臓器だった。『エジプトの死者の書』には、天秤の前に立つ人間が、自分の心臓と正義の象徴である一枚の羽とが両端の皿に乗せられ、重さを計られているのを見ている図がある。当時のもっとも邪悪な呪術は人間の心臓を奪いとることだった。しかし、やがて心臓の意味するところはキリスト教徒によって受けつがれ、キリスト、および多くの聖人を表すようになった。キリスト教徒にとって、燃えたつような熱烈な心臓は宗教的情熱を示し、矢に貫かれた心臓は、厳しい試練のもとでの悔恨と献身を象徴している。十字架をしるした心臓は、とくにシエナの聖カタリナを示す象徴であり、伝説によれば、ある日、彼女の許にキリストが現われ、彼女の心臓と自分の心臓を取り替えたという。ルネッサンスの美術では、しばしば抽象的観念が人間の姿で描かれているが、たとえば、キリスト教でいう七徳目のなかの一つである慈善は、手に心臓を持ち、まわりに遊びたわむれる子供たちを従えた女性で表わされることが多い。

血液 *Blood*

われわれの血だけが、この鉄の大地を溶かすのであっても
それはそれでよしとしよう。
無駄にはなるまい。救い主の誕生をうながすのだから。

セシル・デイ・ルイス
『もう、私を誘惑するな』

生命の力強い象徴である血液は生命の根源であり、神々の怒りを鎮めるための供物であった。古代、神への供物とされた蜂蜜、牛乳、ぶどう酒などの液体は、いずれももっとも尊い贈り物である血液になぞらえたものである。動物を生贄（いけにえ）とする多くの神話や、自らの血で人類の罪を贖（あがな）ったキリストの物語は、血が災厄と悪を避けるための重要な手段であることを示している。錬金術では、血液は生命のエネルギーを吹き込むものとして「宝石」を造り出すために使われた。カトリックのミサでは、現在でもパンとぶどう酒をキリストの肉と血になぞらえている。

申し分なく健康で、活力のあるまま死刑となり、憤怒のうちに死んだ者の血は、他の者

を災いから守ると言われていた。チャールズ一世やルイ十六世が処刑されるときに、人びとは先を争って彼らの血を求めた。血に染まった布切れやハンカチは病気や災い除けにされたのである。癲癇の古典的治療法は殺された剣闘士の血を飲むことであった。その血はまた、弱った肉体を蘇らせるとも言われた。

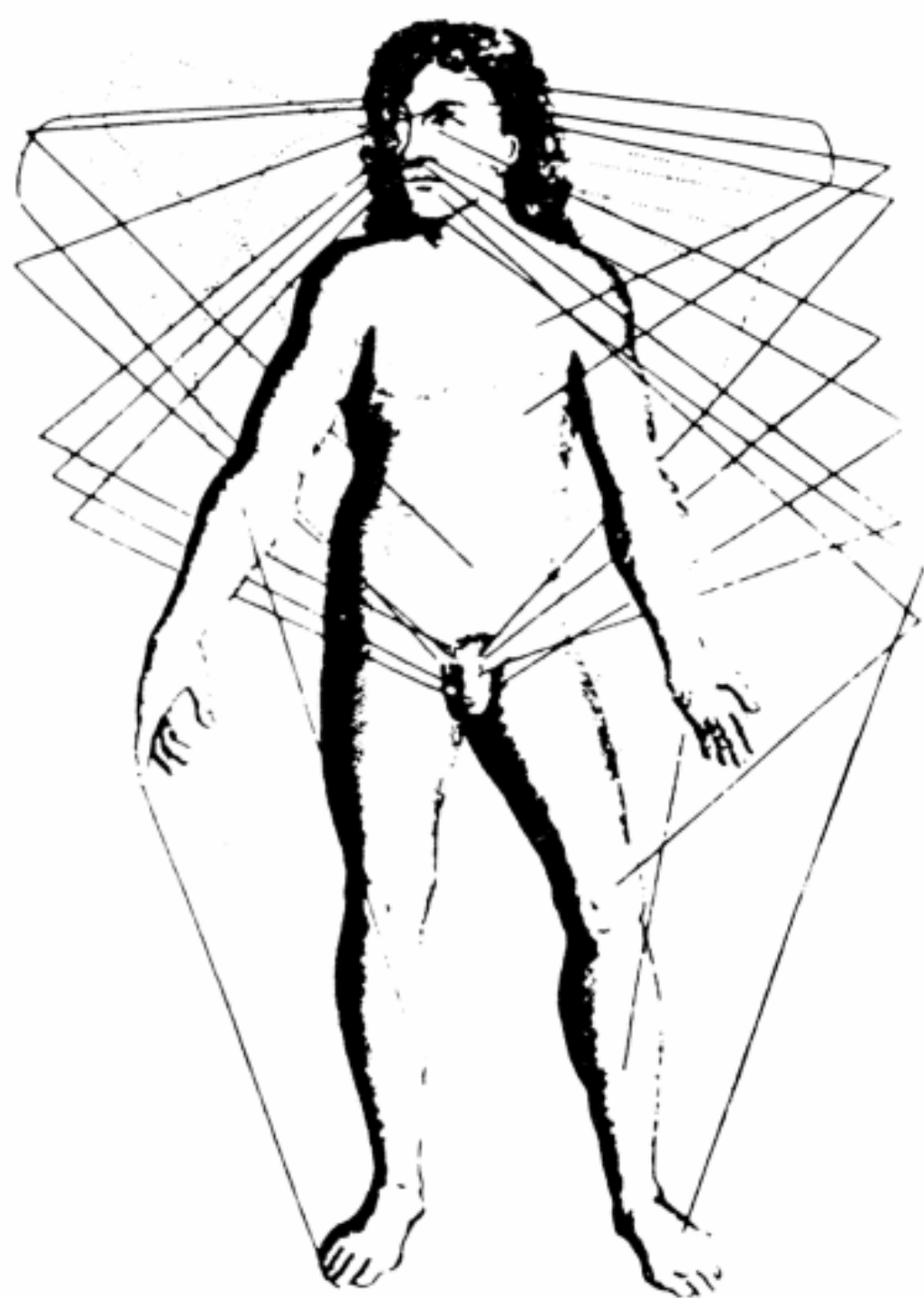
血液はその赤い色と密接にかかわりをもつ。赤い色は情熱を宿すと同時に、暴力と危難をも意味する。マルスは流血と戦の神であり、占星術では彼の運星の色は赤である。原始的な部族、そしてまたローマの初期の族長たちも、戦いにのぞんで体を赤く塗ったものであった。血のような赤はエネルギーと活力の源とされていたからである。赤はまた性的な色とされ、売春宿を示す灯として表に掲げられた。『サムエル記』のダビデはその精力と激しい気性から「血の人」と呼ばれた。今日、赤は危険信号を意味する。また、激情を表わすことから、反乱、行動、愛、勝利、恥の象徴ともされている。

頭　*Head*

王冠をいただく頭は安らかに眠ることがない

シェイクスピア
『ヘンリー四世』

人体のもっとも重要な部分として、頭はしばしば全体としての人間を表わす。中世美術では、とりわけ霊的生命と精神の象徴であった。キリストは弟子たちに絶大な影響をあたえたばかりでなく、彼らに永遠の生命と力をあたえたがゆえに、キリスト教の頭、すなわち精神的頂点に立ったのである。占星術や神話には、双頭、あるいは三つの頭を持つ生きものが登場する。双子座や、またローマ神話の二つの顔を持つヤヌスの二重性は、頭の持つ象徴性を強調する意味をもっている。地下界の女神ヘカテーはつねに三つの頭を持った姿で描かれるが、これは、地上、天上、冥界におよぼす彼女の悪の力と関連しているものと思われる。

エジプトの呪術師は切断された手足ばかりか、頭さえも元どおりにする力をもつと信じられており、ヘブライ人の間では、第一子のミイラ化した頭を占いに使っていた。頭蓋骨

で神託を占うことは古代の風習だった。眠っている人のそばに頭蓋骨を置くと、夜の間にその頭蓋骨が未来をささやくと考えられていたのである。特別の場合には、人間の頭部、あるいは真鍮製の模造品を手づくりの金の大皿にのせて占うこともあった。聖書にさえ、サメロが大皿にのせた洗礼者ヨハネの切り落とされた首を運んだと書かれている。これは古代ヘブライの伝統、儀式にのっとったものである。

頭は、世界各地できわめて神聖なものとされている。ジャワ、マラヤ、カンボジアでは、神聖な霊が宿るところとして、頭は崇拝すべき対象であるゆえに、人の頭に触れることは無礼に当たるとされている。そうした土地では、多くの者は、頭より高いところに何かが下がっている部屋に入ろうとしない。この同じ理由から、頭上に他人が住むことを避けるために彼らの家は平屋である。

髪 *Hair*

肥った、碧い眼のボビー・シャフトー
金色の髪をとかしている
永遠のわたしの恋人
すてきなボビー・シャフトー

作者不明
『わらべうた』

男性の長い髪や鬚は、男性の偉大な生命力、逞しさや叡智の力と結びつけて考えられている。頭は身体のなかでも、より高次の諸機能の象徴であり、霊魂の宿るところでもあることから、長い髪は、頭のもつ象徴的な意味をさらに強調するのである。しかし、毛深いからだは人間性の、より低俗なものと見なされ、山羊のように毛むくじゃらな悪魔の手足は、いかにも悪魔らしく卑しい存在であることを示す特徴とされていた。『サムソンとデリラ』の物語に描かれているように、髪を切ることは弱さや力

の喪失、あるいは大きな屈辱をもたらした。中世、魔女は裁判をうける前に頭髪を剃られた。今日でも、男の囚人は髪を短く刈られている。多くの伝統文化においては、いまでも剃髪は禁欲や精神的なものへの全き献身を意味している。神聖な誓いとともに、神に髪を捧げることは、すなわち人間にそなわった自然の生命力やエネルギーを神に供える儀式なのである。

古代エジプト人は、ときに全身を脱毛することがあった。遺跡から毛抜きや剃刀、櫛などが大量に発掘されているが、これは古代エジプト人が独特な清潔感や清涼感の持ち主だったことを物語るものである。し

かし礼装としては、エジプトの諸王は――ハトシェプスト女王でさえ――つくりものの鬚を細紐で顎につけていた。また男女ともに精巧につくられた鬘をつけており、この風習は後に西欧でも、禿頭のルイ十三世の宮廷でとりいれられた。十七世紀以降、鬘は富や名声、社会的地位の高さと関連づけられるようになった。またイギリスでは下院議長や法廷弁護人、判事などは、伝統にのっとって今なお鬘をつけるのである。一方、キリスト教の伝播以降、束ねずにゆるやかにたらした頭髪は懺悔を表わすようになった。これはキリストの足を涙で洗い、髪で拭うことによって、犯した罪の償いを求めた女の物語に由来すると思われる。

剃りあげた頭に一房だけ髪を残すことにも、それなりの起源がある。古代の人びとは、地下界の女王であり、冥府の神のプルートの妻であるプロセルピナに髪を一房捧げなければ、死に瀕した肉体から魂を解放することを拒まれると信じていた。またイスラム教徒が一房の髪を残して頭を剃っていたのは、モハメッド（マホメット）が死にかけた人間を天国へ引き上げるときに、頭をつかみやすくするためであったという。北米インディアンにも同じような風習があったが、それはもっと実用的な理由に基づいていた。要するに、戦いに勝った者が剝ぎとった頭皮を手で摑みやすいように、一房の髪を剃り残したということである。

息

Breath

誰もがただ一つ、あるものを持って生まれる
ほかの何よりも値打ちがあるもの—それは最後の息

マーク・トゥエイン
『間抜けなウィルソン』

息を吸い、そして吐くことは、月の満ち欠けや潮の干満と同様に、自然のリズムに従っている。こうしたリズムは自然や宇宙にあまねく見られる根源的なものであり、息が象徴するところもまた、この点にもっとよく表われている。ヨガの呼吸法は、こうした自然の形を模倣したものであり、心と体をよりよきコントロールに導き、宇宙世界との、より強い調和を目ざしている。この理論に基づけば、呼吸によって空気を吸収するばかりか、サンスクリットで「プラーナ」と呼ばれる生命エネルギーや生命力をも呼吸によって取り入れることができ

るのである。錬金術師にとっては太陽光線がこれにあたり「われわれはこの星界の金を絶えず呼吸している」とした。

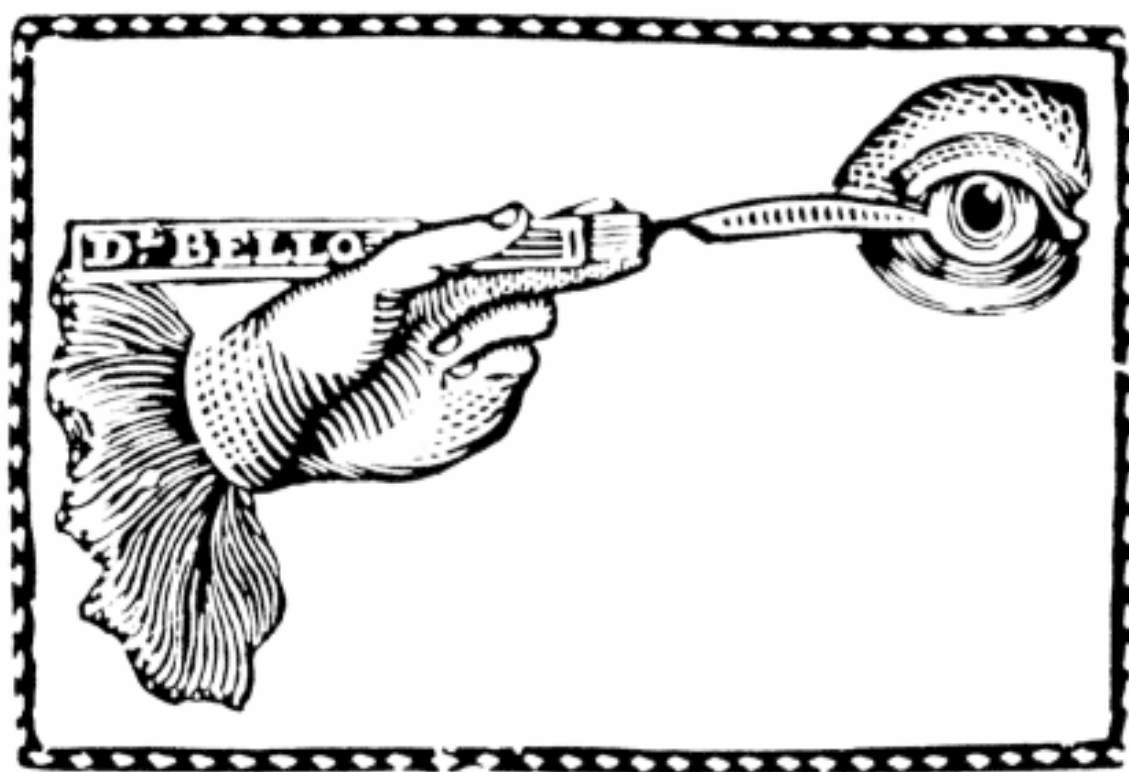
原始的な社会では、古くから信じられてきたことが誇張されていることが多い。マオリ族の間では、酋長の息は神聖であり、人を即死させる力があると信じられていた。その神聖な息が薪の火を消し、火の番をしている人間を死なせる恐れがあるため、酋長はけっして火に息を吹きかけてはならないのだった。また、王の魂は、最後の息を吐き出すとともに解放されると信じられていた。このことから、王位を争う者たちは王の床を囲み、最後の息を口や袋で受けとめようと待ちかまえていた。王位継承権獲得のためとはいえ、信じられないようなことが行われていたのである。死にゆく王を囲んだ者のうち、熱意と貪欲に勝る一人が、王がうつぶせに伏っている床に穴を開け、竹の筒で王の魂と王位を獲得したという話も残っている。

目

Eye

やがてわれわれは立ち上がり
より澄んだ目で自分を見つめる
どんな闇夜もおたがいの視界をさまたげない
穏やかな王国で

ヘンリー・キング、チチェスター主教
『愛する妻の死を悼んで』

古代ギリシャの諸学派の間で、視覚の問題は大きな論争の的であった。ある者たちは目が光を放っていると考え、また、ある者たちは見られている対象が目に作用をおよぼすと主張した。最終的にはプラトンが、少なくとも三つの過程が同時に起こっているにちがいないと断を下した。すなわち目からは聖なる火が放たれ、それが太陽の光線と結合し、同時に対象の光と結合するにちがいなく、これらの要因の組み合わせにおいてわれわれは見ることができる、というのだった。見ることに関する

こうした認識は必然的に、目とはなにかということにかかわってくる。もし太陽を光の根源と見なし、光を深い理解力と精神的価値の象徴とすれば、目そのものは頭をのぞく体全体を象徴するものでなければならない。エジプト人は瞳孔を太陽、それを包み込む虹彩を口になぞらえて「聖なる目」を描いた。これは、三角形の中央に描かれた万物照覧の神の目で示される聖三位一体の象徴に似ている。

また、目が一つであればそれは全知を象徴するが、多数の目は下位や劣等を表わす。ギリシャ神話では、額の中央に一つ目をもつキュクロプス（巨人族）は、並みはずれた力業の数々を示しており、アルゴスは百の目を持って身を守っていてさえ、一瞬の眠りにすべての目をとじたすきにヘルメスの手にかかり、死を免れえなかった。中世の悪魔は体じゅうに目のある姿に描かれ、これをもって堕落の烙印とされた。これらの目は星月夜を象徴するという解釈もあるが、その説をとれば、皮肉なことに、多くの目を持つ悪魔自身は当然ながら暗闇のなかに取り残されているわけである。

キリスト教でも、目は嫉妬と欲望の象徴とされていた。イエス自ら「もし右の目があなたをつまずかせるなら、えぐり出して捨ててしまいなさい」と言っている。塵や病菌やまばゆい太陽光線による眼病は聖書時代の人びとを苦しませ、失明すれば、それは犯した罪の報いであると言われた。

耳 *Ear*

「自由の身になる意志はありません」
と
奴隷が明言したとき
主人が彼の耳を錐(きり)で刺し通すならば
彼を生涯奴隷とすることができる

旧約聖書『出エジプト記』

ヘブライ人にとって耳は所有を象徴し、耳に開けられた穴は所有権を表わした。しかし、古代の絵画や彫刻によると、アッシリアやエジプトの人びとは富を誇示するために耳を利用した。耳に金や宝石を飾りたて、時としてそれらの飾りは、魔女や悪魔から身を守るためのお守りの形をしていた。キリスト教にはじめて耳が登場するのは、新約聖書の次の件(くだり)である。すなわち、イエスが逮捕されるとき、シモン・ペテロは剣を抜いて大祭司カイアファ（カパヤ）の手下の

耳を切り落としたという。耳が裏切りや受難の象徴となったのはこれに由来するのであろうし、犯罪者の耳を切り落として刑罰とした古い風習もまた同じ伝統の流れをくむものであろう。

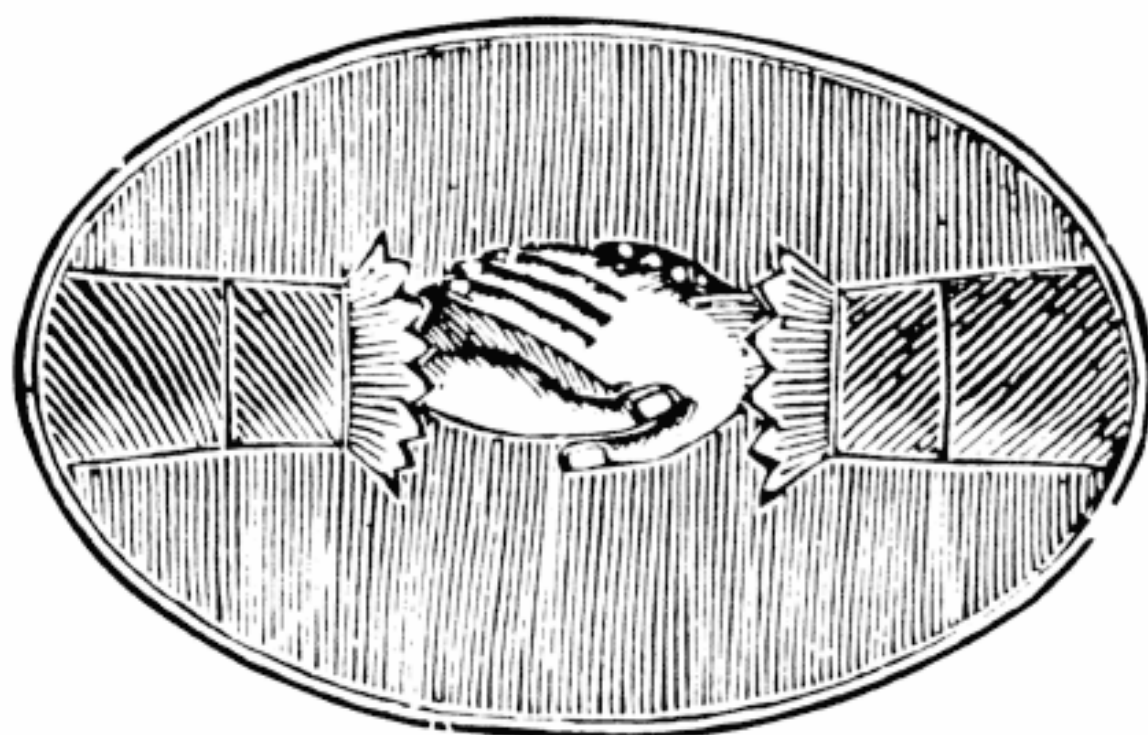
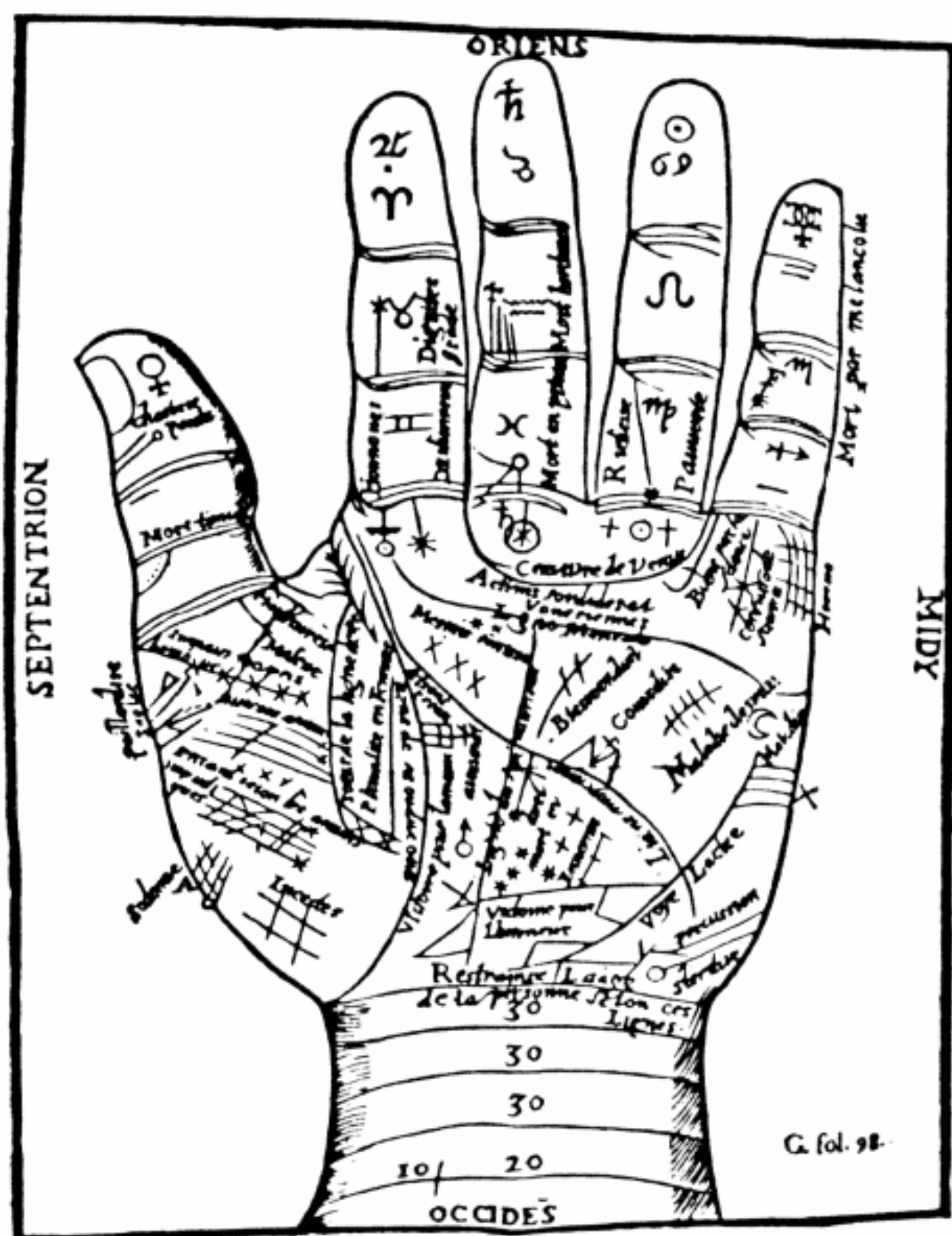
イングランドのヘースティングズ城の地下にいまも残っているような「ささやきの回廊」は囚人同士の会話を盗み聞きするのに好都合であった。牢は堅い岩を切って作られ、地下通路で宮殿へとつながっていて、宮殿には耳のような形をした聴音哨が設けられていた。こうした装置でもっとも有名なものがシラクサイの「ディオニュシオスの耳」である。

だれかに噂をされると耳がちくちくするという迷信は、古代にまでさかのぼることができる。その根拠は何なのか、起源ははっきりしないが、プリニウスもシェイクスピアもこのことに触れている。しかし、サー・トーマス・ブラウンによれば、それは守護天使が耳に触れるからであり、よい噂であれば右の耳に、悪い噂であれば左の耳に触るのだという。

手 *Hand*

あなたはそこにいまし
御手をもってわたしを導き
右の御手をもってわたしをとらえてくださる

旧約聖書『詩篇』一三九

古代のエジプト語では、手を意味する言葉は柱を指して言う言葉と関係があり、支持、力、強さを表わした。ローマ人にとっても手は保護と権威を意味し、ときに皇帝軍団の紋章として鷲の代わりに使われることもあった。初期のキリスト教徒は神の姿を描くことをためらい、代わりに雲のなかから突きだした手として描かれることが多かったが、これは神の保護と全能を表わしているのである。象徴としての手がもつ意味は、言葉の代わりに用いられたさまざまな手振りに由来する。たんなる友好の握手は、おそらく、弱者が強者に手を差し出して哀願したことから起こったものであろう。この感情表現の身振りが、身をか

がめて相手の手に口づけをするという風俗習慣に発展したが、これは今でも宗教界や王侯貴族の世界で敬意のしるしとして行われている。聖書には手の仕草に関してさまざまな記述があり、それらのもつ意味は現在でもほとんど変わっていない。手を洗うことは無実を、手を差し出すことは招きを意味する。また、だれかに向かって手を挙げれば反抗を、手を差し出せば約束や結束を意味する。

ユングによれば、手は物を生産し、創造する力を象徴する。また特殊な霊的能力のある者がその手をのせることによって、祭司や裁判官、行政長官を定め、命ずるというようなことも行われた。手による癒しの技は、イエスをはじめ数多くの人によって行われた。十八世紀のオーストリアの医師メスマーはこうした力を催眠力と呼び、現代の催眠術師と同じように、手を用いて治療を行った。し

かし、たとえばポリネシアのような民族では、逆のことが起こるのである。すなわち王や酋長の手からは神秘的な力が発散するため、接触した相手に悪をなすとされ、触れてはならないものであった。

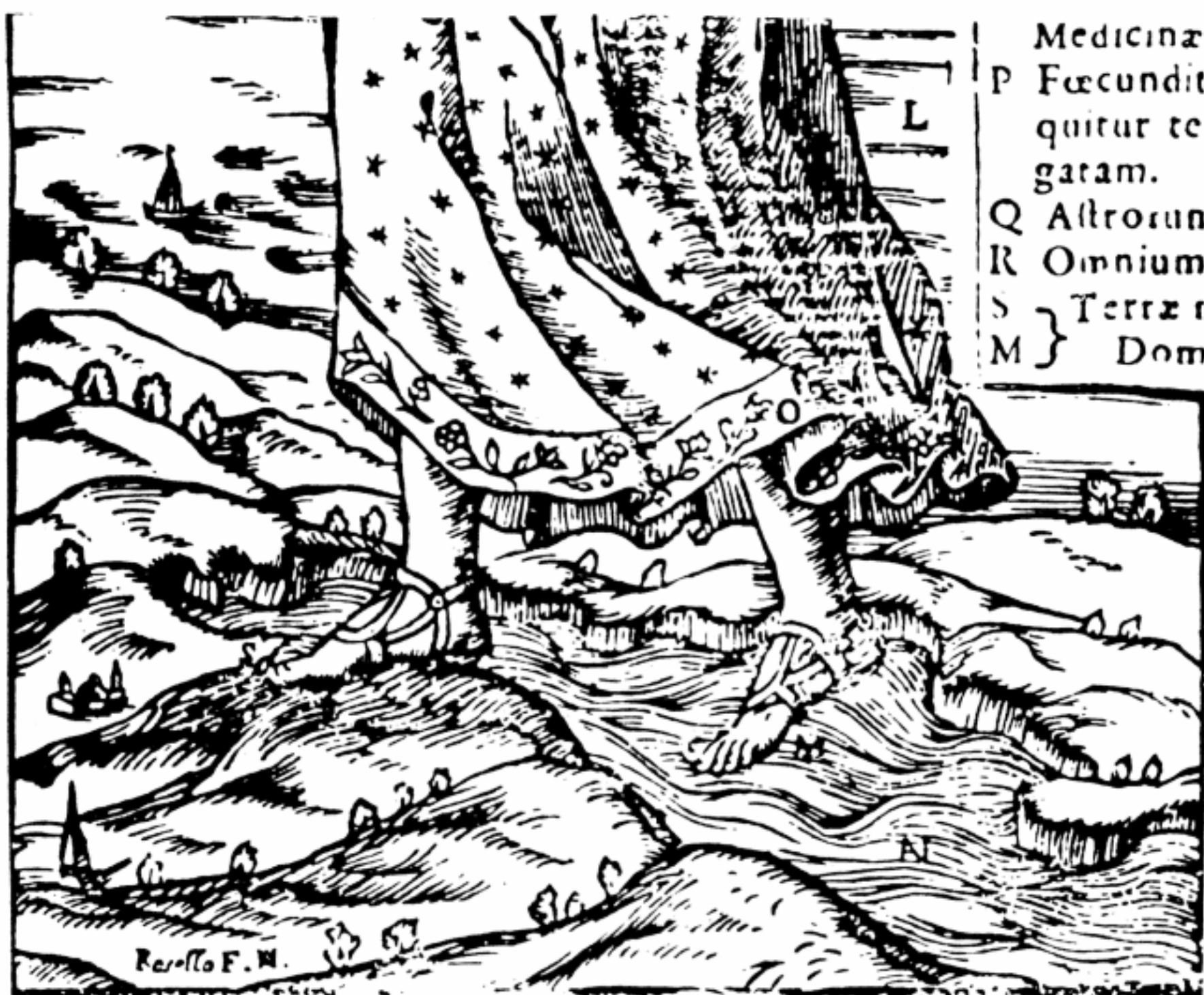
左右の手による重要さの違いは今日ではほとんど失われているが、聖書では、客についても、また最愛の息子についても、栄誉ある席は右手の側であった、ギリシャ神話では、クロノスガ父ウラノスの生殖器を左手でつかんで睾丸をとったことから、以来、左手は不吉な手とされた。左手は無意識、神秘、不吉を表わすのに対し、右手は理性、意識、男性的強さを象徴する。

つないだ手は結束や力強さを表わすこともあるが、ローマ人は組み合わせた手を糸や綱の結び目になぞらえて、物事の自由な進行の妨害、あるいは活動の妨害を表わすと考えていた。そのため、神に生贄(いけにえ)を捧げる儀式や軍事会議、あるいは重要な会合の場では、何人といえども足や腕を組むことを禁じられていた。ギリシャ神話によると、出産の女神ルーキーナが家の前に坐って手を組んでいたために、アルクメネーがヘラクレスを出産するときに長い時間がかかったという。ルーキーナが説得を受け入れて姿勢を変えないかぎり、赤ん坊は生まれることができなかったのである。

足 *Foot*

行って、流星を捕まえよ
マンドレイクの根よ、子をはらむのだ
教えてくれ
過ぎさった日々はどこへいったのか
悪魔の爪先きをひき裂いたのはだれなのか

ジョン・ダン
『歌』

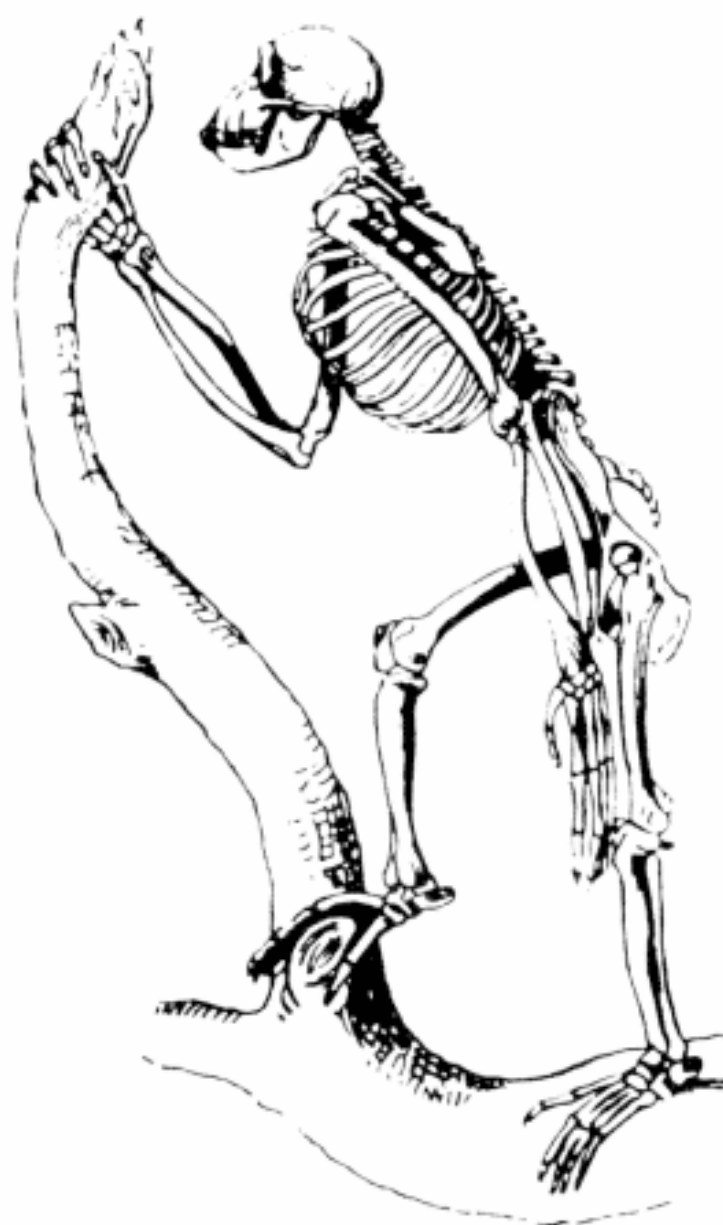
人間が直立できるのは足が支えているからであり、それゆえに、足は人間の魂を象徴すると考えられていた。ケルト神話にも同様な考え方が見られる。北ウェールズ王マトニーの息子であるマスの徳は足にあったので、騎馬で戦場に赴かねばならない戦時は別にして、そのやんごとない足はつねに柔らかい足台にのせられていた。この習慣は中世まで残り、王や神の足は、その魂と同様に傷つきやすいものと信じられていたことを示している。トロイの王子パリスの矢でかかとを射抜かれるアキレスの神話も、またメデイアのピ

ンでかかとを傷つけられたタロスの話も同じことを物語っている。ギリシャの伝説は、足の不具は欠陥ではあるにせよ、それを埋め合わせるだけの才能をともなうものとしている。ゼウスとヘラの息子であるヘパイストスの足はねじれていたが、彼は鍛冶と金属鋳造の神であり、オリュンポス山の神々のために神殿を建てたのも彼であった。しかし悪魔の割れたひづめは人間の運命を悪に導く霊のしるしであった。また、流麗、明晰な文章家であったマコーリーによれば、詩人バイロンは「彫刻家が好んで制作する頭部と、街の乞食が真似するほどの不自由な足」を

持っていたと記している。
　古代の奴隷は裸足で歩いたが、キリスト教徒が足を謙虚の象徴としたのは、おそらくこれに由来するものであろう。人体に欠くことのできない部分である足は、まさに大地に接している。このことから足跡は重要な意味を持つようになった。デンマーク人は契約を結ぶとき、おたがいの足跡に自分の血をふりかけることによって誠実を誓い、それではじめて契約は成立するのであった。またピタゴラスは人の足跡を損うことを禁じた。魂が足に宿っているものならば、いたずらに足跡を損えば、その本人を傷つけることになるからである。似たような考えは原始的な狩猟民族にもみられる。獲物とねらう動物の足跡を壊してしまえば、確実に仕留めることができると考えたのである。

骨 *Bone*

よき友よ、お願いだから、やめてくれ
ここに埋もれた遺骸を掘り起こすのは
この石をそっとしておく者に神のご加護を
わが骨を動かす者に災いあれ

『シェイクスピアの墓碑銘』

骨は死後も滅びないので復活の象徴とされている。ローマ・カトリック教会がいまなお火葬に反対しているのは、一つにはこのためであり、また原始的な社会のほとんどでは、骨に同様な象徴的な意味を認めている。南アフリカのズールー族は、非常に長命な動物の骨には、健康を回復させ、当の動物と同様な長命をもたらす力があると信じている。別の部族では、呪い師は、空洞の骨に、肉体から離れてゆく魂を封じ込めて、魂の主に返すことができるということである。頭蓋骨とその下で交差した二本の骨の図柄は死の象徴であり、海賊の旗じるしであったし、今でもオーストラリアの原住民アボリジニーは敵の方角

を骨で示して、死の呪いをかけるという。

　骨はさまざまな魔力をもっている。アボリジニーが食事のあとに残った物をいそいで始末するのは、敵とねらった相手を、その食べた動物や鳥の骨を用いて呪術をおこない、呪い殺すことができるからである。ところによっては豊作祈願に人骨を用いて雨乞いをすることもある。まず、死者の骨をつないで骸骨を組み立てて洞穴のなかに吊るし、その骸骨に水を注ぐと、死者の霊が水を集めて雨に変え、天から雨を降らせると信じられているのである。戦前の中国では、埋葬されていない亡骸（なきがら）は雨を嫌うと考えられていた。雨にさらされた亡骸は魔力によって日照りを求めるので、旱魃が起こって作物が育たない。そこで、当局は飢饉を防ぐために、すべての亡骸が埋められていることを確認せねばならなかった。

動物

宗教的な象徴としての動物は、原始的なトーテム崇拝にも、古代の遺跡から発掘される遺物にも見られる。動物は、その形態、行動、色彩などの特質や、人間との結びつきによって崇拝されていた。動物は人間からみて、より劣った存在であるがゆえに、それぞれがもつ一定の特質によって分類され、もっとも基本的には、火に付随する温血の哺乳動物類、空に付随する鳥類、地に付随する爬虫類、そして水に付随するすべての水生、両生類に分類されていた。

紀元前三千年に最初の都市文化を形成したシュメール人は、模様を刻んだ小さなアザラシの彫刻を残しており、動物モチーフはつねに他を圧して多い。古代エジプト人は、動物を非常に崇拝し、彼らの神々はおおむね何らかの動物の頭部で表わされている。たとえば、愛の神ハトルは、ふつう牝牛の頭をもっており、暗闇をつかさどるセトの頭部はしばしばろ馬の頭で表わされる。馬はペルシャの象徴であり、ライオンはバビロンの象徴である。また、メンフィスのセラピスの神殿では、彫刻をほどこした巨大な石棺に聖なる牡牛が埋葬されている。古代ローマ時代の美術にはしばしば狼、牡牛、ライオン、猪などが登場し、そうした動物はアナロジー（類比）による象徴的意味を表わしている。たとえば、

熊は逞しさとともに残忍さを表わすのである。

さらにくだって十三世紀以降、西洋で透かし入りの紙がひろまった。模様には豚、猫、ラクダ、豹、グリフィンなどがあり、これは、あきらかに神秘にかかわる起源をもつものである。現代では、シャガールやルソーなどの画家たちの目にうつった幻想的な動物像がたいへん興味深い。なぜなら、ユングによれば、夢のなかに現われる動物は、すなわち、われわれの無意識下にある、もっとも原始的な本能を表わしているからである。

ライオン *Lion*

するると、獅子の赤味をおびた目から
黄金の涙があふれ……

ウィリアム・ブレイク
『無垢の歌』

空に鷲がいるように、地にはライオンがいて、この力強く、逞しい好敵手同士は、それぞれがそれぞれの領域に君臨している。象徴としてのライオンの歴史は古く、また、さまざまな意味をもってきた。神や王の紋章として使われてきたのは、黄金と太陽との関連によるものである。錬金術では、黄金は「金属の獅子」と呼ばれ、男らしい活力、力強さの源とされた。占星術では、ライオンは黄金とともに、太陽に支配されるものであり、心臓と脊椎、すなわち勇気と力の中枢に影響をもつものであった。若いライオンは暁天にのぼる朝日に、また老いたライオンは日暮れて沈む太陽にたとえられる。

フェニキア人はライオンに神格をあたえて女神ルティとし、その伝統をうけてエジプト人は女神バストとした。これらの太陽の暖かさと豊穣を象徴し、やや小型の猫族の頭を

もっているが、元来は牝ライオンの姿をしていた。また、牝ライオンの頭部をもつ血に飢えた女神セクメットは「強力無双」で、「人間を殺すとき心が歓喜する」荒神だった。そして、その息子ネフェルテムは、しばしばライオンのうえに立ちはだかった姿で登場する。エジプト人は、ライオンを聖なる動物とあがめ、毎年七月から八月にかけてナイル河が氾濫するのは、ちょうどその時期に太陽が獅子座にはいるためとした。それを受け継いだギリシャ人やローマ人は、口から水を噴くライオンの頭で泉を飾った。バビロニアのマルデュック神殿にいたる壁には、女神イシュタルをたたえて、六十頭の釉薬(うわぐすり)をかけられたライオンが色鮮やかにあしらわれている。そしてイシュタル自身は、七頭のライオンにひかせた戦車に乗り、手に弓をもった姿で描

かれている。

サムソンと同様に、ヘラクレスもライオンと格闘して素手で締め殺し、ネメア渓谷をこの野獣の脅威から解放した。そのライオンの黄金色の毛皮は不思議な力をもっており、それをまとったヘラクレスは、青銅、鉄、石からまもられていた。小アジア、フリギア地方の女神キュベレ信仰は、はやくからギリシャに伝わっていたが、この女神は、無情な恋人ヒポメネスと、その妻アタランテをライオンの姿にかえ、末永くかたわらにはべらせたという。

パレスチナでは、ライオンは中世に絶滅したが、聖書にはしばしば登場して、比喩的に仔羊と組み合わせて一対とし、平和の象徴とされている。古い言い伝えによると、ライオンの子は死んで生まれ、三日後、父ライオンが息を吹きかけてはじめて生き返るという。キリスト教徒にとっては、これは間然するところない復活の寓喩であり、イエスは「ユダヤの民のライオン」と呼ばれた。ライオンはまた、その大いなる勇敢さのゆえに紋章として用いられる。「獅子王」と呼ばれるリチャード一世の紋章はライオンであり、のちにフランドル公フィリップ一世は意匠化して、以後、紋章として定まった。ライオン像には翼をもつものがあり、地にあるにしても天を駆けるにしても、ライオンは、王者の威、悪との戦い、そして勝利を象徴する。

熊

Bear

見よ第三の獣は熊のようであった
これは、そのからだの一方をあげ
その口の歯のあいだに三本の肋骨をくわえていたが
旧約聖書『ダニエル書』

太古の時代から、熊は粗暴で残忍なものすべてを象徴していたようである。七万年ほど昔、ほかに捕えやすい獲物は多かったはずだし、非常な危険をともなったにもかかわらず、ネアンデルタール人はすでに熊狩りをしていた。熊の頭蓋骨をのせた祭壇らしいものの遺物がのこされた洞窟がいくつか発見されており、生贄（いけにえ）を捧げるという意味合いの儀式が行われていたことは明らかである。北米のインディアンをはじめとして、日本のアイヌやシベリアのオロチョンなどの民族

は、熊を、神々と直接の接触をもつ神聖な動物として今もなお熊狩りを行っている。また、太平洋沿岸に住むハイダ・インディアンの神話は熊の姿をした部族の話を伝えており、その地方の精巧な工芸品には、そうした熊人間に発想をえてつくられたものが見られる。熊はまた、棲息するほとんどすべての地域で、もっとも一般的にトーテム崇拝の象徴動物になっている。北欧に住むラップ人にとって、熊は「百獣の王」であり、熊を仕留めることは最高の栄誉とされている。ただし、聖なる獣を冒瀆すれば非常な災厄をもたらしかねないので、いくつかの禁忌(タブー)が定められて、これは厳しく守られねばならなかった。

ギリシャ神話では、牝熊はゼウスの娘アルテミスの聖獣である。ペロポネソス半島の荒々しい山地アルカジアはアルテミスのお気に入りの狩場だった。この女神はいつも処女のニンフたちをひきつれて、双子の兄のアポロンと狩りの腕を競いあっていた。ところが、父神であるゼウスがカリストと呼ばれるニンフのひとりを見そめ、カリストは処女神アルテミスに純潔の誓いをたてていたにもかかわらず、ゼウスの誘惑に屈してしまった。やがてアルテミスがこの裏切りに気づき、ゼウスはカリストを熊の姿にかえ救い出そうとしたが、時すでにおそく、カリストがゼウスの息子を出産すると、アルテミスは彼女を矢でさしつらぬいた。そのときからカリストとその息子は大熊座と小熊座になり、ゼウスによって天上におかれることになったという。アテネではアルテミス崇拝はかなり後代までつづき、次のような伝説がのこっている。ある日、一頭の熊が少女を襲い、やむなく、少

女の兄はその熊を殺した。それをアルテミスは怒って、すべてのアテネ市民のうえに恐しい疫病をもたらした。そこでアテネの市民は、五年毎に生贄として少女をアルテミスの神殿に捧げ、すると疫病はおさまったのだった。

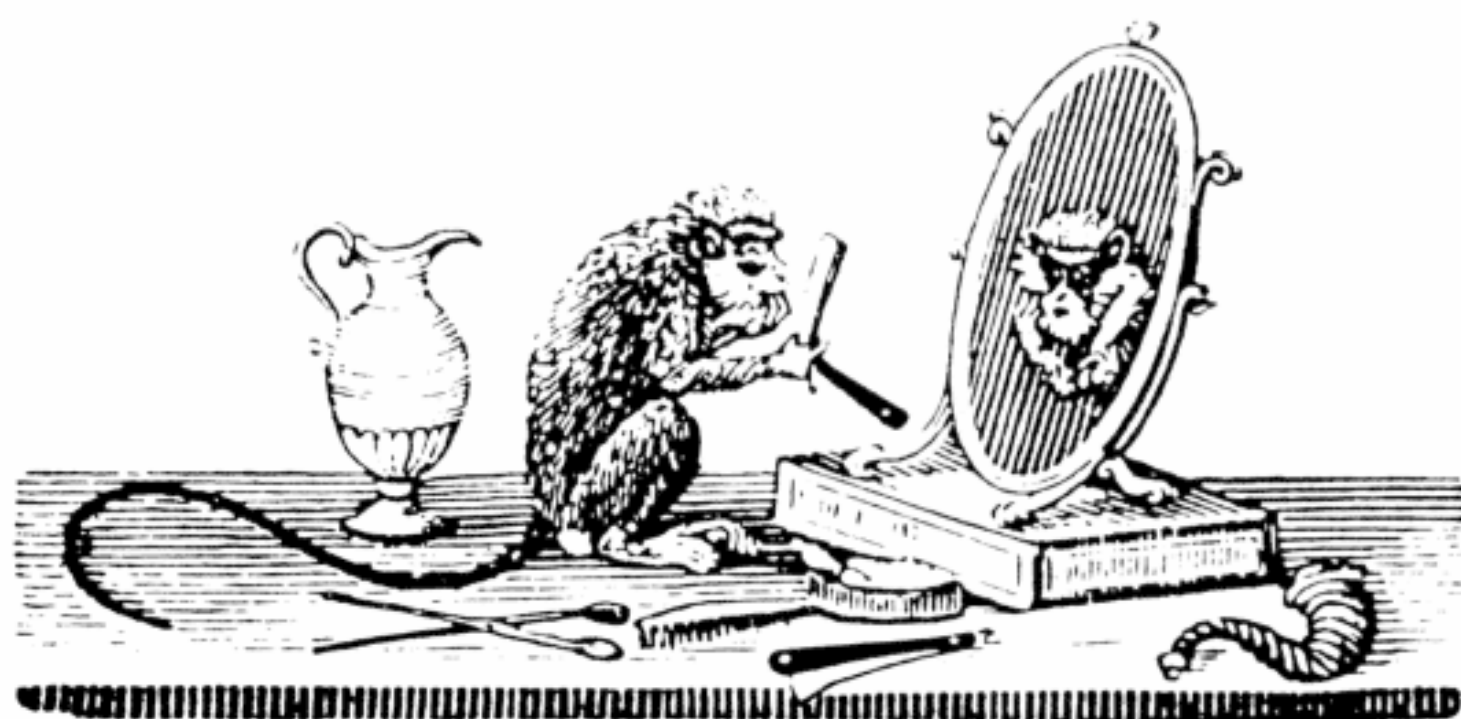
旧約聖書には、大胆にも、子供たちが預言者エリシアの禿頭をからかったところ、神は森から二頭の熊をつかわして、その子供たちを食わせたという話が記されている。また、腐敗堕落したペルシャ王国は神によってほろぼされた一頭の熊として表わされており、熊は罰と破壊を象徴するのである。しかし、キリスト教徒は、熊に、またべつのイメージをあたえている。キリスト教の伝説によれば、子熊はすべて形をもたずに生まれ、しばらく後に母熊が命をあたえるのである。これは、すべての異教徒に新たな命の体系をあたえ、キリスト教に改宗させるという教会の使命を象徴している。

猿

Ape

遠い遠い大昔、類人猿がいた。
何世紀もすぎると毛が巻毛になって
さらに何世紀もすぎると、手の先に親指がつき――人間に
――実証主義者になった。

モーティマ・コリンズ
『実証主義者』

われわれ人間の先祖は猿である、とダーウィンが言いだすよりずっと以前から、猿は一般的に、人間に共通し、しかもより粗野な、より劣った性質や、また、無知や無意識下の行動の象徴だった。キリスト教美術では、猿の姿は罪、欲望、悪意、狡猾、貪欲――そして場合によっては、悪魔そのものを表わしていた。猿のこうした特殊な象徴的意味は、強くキリスト教に根ざすものであった。それと言うのも、罪や罪の

報いという観念は教会のなかで強調され、助長されたからである。かりに、猿が原始的な、無意識下の力を象徴するものだとしても、そうした力は必ずしも下劣なもの、罪深いものを意味するとはかぎらない。他の文化では、しばしば、その逆が真になる。中国では、猿は、西洋の民話に登場する精霊や妖精の役割をつとめて、健康、成功、幸運をもたらすとされている。

エジプト人にとって、猿は、さらに意味深いものであった。猿は、エジプトではトートであり、ときとしてアピスであり、この神はのちにギリシャでヘルメスと同一視されるようになった。トートはトキの頭をもつこともあるが、しばしば聖なるヒヒの姿で表わされる。この多義性は、おそらく、月の神には鳥の姿をした神と、猿の姿をした神とがあったという、きわめて古い時代の神話によるものであろう。起源はともあれ、トートは学問の神、文学、科学、その他あらゆる芸術の発明者としてヘルモポリスに祀られていた。

兎

Hare

いったいぜんたい、わたしが息災なのは
兎の足のおかげなのか、それとも
毎朝のむテレビン油の丸薬のおかげなのか

サミュエル・ピープス
『ピープス日記』

古代のイギリスやペラスギ族時代のギリシャでは、兎は聖獣であった。エジプトでも同様であったし、さらに現在でも、北米のアルゴキアン語系インディアンにとって、兎は偉大なる聖霊であり、民族の父とされている。ヘブライ人にとって、本来は「汚れた」動物であった兎は、やがて豊饒を象徴するようになり、ときには、生殖に関連して欲望の象徴とされることもあった。行動が俊敏で、泳ぎも達者な北部地方に住む野兎は、冬のあいだには白い毛にかわ

る。三月には発情期がきて、いわゆる「三月の狂気」はこのことに由来する。
また、兎には女性的特質があるとされ、つねに女性の王族としての地位、あるいは神性と結びついてきた。ブリトンの女王ブーティカは、ローマ軍との戦いに兎をともなっていった。そして、ギリシャでは、兎は月の女神ヘカテーにつながるものとされていた。同様に、兎はサクソンの春の女神オスタラにつながるものであり、復活祭の名や習慣はこれを起源としている。元来は大型の野兎を指していたものが、今ではすっかり小型の穴兎とが混同されてしまったが、復活祭の卵を「産む」のは、昔から、いずれにせよ、やはり兎である。中国最大の祭りの一つは月の祭りであり、主役は、月に住み、不死の霊薬づくりに時を過ごしていると言われる兎である。この祭りはとくに女性と子供たちの

ためのもので、男性はけっして参加しない、なぜなら、兎は同性愛の象徴とされ、その庇護者と見なされているからである。キリスト教美術でも、しばし聖母マリアの足元に白い兎が描かれているが、これは、欲望にうちかったマリアの純潔を象徴している。

豊饒の象徴として、兎はまた、小麦の精の化身と見なされる。アイルランドのゴールウエイでは、まだ刈られていない小麦畑の最後の刈り入れは「兎刈り」と呼ばれている。最後に残した小麦は編んだり結んだりして兎の形をつくり、農夫たちが鎌を投げてそれを刈りとるのである。首尾よく刈りとった者は、意気ようようと家にもってかえり、翌年まで戸口に吊しておく。似たような風習はヨーロッパ全土でみられ、こうして将来の豊作を祈るのである。

原始的な生活をいとなむアフリカの人びとは、兎の臆病と俊敏をいちはやく見ぬいた。兎の肉を食べると共感呪術が働いて、戦士は意気地なしになるし、ねらった獲物はすばしこくなって、捕らえそこなうという。だが、兎の肉がタブーとされたのはアフリカばかりではなかった。西洋でも、中世の科学者や医者は、兎を食べると、兎の病気である「憂鬱病」の黴菌に感染すると信じ、チコリを食べさせることが治療法であった。しかし、一方では、兎は俊敏と勤勉の比喩的具現と見なされて、ゴシック時代の墓所や美術にしばしば登場する。

ロバ

Ass

ろばは荷を運ぶが、倍は背負えない
はやる馬にまかせて
乗りつぶしてはいけない

セルヴァンテス
『ドン・キホーテ』

もっとも古く、ロバは欲望や悪を象徴するものとされていた。エジプトの神オリシスの弟神であるセトは気の荒い乱暴者で、肌はあおじろく、髪は赤く、人びとはその髪をロバの毛になぞらえて嫌った。ロバの耳をもつ姿で表わされる悪神セト信仰は、殺戮と乱痴気騒ぎの酒宴をともなってひろまり、やがて、片足は真鍮、片足はロバの足をもつ悪魔エムプサエなどにつながることになる。伝説によれば、アダムの最初の妻リリスの悪なる子孫リリムは、ロバの下半身をもっていたという。オルフェウス伝説では、ロバを汚れたものと見なす一方で、

馬を非常に尊いものと見なしている。こうした見方は現在でもとくにラテン系諸国に共通してみられ、人を馬と呼べば紳士を表わし、ロバと呼べば悪罵になる。

ロバが、愚者または道化師の意味でつかわれるのは、おそらく、ギリシャ伝説のミダス王の故事に基づくものであろう。アポロンとマルシュアスの間で行われた演奏くらべで、ミダス王はアポロンを負けとした。アポロンはこれに激怒し、ミダス王の頭にロバの耳を生やすという罰をあたえた。ミダス王はロバの耳をかくすために、つねに帽子をぬがなかった。ヨーロッパの民話には、愚者とロバの関連がきわめて明確なものがいくつかあり、罰として三角帽をかぶせられれば、すなわち、侮蔑の対象になるのである。実際のところ、ロバは非常に知的な動物であり、こうしたことは、伝承がしばしば現実より強い力をもつことを例証している。

いま一つ、ロバはもっと謙虚で、もっとも忍耐強い動物であるというイメージも一般的である。これは、キリスト教に基づくものであり、ロバは、旧約聖書にもしばしば登場するが、なによりもイエスの出生と生涯にきわめて強いつながりをもっている。一例をあげれば、イスターの直前の日曜日、棕櫚（しゅろ）の聖日に、イエスはロバに乗ってエルサレムに入都し、そのロバの肩には黒い十字の永遠の印があったと伝えられている。

狐　*Fox*

戸口に草が茂れば
きつねが炉床に巣をつくる。
目から明りを奪えば
愛するものがまるで見えない。
『ウェクスフォード地方に伝わる毒舌』より

古来、狐は狡猾や悪知恵を象徴してきた。『エゼキエル書』によると、主イエスは「ああ、イスラエルよ、お前の預言者たちは砂漠にいる狐のようだ」と人びとを叱責された。中世には、狐は悪魔の化身とも、また猫や兎など、呪術にもっとも関わりの深い動物の化身とも見なされていた。これは、ケルト民族の伝承が深く根をおろしていたためであり、ケルトの人びとが同じような考えをもっていたとしても、べつに驚くにはあたらない。中

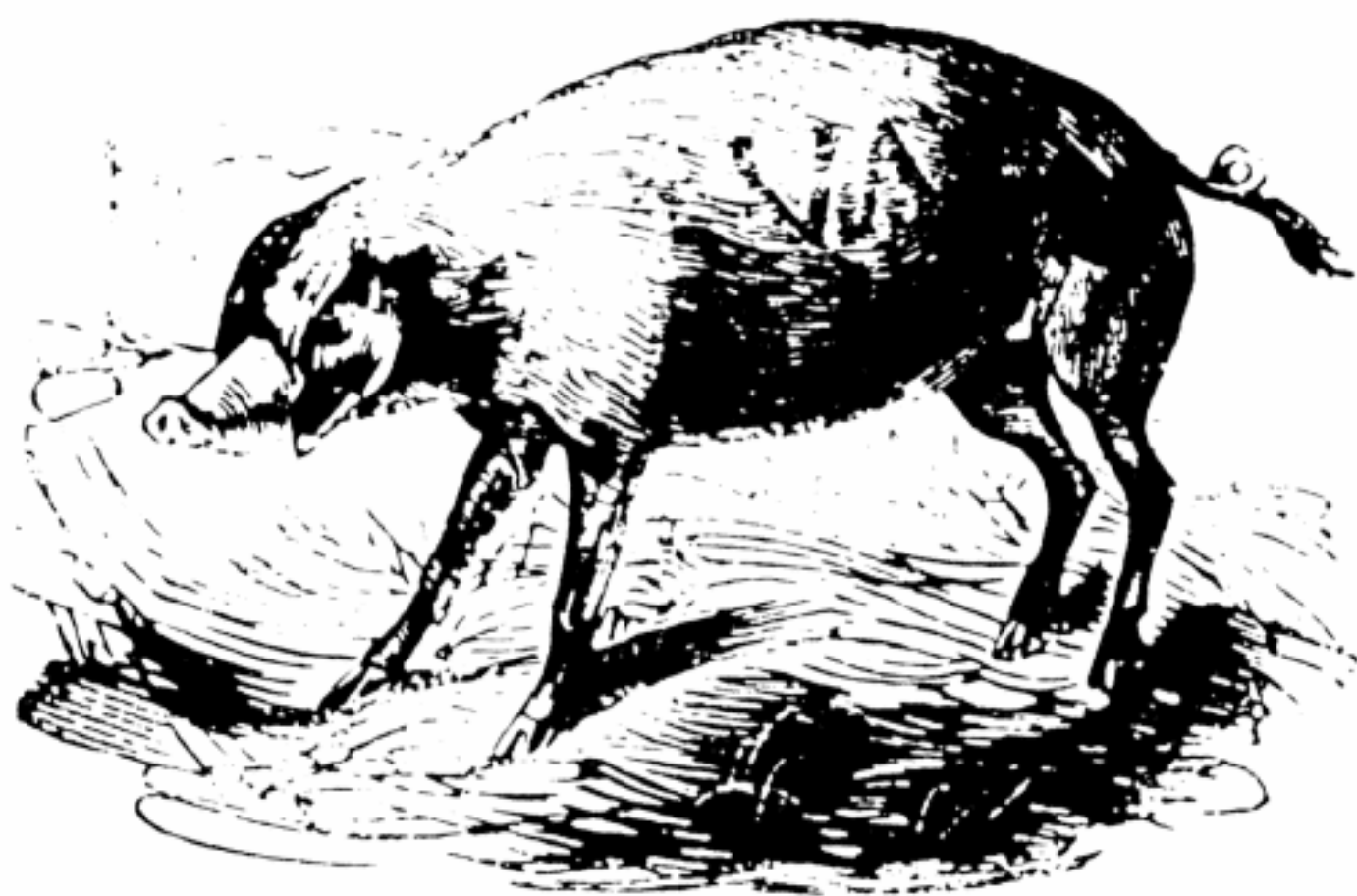
世のフランスやドイツの文学では、一般に狐はルナールという名で呼ばれて、叙事詩などで当時の生活や事件を風刺する手段として使われていた。イギリスでもルナールは継承されており、チョーサーの物語にこのルナールが登場し、また、キャクストンが一四八一年にオランダ語から訳した『ルナール狐の歴史』もその一例である。この本では、ルナールはいつも大言壮語して、結局は大嘘だったことがばれることになる。ルナールは三色の宝石がついた魔法の指輪をもっていると吹聴していた。緑の石は持ち主の姿を完全に隠し、赤い石は夜を昼にかえ、白い石はいかなる病もおなおす、と言うのだった。さらに、同書によれば「ルナール狐の名高いガラス球」の話もまた狐のずる賢さを表わしている。ルナールは、どんなに遠くからでも、どんな出来事でも、現に起こっていることがありありと映しだされるという貴重なガラスの球を、女王さまに贈ったと吹聴した。しかし、残念ながら、ガラスの球は女王のもとに届かず、ルナールの悪知恵がつくり出したほら話のままでおわったのだった。

豚

Pig

食用——口にはいり、かつ消化して栄養になるの意
たとえば、蟇蛙にとっては虫、豚にとっては蛇
人間にとっては豚、虫にとっては人間

アンブローズ・ビアス
『悪魔の辞典』

豚は貪欲や肉欲を表わすとされ、神話、伝説を通じて悪魔にも神にも結びつけられてきた。豚は非常に多産な動物であり、そのことから、大地の母であり、豊饒と耕地の女神であるデメテルに愛された。野生の豚は短く尖った牙で地面を掘り返して食物をあさり、それによって人間に耕すことを教えた。その恩に報いるために、ギリシャ人は豚をデメテルの徴(しるし)とし、また、デメテルの名において豚を生贄(いけにえ)として捧げた。その一方、豚はわが子

を食らうことで知られ、家畜になる以前は腐肉をあさり、墓で死体をさがして食べていたために、この習性を嫌ったエジプト人やヘブライ人、フェニキア人は、豚を「不浄」なものとした。

しかし、いかなる信仰も逆説をふくんでいる。古代の人びとにとって、常には戒律にそむくことであっても、ある特定の場合にはそれが戒律に添う、ということがあった。たとえば、エジプト人は、日頃は不浄とする豚を年に一度は月とオリシスの神に生贄として捧げ、冬至の祭礼の時にかぎって豚肉を賞味したのである。また、豚の乳を飲んだり、あるいは触れたりするとハンセン氏病にかかると信じられていて、たとえエジプト人であっても豚飼いだけは神殿に立ち入ることを禁じていた。忌み嫌われる豚飼いに近寄る者はなく、同じ豚飼いの家族同士と結婚するほかなかった。古今にわたって、民話の世界には豚飼いと結婚させせられる王女の話が数多くあり、ただし、豚飼い、じつは王子さまという結末になる。

ヘブライ人もまた豚肉食を禁じていたが、それは、豚を食用とし、生贄とする風習をもつシリア人やカナン人から、自分たちを区別したかっただけのことであった。歴史が示すように、ある時代には忌避される動物にも、必ず神聖視された時代があるものである。イザヤの時代にいたるまで、多くのユダヤ人はひそかに集まって旧来の宗教的祭儀をおこない、鼠や豚を口にしたことはよく知られている。

悪魔にとりつかれたガダラ人に関する聖書の記述も、豚と悪を結びつけてユダヤ人の豚嫌いを表わしている。イエスに追い払われた悪霊たちは、群れになって牧草を食べている豚に入りこませてほしいと懇願し、その結果、二千頭におよぶ豚が高い崖から落ちていった。豚の前足の内側にある黒ずんだ五つの印は、悪魔が豚の体に入ったときに鉤爪でつけた傷の跡であるという。キリスト教美術では、豚は貪欲な悪魔を表わし、したがって聖アントニー・アボットが連れている豚は、聖アントニーの大いなる悪魔払いの力と堕落に対する勝利への称賛を意味している。

猫 *Cat*

残忍なくせに、とりすまして、もの柔らかで
口かず少なく、謎めいて、気品をそそなえ
皇帝ティベリウスが猫だとしたら
坐った姿はその生写し

マシュー・アーノルド
『哀れなマッティア』

太古の昔、猫は月の女神と関連するものと考えられていた。人間はおよそ五千年の昔から猫を知っており、王の権力から悪魔にいたるまで、猫の象徴するところは多彩である。ながく猫を知るあいだに、人間は猫にさまざまなものを見て、猫の習性や色がそれを暗示していると考えた。猫は夜行性の動物であり、その目はちょうど月のように暗闇で光り、白、茶色、黒の毛皮の色は月の女神の色であった。そして、柔らかな足で、ひとり音もなく歩き、家畜としては、災厄を象徴するネズミ

をとるほかにはほとんど用をなさない。

古代エジプトの女神バストは猫の頭をもち、猫はバストの聖獣であった。バストをあがめる者は神殿に猫を捧げた。そして、猫が死ねば体に香料や香油をつめてミイラにし、王者のような葬儀をいとなんだ。野生の猫は飼いならしやすいため、家畜化してエジプト人の生活に根をおろしていったが、一方で、猫崇拝はあまりにも深く根をはって愚かしさの極みに達した。ギリシャの歴史家ディオドロスの記述によれば、火事の際、人びとは家よりも猫を救うことを優先した。そして、事故にせよ、故意にせよ、猫を殺した者は死刑に処せられたという。また、エジプト人は自分の髪をきって猫の死を悼み、遺体をミイラにして、そのためにしつらえた聖なる墓地に埋葬した。

古代ローマでは、抑圧に屈することのもっとも少ない動物であるゆえに、猫は自由の象徴であった。

猫はキリスト教以前のアイルランドにもいたようで、コノートの洞窟神殿に祭祀の跡がのこっている。この「銀の椅子にもたれた、ほっそりした黒猫」はエジプトの猫に似て、小さい頭と長い四肢をもっていた。

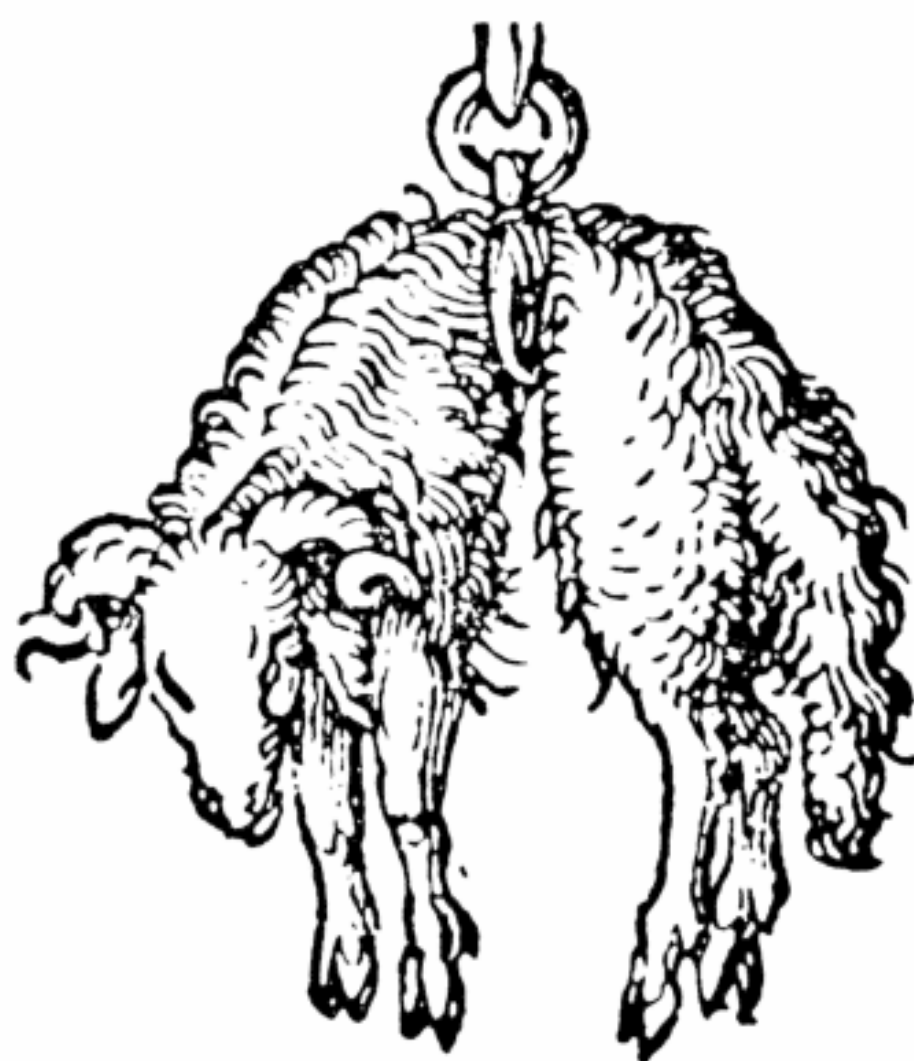
キリスト教伝来初期のヨーロッパでは猫は怠惰と肉欲をあらわし、やがて悪魔そのものを意味するようになった。とくに黒い猫は呪術や、悪魔が支配する闇の王国ときわめて強い繋りがあるとされていたため、あらゆる迫害と虐待をうけた。とりわけ黒猫は恐怖と侮蔑の対象であった。中世の魔女裁判では、黒猫それ自体が問題にされた。邪悪な猫を火あぶりにするために焚かれた盛大なかがり火は宗教的な儀式であり、そうした儀式に参加した最後の王はルイ十四世であった。当時、パリの街々では、たくさんの猫を袋づめにして焼き殺していた。人びとは嬉々としてその灰を掻き集め、家にもちかえった。魔女は追放され、灰は幸運をもたらす、と信じられていたのである。

子羊

Lamb

そして時はふたたびめぐり来る
われわれの魂は狂喜し、ロンドンじゅうの塔が
神の子羊を迎え
イングランドの緑の木陰に住まわせる

ウィリアム・ブレイク
『エルサレム』

代償的犠牲という概念は、焼いた子羊を生贄(いけにえ)にする行為を通じてひろまったと旧約聖書にしばしば記されている。またアポロン信仰の初期、神殿に生贄の子羊を捧げ、その血を予言者や占いにつかった。子羊自体は無垢、無邪気を意味していた。やがて、他の動物の攻撃に臆病、柔順、無力であることから、贖主キリストを象徴するようになった。洗礼者ヨハネはその福音書でイエスを「この世の罪をあがなった、神の子羊」と呼んだ。子羊はキリスト教美術史のどの時代にも頻繁に登場する。

キリスト教絵画ではふつう十字架あるいは勝利の旗をもち、四つの川が流れでる小さな丘に立つ「聖なる子羊」の姿で描かれる。丘は「神の家、すなわち教会」の隠喩であり、四つの川は「神の言葉」として地上に流れる四つの福音書を意味する。時として善き羊飼いとして描かれたイエスに従うのは悩める子羊であり、罪人を表わしている。

犬

Dog

われらが人民の代表諸氏を見れば見るほど
わが愛犬たちに尊敬の念をおぼえる

アルフォンス・ド・ラマルティーヌ
『ドルセイ公爵』

人間の忠実な伴侶としての犬に象徴性をあたえたのは古代エジプト人であった。砂漠の犬ジャッカルはハゲタカに似て死肉を食う動物であり、アヌビス神に化身して、最後の審判にむかう人間の魂に同伴する。犬の頭をもつ黒ずんだ人間の姿をしたアヌビスは、死者をミイラにするため処置をほどこし、また、それを墓所の入り口で受けとるなど、葬礼にかかわる一切をとりしきる。ギリシャ人はこのアヌビスを、死者の魂の案内人であるヘルメスと同一視した。

このような死と犬の関わりは、多くの神話に語られている。ギリシャやエトルリア美術は好んで神話に主題をかりたが、その一つに冥界からケルベロスをつれてきたヘラクレスの物語がある。ケルベロスは冥界の支配者ハデスのために門をまもる恐しい番犬で、三つとも五十とも言われる頭をもち、青銅の声をもっていた。ヘラクレスはこのケルベロスに素手で闘いを挑み、ついにケルベロスを地上につれだし、また返しにいったのだが、このときケルベロスのよだれに汚された草は毒草になったと言われる。

ローマ人はまた疫病と猛暑を、もっとも明るく天に輝く天狼星のせいだとした。すなわち、七月はじめ、太陽とともに天狼星がのぼると太陽の熱が倍加するというのである。したがって収穫も台なしになる。天狼星とはむろん、神によって天空の星座となったオリオンに忠実にしたがう犬、シリウスである。

死にかかわる動物として、犬はリベリアの原住民族で

あるメンデ族の素朴な神話にも登場する。この神話によると、そもそも至高の神はこの世に二つのメッセージをつかわされた。一つは人間は不死の存在であることを告げたもので、これは犬に託された。いま一つは人間は死すべき存在であることを告げたもので、これはヒキガエルに託された。ところが、犬はその貪欲ゆえに途中で何かを食べ、ヒキガエルが先についていて不幸なメッセージを届けてしまった。以来、犬はついに許されず、つねに死の知らせを運ぶ役を負うことになった。

聖書には、犬は卑しく汚らわしいパーリア、すなわち最下等の動物であると書かれている。パレスチナに近いエドムでは現に牧羊犬として有用だったにもかかわらず、犬は寧猛で「不浄」な、恐るべき死肉あさりとされていた。しかし人びとが牧羊犬と親しむことによって、やがて犬は信頼をかちとり、忠実と用心深さを象徴するようになった。キリスト教では、羊を護り導く牧羊犬を、比喩的な意味で牧師あるいは魂の群れを導くキリストの使徒を指して言うことがある。また中世の彫刻には結婚における忠実の象徴として、女性の足の下にはしばしば犬が彫りこまれている。そして時代の経過とともに、愛され信頼された狩りの伴侶として、主人の足の下に犬が彫りこまれるようになった。

ラクダ

Camel

ラクダのこぶはみっともない
動物園にいけばよくわかるが
でもね、もっとみっともないのは
馬鹿にして落ちこむ危機

ラドヤード・キプリング
『本当の話』

オリエントでは、ラクダは少なくとも三十世紀にわたって運搬や交通の手段として利用されてきた。そして、ラクダは節制を象徴する。これは、ラクダが馬やロバよりも少ない食糧で水も飲まずに非常に長時間の旅に耐えるからであろう。またラクダは「汚れた」動物と見なされていたにもかかわらず、聖書では巨万の富の証しであり、王族や威厳を表わ

すものとして記されている。ヨブは三千頭のラクダを所有していると噂にたかく、ソロモン王は貢物としてシバの女王から「長蛇の列」をなすラクダに積まれた黄金や宝石を贈られた。

マホメット（モハメッド）もまたラクダに乗って旅をし、ちょうどキリスト教でロバが果たしたような重要な役割を、イスラム教ではラクダが果たしている。マホメットがメッカを脱出したとき、カバというところでお気に入りのラクダ、アル・カスワが坐り込んで動かなくなった。そのためマホメットはそこに数日間とどまり、身をひそめていたので事なきをえた。イスラム教徒たちはこれを神からの「しるし」であるとして、マホメットの隠れ家に今も名高いカバのモスクを建てたのである。またアル・アダというラクダの伝説がある。このラクダはエルサレムからメッカまで、わずか四跳びで行ったという。神はそれを賞でて、他の少数の動物とともに楽園に住まう特権を与えた。

新約聖書には、富める者が「神の王国」に入るのは、ラクダが針の目を通るより難しい、という有名な一節がある。この言いまわしは『コーラン』やユダヤ教のラビたちの著作にもあるが、針の目を通るのはラクダではなく象になっている。

牡羊 *Ram*

山々は牡羊のように
丘は群れの子羊のように踊った

旧約聖書『詩篇』一一四

牡羊は力、創造、そして宇宙誕生の時に決定された宇宙エネルギーの具体的な活動の第一段階を象徴する。「動物の円」すなわち黄道十二宮の最初に現われるのが牡羊座であり、一気に春を迎える頃にあたる。その周期性をもつあらゆるものの第一歩に結びつけられるようになった。錬金術では「偉大なる術」すなわち「賢者の石」の製造は、太陽が牡羊座にある時にだけ始められた。占星術では、牡羊座は肉体と精神がもつ力の主要な源泉である頭部と頭脳を支配する。中世には格闘技（レスリング）の賞品はきまって牡羊であった。チョーサーの『カンタベリー物語』には、もっとも強い粉屋の話のなかに「そいつに格闘技（レスリング）をやらせりゃ、牡羊だって逃げ出

した」というせりふがある。
　エジプト神話では、ほとんど輪の形をした角の牡羊の頭をもつ神アモンは、あらゆる生命の始祖であり、守護者であり、しばしば「彼の母親の夫」とも呼ばれた。古代エジプトでは牡羊崇拝はきわめて盛んであった。なかでも有力だったのはオリシスの転身とされるバ・ネブ・ジェテトであった。しかし、人びとは一年に一度牡羊を殺して皮をはぎ、それをアモンの像にかぶせて、牡羊はすなわちアモンであることを確認するのだった。そして牡羊の死は、あたかもアモンの死であるかのように悼(いた)まれて、聖なる墓所に埋葬された。また牡羊が王あるいは神につながるものであることは、神話や聖書にくり返し語られている。アブラハムが神に捧げる生贄(いけにえ)として息子のイサクを殺そうとしたとき、神はイサクの身代わりとして牡羊を受けられたのである。

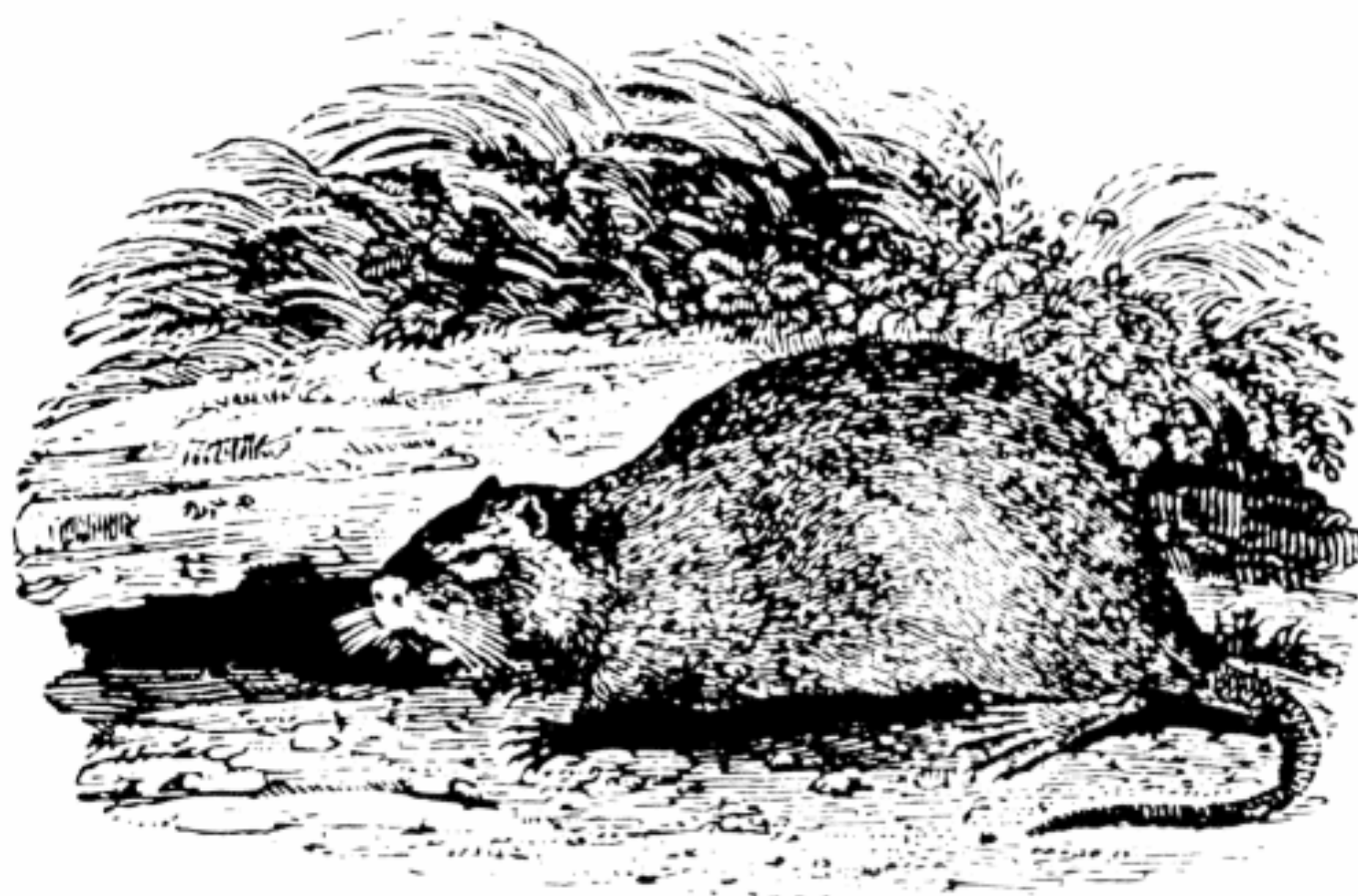
ネズミ

Rat

鼠がたてるような、ほんの小さな音にも
わたしの心臓は早鐘を打ちだす

ロバート・ブラウニング
『ハメルンの笛吹き男』

ネズミは破滅を象徴し、死と強く結びついている。大方の動物がそうであったように、エジプトではネズミもまた崇拝の対象であった。これはおそらくネズミの並みはずれた判断力や自衛能力に由来するものであろう。聖書はネズミを忌まわしいものと呼び、ネズミの害は歴史や神話を通じて古代の中国、エジプトからヨーロッパのほとんどの国々までよく知られていた。

あまり知られていないが、ネズミにまつわる伝説にポピエルというポーランドの王子の話がある。この王子は親戚の全員を宴会に招き、一人残

らずワインで毒殺した。すると何千というネズミが城を襲ってきて、王子はネズミに食い殺されるという厳しい罰を受けたという。また『ハメルンの笛吹き男』の伝説がある。ある男が多額の報酬を約束されて、ネズミの害に悩む町からネズミを一掃するという話であるが、これは音楽と死との繋りを表わすものとして非常に興味深い。男が笛を吹くとネズミがぞろぞろと町の外までついていき、川におぼれて全滅した。だが約束の報酬は支払われず、今度は子供たちが男のあとをついていき、永久に帰らなかった。この場合、笛吹き男はわれわれの内にある説明しがたい無意識の力、すなわち死への願望を表わしている。

アイルランドでは、韻を踏んだ言葉でネズミを殺すことができると信じられていた。このことについてはシェイクスピアやベン・ジョンソンも作品中で言及している。十七世紀、アイルランドの有名な芸人であるショーンハン・トルペストゥはまったく偶然にこのことを発見した。ある時、ネズミどもが夕食を食いあらしているのを見つけた彼は、思わず韻を踏んだ俗語でののしった。すると、たちまち十四のネズミが倒れて死んだという。この話は「笛吹き男」と無縁ではない。韻律は音楽に通ずるからである。

鳥

古来、鳥すなわち翼をもって空をとぶ動物は、魂や精神の昇華を象徴するものとされてきた。これは、地上の動物が固定した物質的なものを象徴してきたことと対照的である。エジプト美術では、鳥はしばしば人間の頭をもって描かれ、人間の死後に肉体から飛びたつ魂を表わした。古代ギリシャ人は、翼をもつ人体という形で愛あるいは勝利などの概念を表わした。翼はまた思考、想像力、知性、天使を表わし、とくにキリスト教の天使群のなかでも大天使、熾天使、智天使を表わした。神自身が鳥の姿で表われる場合、ふつう、ワシや白鳥などの巨鳥であった。ヒンドゥー教徒にとっては鳥は太陽から生まれ、北アメリカのインディアンにとっては「至高の存在」であった。鳥を魂を意味するものとする民話や伝承は世界中でしばしば見られるが、高潔や善だけを意味するとはかぎらない。フクロウやオオガラスのように狡猾や邪悪を意味する鳥もいたのである。

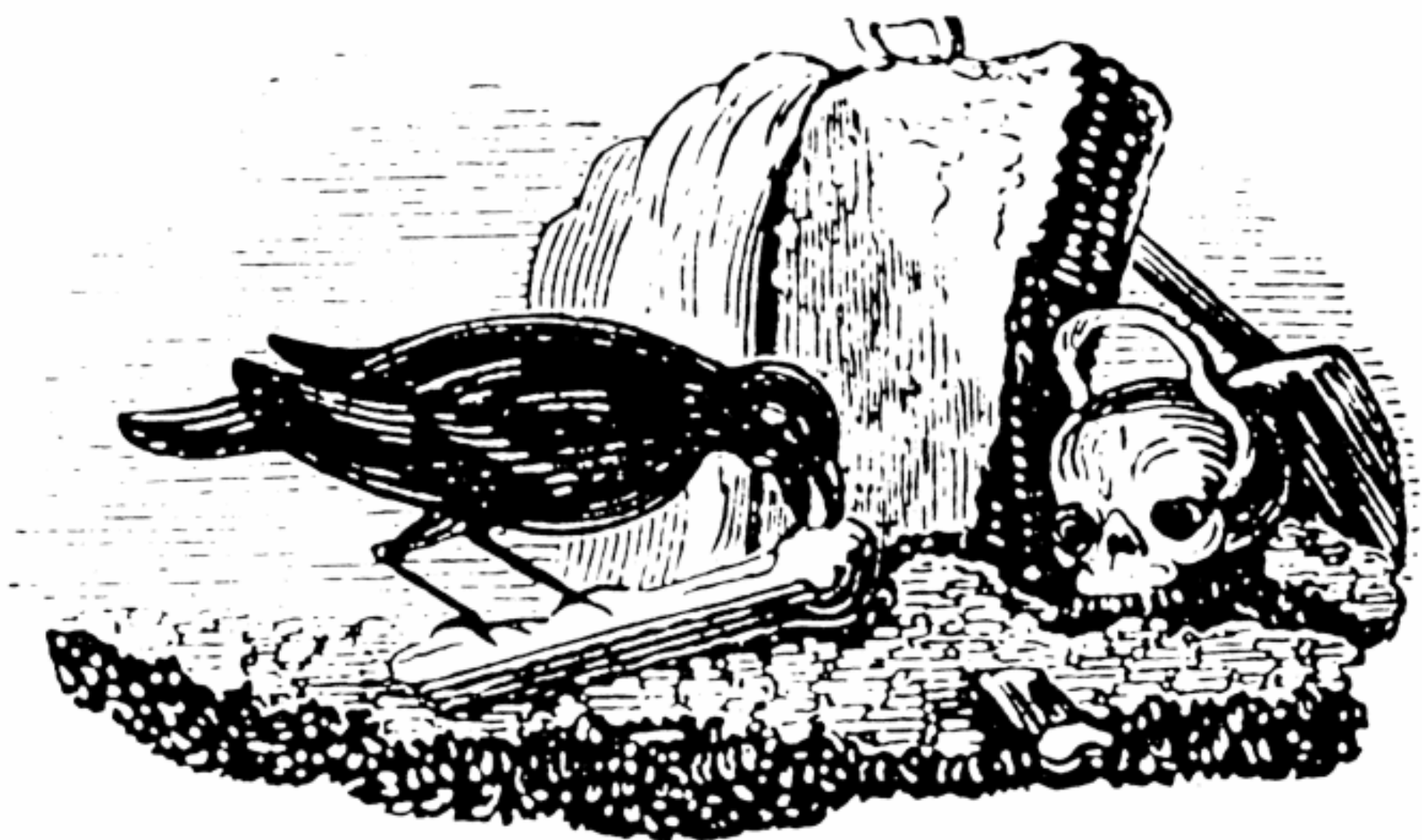
フロイトによれば、鳥は（魚もそうだが）元来男根を象徴してきたが、やがて昇華し、より精神的な愛の行動を意味するようになったのだという。お伽話では、恋人はしばしば姿を鳥に変え、また鳥が人間の言葉を話し、あるいは歌う能力を与えられて、愛を伝える役をつとめる。またヨハネの『黙示録』には崩壊したバビロンを「そこは悪霊どもの住み

か、あらゆる汚れた霊の巣窟、あらゆる汚れた鳥の巣窟」と記されており、ここでは鳥は邪悪を象徴するものとして使われている。これは、あらゆる動物を食用に適するものと適さないものに分けたモーセの戒律に一部由来するものであろう。また、ある種の鳥、たとえばハゲワシやタゲリなど、肉を食うがゆえに、あるいはまた過去において高貴な存在であったがゆえに非難された鳥もある。一方で、数の多いことは、すなわち堕落の象徴であり、それゆえにヘラクレスによって退治されたステュンパーロの怪鳥の群れのように、集団をなした鳥はつねに不正や悪と結びつけられてきた。

オオガラス *Raven*

夜の国の岸からさまよい出た
気味わるく青ざめて
老いぼれた大鴉――
夜の冥府の岸で
お前の高貴な名前は何というのか

エドガー・アラン・ポオ
『大鴉』

北欧神話の世界では、放浪の黒鳥オオガラスは多くの英雄や神々に随行して戦場へと赴いた。死者の肉を餌食とし、旗印にオーディンをかかげたデンマークの軍旗の上空高く飛び、負け戦には翼を垂れ、勝利が間近となると舞い上がった。また、北欧神話の最高神であるオーディンの両肩には二羽のオオガラスが止まっており、一羽は「知性」、もう一羽は「記憶」と呼ばれ、オーディンの耳に神託の言葉と知恵を囁(ささや)いた。ウェールズの勇者ブランは預言者であるオオガラスを戦場にともない、戦死をとげる間際に、自分の首をロン

ドンのホワイトヒルに埋めてくれと言い残した。そのオオガラスはホワイトヒルまでついていったにちがいない。そうでなければ、ロンドン塔で人に馴れたカラスの群れが、今なお英国の王冠を守っていることの説明がつかないではないか。

ギリシャ・ローマの古典時代には、オオガラスは邪悪で陰気な災いの星、土星のあらゆる性質を備えていた。キケロが敵によって暗殺された日の朝、オオガラスがこの偉大な雄弁家の寝室にはいりこみ、不吉なしわがれ声で彼を目覚めさせたという。しかしオオガラスは、ほかの文化では、より広い宇宙の力とつながりをもち、破滅に結びつくことは少ない。羽の色は肥沃な黒い土を象徴し、生命が誕生した原初の暗闇を象徴する。そして北アメリカ大陸の多くのインディアンは、この世はオオガラスによって造られたとする。オオガラスは翼をもつ創造主なのである。

元来オオガラスは白い鳥だったとする伝説がある、ユダヤ伝説によれば、大洪水のときオオガラスはノアの使いで方舟から送り出され、陸を探しにいったが戻ってこなかった。以来、オオガラスは羽にタールを塗られて、悪魔サタンを表わすようになったという。またオビディウスの『転身物語』によれば、オオガラスはアポロンの愛するニンフ、コロニスが不貞をはたらいていることをアポロンに密告した。おおいに怒ったアポロンは、コロニスを矢で射ぬき、告げ口をしたカラスを卑しんだ。すなわち「アポロンはオオガラスを黒い鳥に変え、二度と再び、白い羽をもつ姿でつまらぬことをしゃべれないようにした」のである。

オオガラスはまた孤独を象徴するものであった。この鳥はケリテ川のほとりに住む亡命の預言者エリヤを養い、そしてまた隠者パウロのために毎日パンの塊を運んだ。また中国皇帝の紋章には、オオガラスに似た三本足の不思議な鳥が日輪のなかに立つという図がある。この図は皇帝の生涯を表わし、三本の足はそれぞれ太陽の三つの位置すなわち夜明、正午、夕暮れに対応している。この紋章はまた偉大な人の孤独と孤立を示唆しているのである。

ガン・ガチョウ　*Goose*

雪雲のように、もの憂げなガン
その雪は緑の草に舞いおりて
ふざけたり、また立ち止ったり
眠たげに、誇りたかく
ああ、と悲しげに鳴くガンよ

ジョン・クローランサム
『ジョン・ホワイトサイドの娘にささげる鐘の音』

ガンはかつてインドで梵天(ブラマー)の神聖にして神秘の寝床であり、またエジプトでは生命の創造神ラーはガンがうんだ卵から生まれたとされている。そのガンも今では落ちぶれて、わらべうたに登場して愚かな人を意味するようになった。しかし、かつてはガリアの軍神マルスの神殿を飾ったのである。また世界でもっとも深いバイカル湖付近から発見されたマンモスの牙にはガンの姿が彫られていた。中国人にとって、ガ

チョウは多産を象徴し、メソポタミアのシュメール人は、美しい白い四羽のガンにひかれたときグーラの戦車は高く飛ぶと信じた。今では自明のことであっても、われわれ祖先にとっては呪術であり神秘だった。昔の人びとはガンが渡り鳥であり、近寄り難い北極圏の極寒の地で繁殖することを知らなかったのである。それゆえに、神々の特権である不死の生命を与えられた力強い不変の鳥と見なされていた。

古代ローマ人は、聖なるガチョウの群れの鳴き声がカピトル神殿をゴール人の侵入から守って以来、ガチョウを神の摂理と警戒を象徴するものとしていた。しかし、トゥールの聖マルタンにとっては、あまりありがたい鳥ではなかった。聖マルタンの最大の望みは隠修士として野に留まることだった。ところが教会とトゥールの人びとは彼を司教に望み、彼は隠れようとしたが、一羽のガチョウが鳴きたてて居所を教えてしまったために、聖マルタンは不本意ながら司教の座を受けいれることになった。

ガチョウはまた吉兆と豊饒を表わすものとされてきた。ゴールドスミスの作品中、ある居酒屋で、ガチョウの名を冠したゲームが行われ、ガチョウの紋章のところではダイスの目が二倍の得点になるのだった。またエリザベス女王以来、ミカエル祭の食卓にはガチョウのローストが供され、また、金の卵をうむガチョウの民話は諺にまでなっている。

フクロウ

Owl

あれはフクロウの鳴き声ではないか
運命の死を告げる夜番のような
このうえもなくおそろしい『おやすみ』の声

シェイクスピア
『マクベス』

エジプトの象形文字では、フクロウは暗闇の未知の地帯を通過する死んだ太陽の鳥であり、死、寒さ、夜を表わす。ずんぐりした頭と夜目のきく大きな目をもつこの鳥は、だまし討ちのようなやり方で小さな鳥やネズミをとって餌食とする。フクロウは闇のなかで目を光らせ、音をたてずにすばやく飛ぶのである。フクロウはかつてアテネでおおいに繁殖し、フクロウに似た鳥がコインに刻まれている。フクロウが知恵を表わすのは、女神アテネの使者であったことに由来する。古代ギリシャに、予言の力でアテネの右に出る者はいなかったのである。ホメロスによれば、カリュプソの住むオギュア島には、予言の力をもつウミガラスに

まじってフクロウが住んでいたという。どうやらフクロウはウミガラスから予言の術を学んだにちがいない。サレンタムの近くにはフクロウの神殿があり、ここで神託を伝えていた。

アイルランドでは海が轟くとき、それは王の死の予告であり、メンフクロウの鋭い鳴き声もまた王の死を予告するものであった。またアダムの最初の妻であり、魂をもたない悪魔であるリリスはメンフクロウの声をかりて死と破滅をもたらした。ユダヤ人はリリスの邪悪な力から身を護るために魔除けをこしらえるようになった。

ケルトの伝説では、ブロデューウェッドはフクロウに変えられ、「あらゆる鳥から嫌われた」。夫のルーを殺した裏切り行為の罰として、彼女は仲間に追われた鳥のように隠れ住むようになった。お気に入りの植物、蔦の葉のなかにいるフクロウは隠者を意味し、トマス・グレイは墓畔の『哀歌』のなかでこう言っている。

あの蔦の絡まる塔から
　救い出してやれ
鬱々とふさいだあのフクロウが
　月になにやら苦情を言っている
わたしの秘密の庵を照らさないでくれ
古くなじんだ孤独や領地を悩まさないでくれ

白鳥

Swan

白鳥はその閉じた壮麗な翼をゆっくりとふるわせ
自分のうえに、柔らかな光の陰の白いテントを張った
オルダス・ハックスリー
『レダ』

詩人のシンボルであり、詩人のインスピレーションの源であり、ウェルギリウスとアポロンの魂そのものである白鳥は、美しい姿と優雅な動きが忘れがたい印象を与える。ウェヌス（ヴィーナス）は水に映った白く柔らかく、ふくよかな自分の体を見て、白鳥を自分の鳥とした。そこで白鳥は、官能的な裸身をもち、しかも貞節な処女というイメージで詩にうたわれた。しかし、白鳥はいま一つ別の意味をもつ。水にさしのばされる力強く長い首は男性としての意図をもつものとされ、両性を表わす二重の意味をもつことによって、白鳥は満たされた欲望を象徴するようになった。この不思議な両性具有という相反する二つの性質

のゆえに、白鳥は神話のなかではもっとも深い尊敬の念をもって扱われ、また呪術的な意味をもつものとされた。騎士も、そしてまた処女も、ともに白鳥の羽をまとって変身するのである。ユピテルは白鳥となってレダのもとへ飛び、ローエングリーンはエルザのもとへ飛ぶのである。ケルト神話によればケールはある年はケルトの乙女に、次の一年は白鳥に姿を変えて、貴公子アンガスを誘惑する。

瀕死の白鳥が歌うという神秘の歌は、プラトンやアリストテレスさえ信じたが、いま一つ欲望の充足という隠された意味をもち、その欲望は死を代償とするものであった。王家の紋章、あるいは居酒屋の看板に、竪琴とともに描かれた白鳥をしばしば見るが、これは白鳥の歌についていてさらに深い説明を与えている。竪琴の音は熱情的でもの悲しく、地上の苦しみへの哀歌を奏でる。情熱的な白鳥はこの切々とした旋律と結びついて、詩人の悲劇的な死や、芸術に身を捧げた人びとのロマンティックな自己犠牲の精神を象徴するのである。

ワシ・タカ

Eagle

あのワシとわたしの運命はひとつ
運命は矢に乗ってワシを射殺す
その矢羽根に自分の羽を見たワシは
高く天に昇っていった

エドモンド・ウォラー
『彼の作曲した歌を歌うご婦人に』

ワシの嘴（くちばし）は殺しの道具、弩の矢のような急降下、鉤爪は四つの爪の錨よりも鋭い。ワシは猛禽の皇帝であり、皇帝の象徴である。アジアの勇猛なタタール族の汗（君主）たちはワシをつかって羚羊を捕らえ、またヨーロッパ中世の狩りでは、ワシは王の手首にだけとまったという。ワシは高山に住み、古代ローマの軍団は冬の陣営をワシの巣の近くに張った。

古代エジプトのファラオからアメリカ合衆国の大統領にいたるまで、ワシは権力と統治の象徴とされてきた。ギリシャ神話では、ワシは太陽であり、その鉤爪は稲妻であった。

ゼウスはワシに雷をもってこさせてティタン神族を打ち殺し、また人間に火という恐るべき贈りものをしたプロメテウスを岩山につなぎ、その肝臓をワシについばませて苦しめ罰した。北欧神話では、地に立って天を支える宇宙樹、イグドラシルの大木の頂きにワシがとまって、英雄たちの戦いをじっと見守っていた。またワシは不死を象徴する。ギリシャの詩人アイスキュロスによると、ワシは自分の羽を矢羽根にした矢によってのみ殺されるという。

古代ローマ帝国ではワシがローマの軍団の集結地点の印であることはよく知られている。高いポールの先にとまったワシは百人隊長にかつがれ、累々たる戦死者をこえて進むのである。戦闘でそのポールが壊れれば、兵士たちはワシを見つけて結集し、ふたたび体勢をととのえる。ワシを護ることが軍団の誇りであった。ワシを失うということは、すなわちローマの恥であった。

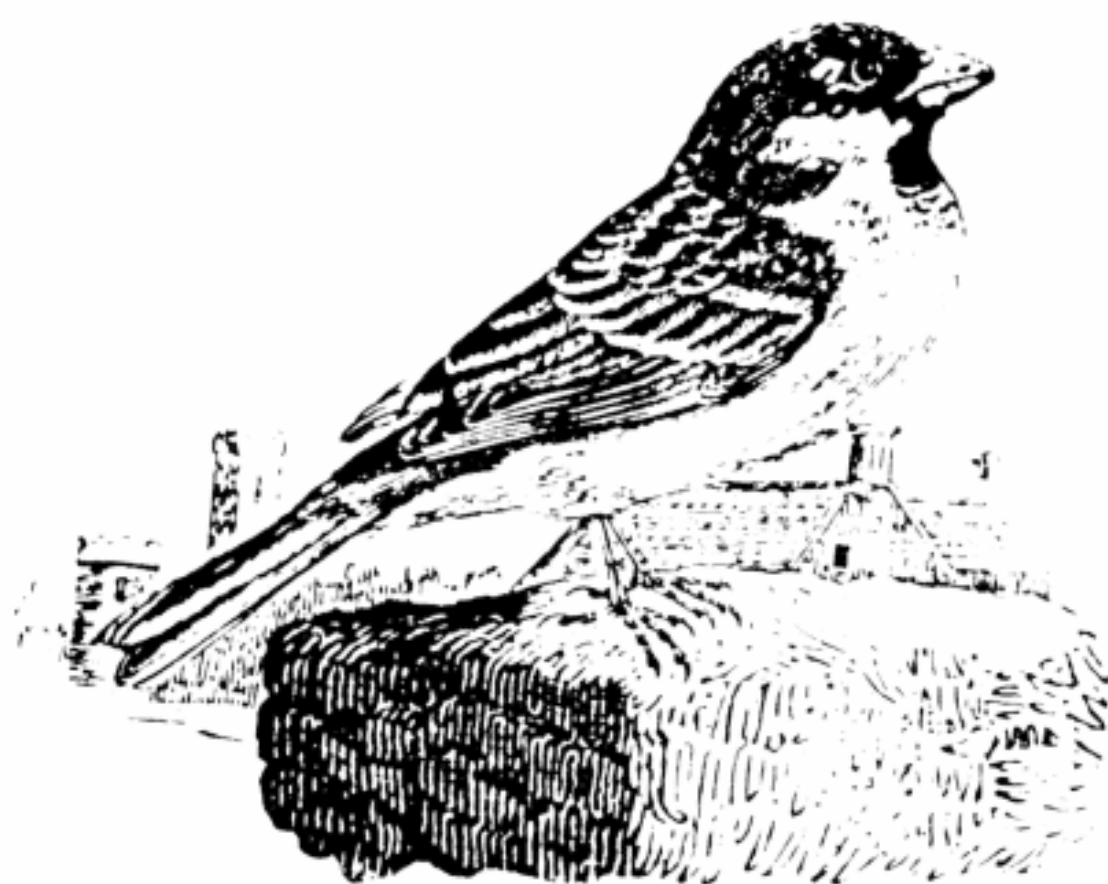
シャルルマーニュ（カール）大帝は、西ローマ皇帝の座についたとき、新しいヨーロッパの象徴としてワシを選び、のちに西洋の皇帝たちは我こそが正統ローマ帝国の後継者なりと言わんばかりにワシの紋章を用いた。ハプスブルク家、ロマノフ家、プロイセンのホーエンツォレルン家の各王家はそろってローマ皇帝の紋章を盗用し、ムッソリーニ、ヒトラーの第三帝国もまた同様であった。この偉大な猛禽はときに双刃の斧のような双頭をもち、つねに征服を予告するものであった。

ところが、平和とデモクラシーを誓う新生アメリカ合衆国もまたワシを選んだ。この新しい国は大英帝国との戦いの末に生まれ、アメリカ大陸を横断して太平洋岸にいたる途上でスペイン帝国やインディアンの国々との戦いがあったのである。しかしインディアンの酋長の頭を飾るワシの羽は彼らを救うことにはならなかった。アメリカの国鳥は実際はハクトウワシであるが、ハゲワシとも呼ばれ、死んだ魚を餌とし、また他の猛禽の獲物を横取りすることもある。オランダの諺によれば「愚行はワシの翼とフクロウの目をもつ」ということである。

雀

Sparrow

ついせんだってキャロウで殺された雀のフィリップ
フィリップ・スパロウの魂のために
あの優しい魂のために
そして、すべての雀の魂のために
黒服の尼僧に囲まれて唱えるアヴェ・マリア
ロザリオをつまぐり唱えるアヴェ・マリア
そこに主の御名もひそませて
天にましますわれらが父よ

ジョン・スケルトン
『雀の挽歌』

よく囀る(さえず)る、つつましい小鳥雀は人間の身近にあってもっともよく繁殖する。アジア、ヨーロッパ北部では多数の雀がつねに見られ、神によって造られ、神によって護られる、貧しく卑しい身分の人びとを象徴する。マタイはその福音書で「二羽の雀は一アサリオン

で売られているではないか。しかもあなたがたの父の許しがなければ、その一羽も地に落ちることはない」と言っている。
　雀の自己犠牲については『レビ記』でも語られ、讃美歌の作者も神殿の祭壇近くにしばしば巣をかける、神をうやまうこの鳥を賞めたたえている。ハトと同様に、雀もまた愛の女神ウェヌス（ヴィーナス）の友であった。そしてタロット・カードの女帝は片手に雀を捧げもち、足もとにはヴィーナスの徴(しるし)が描かれている。ウェヌスはギリシャ神話のデメルであり、アルテミスであり、さらに遡って東方の太女神マグナデアの後継者である。ヴィーナスのもつ美は、とりもなおさず女性がかかわる創造の象徴である。ローマの詩人カトゥルスは、美しい愛人レスビアの愛鳥であった雀の死を悼む詩をつくっており、その詩がジョン・スケルトンの切々たる哀悼の詩『雀の挽歌』の詩想の源泉であったにちがいない。
　卑しく生まれた者の放った矢が多くの不死身の神々の心臓を射抜き、また、マザーグースでは雀がコック・ロビンを殺している。これはジョージ一世時代の政治家ロバート・ウォルポールの腐敗堕落ぶりを暗示しているのかもしれない。あるいはまた、北欧の最善の女神バルドルの死についても何らかの関連が考えられる。

クジャク
Peacock

覚えておきたまえ
この世でもっとも美しいものは
もっとも無益なものだ
たとえばの話が、孔雀や百合の花

ジョン・ラスキン
『ヴェニスの石』

クジャクは貴婦人方のお気に入りだった。美と栄光の象徴として庭園で飼われていたクジャクはまたローマのコインにも刻まれていた。クジャクの誇示するこれ見よがしな色彩は、皇女と呼ばれるに価するすべての皇女の虚栄と誇りにいかにも似合わしいものであった。東方のいくつかの国々では、今なおクジャクの羽は名誉のしるしであるが、邪悪な目を表わしているとする国もある。この邪悪な目とは、多分に百眼の怪物アルゴス伝説とつながりをもっている。ギリシャ神話によれば、アルゴスが魔法によって眠らされ、ヘルメスによって殺されたとき、その百の目は永遠にクジャクの羽にはめ込まれたという。ク

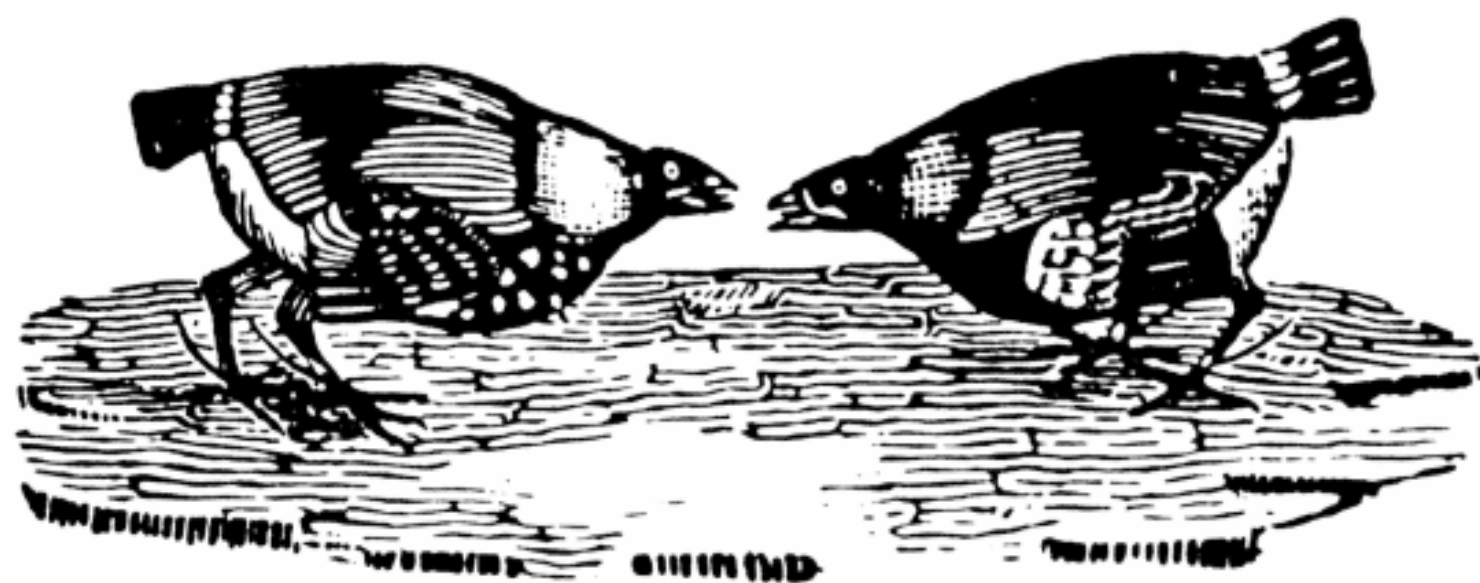
ジャクの羽根の美しい模様をなすその同じ目が、ヒンドゥー教では宇宙の星々となり、キリスト教では「すべてを見る」力の象徴となる。
　のちにキリスト教では、クジャクは不死鳥と混同されて不死を象徴するようになった。エジプトの聖バルバラはつねにクジャクの羽を手にしていたとされ、クジャクの羽はその生地ヘリオポリスの紋章になった。そしてまたヘリオポリスは伝説の鳥、不死鳥が復活した地であり、西方の世界では不死鳥は知られていなかったために、クジャクがそれに代わったのである。キリスト教徒の魂が不滅であるように、クジャクの肉はけっして腐らないとされていた。

クジャクのもつこの象徴性を示すよい例に、ヒエロニスム・ボッシュが描いたクジャクがある。彼は『アルス・サンボリカ』でクジャクの尾羽にすべての色を混合して全き統一性を表現したのである。

シャコ・ウズラ

まことにイスラエルの王はまるで山でしゃこを追うかのように
蚤一匹をねらって出陣されたのです

旧約聖書『サムエル記』

ヘブライ語でシャコは「呼ぶ、叫ぶ」という意味の名で呼ばれている。聖アンブロシウスは「シャコの声で大衆を誘惑するサタン」と言っている。虚偽と好色に関してシャコほど悪評をもつ鳥はほかになく、アリストテレスもプリニウスも、雌のシャコはただ雄シャコの呼ぶ声を聞き、あるいは匂いを嗅ぐだけで、ただちに身ごもる可能性のあることを認めている。しかし、シャコの求愛行動を見れば、そう考えるのも不思議ではない。いつでも蹴とばせるように片方の足を恋敵のほうにむけ、ひょこひょこと片足で踊る雄シャコの求愛ダンス、それを見守る雌シャコの興奮した

叫び。まるで乱飲乱舞のお祭騒ぎである。シャコたちは求愛の儀式に熱中すると、かりに人間が近づいてその中の一羽を殺したとしても、他のシャコたちは仲間の死などにはおかまいなく求愛のダンスをつづけるのである。

エーゲ海のアナフ島はシャコで有名であり、またシャコはクレタ島の神タロスの聖鳥である。ギリシャ神話によれば、タロスは女神アテナの神殿の高い頂きから突き落されて死に、アテナによってシャコ（ヤマウズラ）になったという。

シャコはパレスチナではありふれた鳥であったが、のちにキリスト教の教権と真理を象徴するようになった。しかし、聖書でははなはだしい誹り（そしり）を受けている。『伝導の書』では篭に入れられたシャコは人を欺き、隣人の不幸を喜ぶ人の寓喩である。また『エレミヤ書』には「しゃこが自分の生まなかった卵をいだくように、不正に富をなす者がいる。人生の半ばで富は彼を見捨て、ついには、神を失った者となる」とある。この『エレミヤ書』の「自分の生まなかった卵をいだく」という件（くだり）はまったく事実に反する記述である。

鶴

Crane

ジェイン、ジェイン
鶴のように背が高い
朝の光がまたたきしみながら落ちてきた

イーディス・シットウェル
『暁の恋歌』

鶴は警戒、正義、勤勉家の象徴である。古代の中国人やエジプト人、そしてまたヒンドゥー教徒にも知られていたこの古風な鳥について「すべての季節を知る鳥」と聖書は記す。それはこの鳥が夏はヨーロッパで、冬はファラオの宮殿の廃墟で過ごすことによる。鶴の群翔はことのほか美しく、その規則正しいV字形の編隊はもっと初期の象形文字に示唆を与えたと考えられている。エジプト神話では神々の書記であり、また暦の改良者であるトートはトキと同一

視されている。トキは鶴と同じ渉禽に属する聖鳥であり、形態や生態の上からしても鶴と非常によく似ている。ヒンドゥー教の神秘主義者ラーマクリシュナにとって、鶴は死と破壊の女神カーリーの聖鳥であった。彼は六歳のとき、カーリーの神殿の背後を低く飛ぶ鶴の一群を見て、法悦のあまり失神したという。

ギリシャ人は鶴と詩人を関連させていた。一つには、神々が余儀なくギリシャから逃れたときにアポロンが鶴に変身したことに由来し、また一つには、詩人イビュコスの死にまつわる挿話に由来する。ここでは鶴は正義の使者であった。紀元前六世紀の詩人イビュコスは盗人に襲われて瀕死の状態で倒れていた。そのとき、一群の鶴が通りかかり、彼は鶴を呼びとめた。すると鶴の群れは殺人者をギリシャの古都コリントの劇場まで追いつめ、罪人が恐怖にとらわれて罪を告白するまで空を舞いつづけたのである。

また、ある伝説は鶴の警戒心を語っている。それによると夜の休息時、鶴の群れはリーダーを中心にして円形をつくり、何羽かが選ばれて見張に立つ。見張の鶴は片足で立ち、片足は半ば持ち上げて石をつかんでいるという。もし眠気に襲われて警戒を怠るようなことがあれば、地に立つほうの足につかんでいた石が落ち、ただちに重大な任務を思い起こさせるというのである。

ミソサザイ

Wren

ミソサザイを撃とうよ
コマドリのロビンがボビンに言いました
ミソサザイを撃とうよ
リチャードがロビンに言いました
ミソサザイを撃とうよ
ジョンがひとりで言いました
ミソサザイを撃とうよ
みんなが言いました

作者不詳
『わらべうた』

ギリシャ人やローマ人は、小さな冠そっくりの金色の冠毛をもつミソサザイに「小さな鳥の王」という尊称を捧げた。また古代ケルト族のドルイド教の祭司たちも、その冠毛に王者の印を認めた。そして古い伝説によれば、ミソサザイが尊ばれることを怒った初期キ

リスト教徒の使節が、毎年クリスマスにはミソサザイ狩りをして殺すように命じたという。のちにミソサザイ殺しにまつわる迷信は、さまざまな形をとってヨーロッパ全土にひろまった。フランスのブルターニュ地方では、ミソサザイの雛にさわった子供は「聖ローランの火」で火傷をするといい、ミソサザイを殺した者の家には雷が落ちるという。英国のいくつかの地方では、ミソサザイの巣をとればその年のうちに骨が一本折れ、飼っている牝牛の乳に血が混ざるという。

現在では十二月の聖ステバノの祝日がミソサザイの日になり、この日ミソサザイは殉教の聖人のように酷たらしく石で打たれ、あるいは捕えられて殺される。この風習が今なお多くの地方に残っている。民間に伝わる伝承によれば、こうした古い風習は歴史的というよりは季節的な意味をもつものであり、年の変わり目を表わすものであるという。すなわち、きたるべき新しい年を象徴するコマドリは、父親殺しにとりかかる。父親とはミソサザイ王であり、その治世は終らねばならない。殺害は行われ、コマドリの胸には赤いしみがつき、一年の周期の繰り返しを邪魔するものはもういない。

泥と水に棲むもの——

魚は、あらゆる神話が生まれでた水を棲処とする主要な生物であり、また無意識下に隠された人間の本性を象徴する。進化の過程で、四大要素一つである水は固くて受容性のある要素、すなわち土と一体化して泥となり、そこに鱗や硬い甲羅で覆われた体で這いまわる爬虫類が繁殖した。そして、陸にも海にも棲処のない自然界の混血児であるトカゲ、カニ、蛇の仲間は人間の想像力を悩ます邪悪な怪物や大蛇へと変化していった。しかし象徴としては、魚はつねに善きものを意味した。魚はアッシリア、中国、バビロニアの人びとにとって多産の徴（しるし）であり、バビロニア人は魚を黄道十二宮の最後の星座として「尾」と呼んだ。バビロニアのカルデア地方にはツバメの頭をもつ魚という独得の魚座の図が残っている。ツバメは春を告げる鳥であり、一巡して新しい時の循環がはじまることを予告しているのである。

　魚はエジプト、近東を通じて重要な食物だったが、聖書は鳥や動物の名には非常に厳密でありながら、魚は清いものと穢れたものの二つにわけているだけである。ヨナのクジラでさえたんに「大魚」と呼ばれ、聖書はまた川や海をゆくすべてのもののうち、鰭（えら）や鱗（うろこ）のないものを食用にすることを禁じている。『出エジプト記』に登場するカエルの不思議な

大群は、古代ギリシャでもありふれたことだったにちがいない。アリストテレスはこれを「ジュピターの使い」と言っている。

占星術のうえで、魚座の時代は紀元後一世紀にはじまったのであるが、その年の春分、魚座が現われると同時にキリスト教という偉大な現象が出現したとされている。魚は変化のシンボルであり、無私と他者への奉仕を説く宗教、すなわちキリスト教は当時としては革命的な思想だった。魚を意味する五文字のギリシャ語は救世主イエス・キリストを表わすギリシャ語の頭文字をつなぎ合わせたものと同じであり、初期キリスト教徒は魚を救世主イエス・キリストの象徴として用いた。それゆえにイエスの弟子たちは人間の魂の漁師であり、水による洗礼は救済の源であり、そして魚は魂の復活の象徴になった。

蛇

Snake

悪魔のような蛇
奴こそが、ねたみと復讐心にかきたてられて
その狡猾さで人類の母を欺いたのだ

ジョン・ミルトン
『失楽園』

バビロンからギリシャ、インド、中国そしてヨーロッパにいたるまで、蛇は永遠を表わす象徴であり神話、文化、歴史の行く手にしばしば立ちあらわれる。エジプト神話の太陽神ラーが原初の大海ヌンの深みから生まれたとき、蛇は率先してラーを神と認めた。その蛇は、巨大な蛇オピオンの姿となって、ギリシャの女神エウリュノメの神聖な四肢にからみつき、大地の父になった。神々ばかりでなく、怪物の味方でもあったオピオンはナセネスの霊感の源泉であり、今もなおホーリー・ローラーと呼ばれ

るケンタッキーのペンテコステ派信徒たちの法悦をひき起こすのである。
神々の知恵は、すなわち蛇の知識であり、くねくねした蛇の姿は、さながら生命のあらゆる神秘と謎を秘めてうねる海の波だった。蛇たちに耳をなめられたメラムプスは予言の力を与えられ、鳥と昆虫の言葉を覚えた最初の人間となった。インド天文学の父ガルガは蛇によってその学識を得たという。生命の支配者であり芸術の庇護者である、アステカ族の翼をもつ蛇の姿をした神ケツァールコアートルは農業と冶金を教え、人びとにトウモロコシをもたらし、病から解放した。プルタークは「蛇は自らの体を食って生きる。一方、すべてのものは神から生まれでて、再び神にかえる」ゆえに、蛇自身が一種の神であると結論をくだした。自分のしっぽを嚙む蛇を象徴するウロボロスは、一つには神であり、一つには生命の「環」あるいは「輪」、すなわち再生と永遠を意味するという理由によって、キリスト教グノーシス派にとりいれられた。古代の賢人たちは蛇の脱皮は復活信仰の確証であり、また蛇は皮とともに老いをも脱ぎ捨てると考えた。

北欧神話では、人間の住む世界、ミドガルドの大蛇は悪の象徴であり、地球を一周してとり巻いている。また蛇はエデンの園の生命の木にからみつき、はじめてイヴに堕落のことばを囁いた。そしてイヴ、すなわち女は屈し、手に蛇をもつギリシャ神話の女神ヘカテーや月の女神アルテミスのように、あるいは髪の一房、一房がとぐろをまく蛇である醜悪なメドゥサのように、その心に罪の影がさしたのである。善の力に挑戦すべく闇に潜む蛇はすなわち悪魔であり、誘惑やこの世のあらゆるものに内在する悪を象徴する。しかし、蛇はまたメリクリウス（ヘルメス）の蛇杖や医学と治療の神アスクレオピスの杖にも巻きついている。善が悪によって平衡を保っているように、健康は病によって相殺されなくてはならず、モーセの青銅の蛇は、蛇の咬み傷を癒す力をもっていた。巻きつく蛇は勝利を表わすのである。

しかし、とぐろを巻いた蛇、すなわち勝ち誇った悪を表わす蛇は征服されねばならなかった。十六世紀の書『ユダヤ人アブラハム』には十字架に釘で打ちつけられた蛇の死骸の図がある。これは女の誘惑に対する精神の勝利を意味し、また錬金術における男性原理と女性原理の結合の謎を象徴している。ギリシャ人は『イーリアス』のなかで、傷ついた蛇をその鉤爪でつかんでいるワシをみた。また、磔にされた蛇はアジアの母権制社会の伝統を征服したアーリア民族の父権制社会の勝利を象徴しているのである。

カエル　*Frog*

猿が三匹ひとつにくくられ
犬が二つのプディングの切れっぱしにむせる
カエルがぽかんと大口開けてよたよた歩く

作者不詳
『わらべうた』

カエルの姿をした古代エジプトの女神ヘケットはカエルの美徳と力をもっていた。すべての両棲類がそうであるようにカエルは多産の象徴であり、太陽神ラーのじめじめした口から出てきたヘケットは腐敗のあとの成長を意味した。ナイル河の小さなカエルは輪廻を経てふたたび生まれ、豊作をもたらす洪水を告げる。ヘケットは腐りかけた穀物をよみがえらせ、太陽の復活に手をかすとされた。エジプトのミイラのうえには復活を象徴するカエル神の像が飾られたが、後に初期キリスト教徒たちはすべての異教を撲滅するために、カエルを異端であり、悪魔であるとして断罪した

のである。

それでもなおカエル信仰はまだわれわれのなかに生きている。アフリカ南部のベチュアナの戦士は、カエルのようにつるつるとすべって敵の手を逃れるように、首にカエルのお守りをつける。南米のオリノコ・インディアンにとって、ヒキガエルは今も水の神であり、カエルに雨を降らせる力があると考えて、旱魃の時にはカエルを棒で叩く。そしてヨーロッパでも、豊かな秋の収穫には雨を必要とするため、いまでも聖霊降臨祭にカエルを殺す儀式をおこなう地方がある。

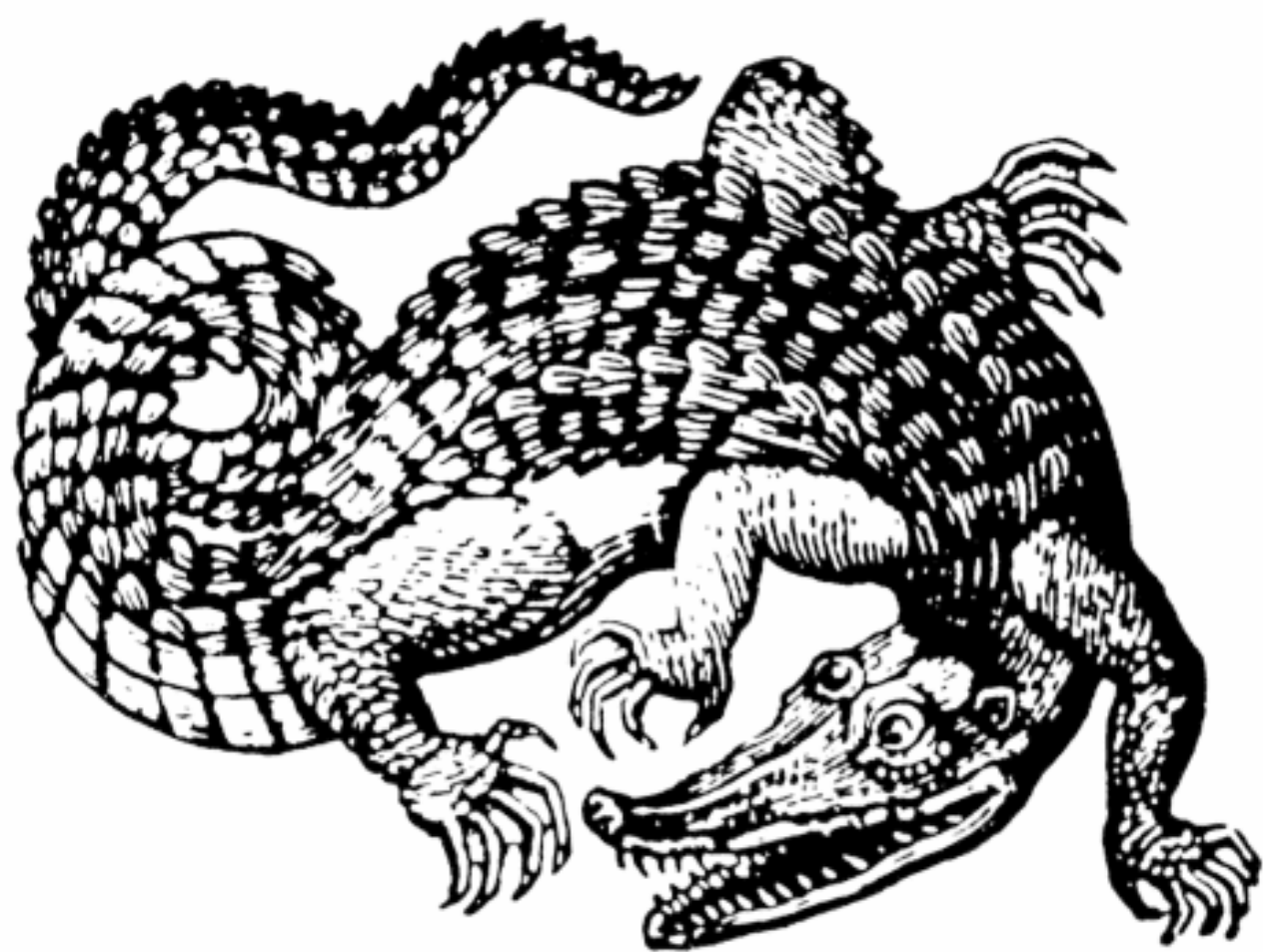
民話や伝説は太古の人類がもっていた心象、直感、経験、思考などを映しだす鏡である。なかには、王子に変身するカエルの話のようにほとんど世界中に共通して伝えられているものもある。カエルとはもっとも進化した冷血動物の一つであり、カエルは人間の先祖であったのかもしれない、とユングは示唆している。

ワニ

Crocodile

小さなワニさん、あの光るしっぽでどうやって
ナイルの水を浴びせるの
金色の鱗一枚一枚に

ルイス・キャロル
『不思議の国のアリス』

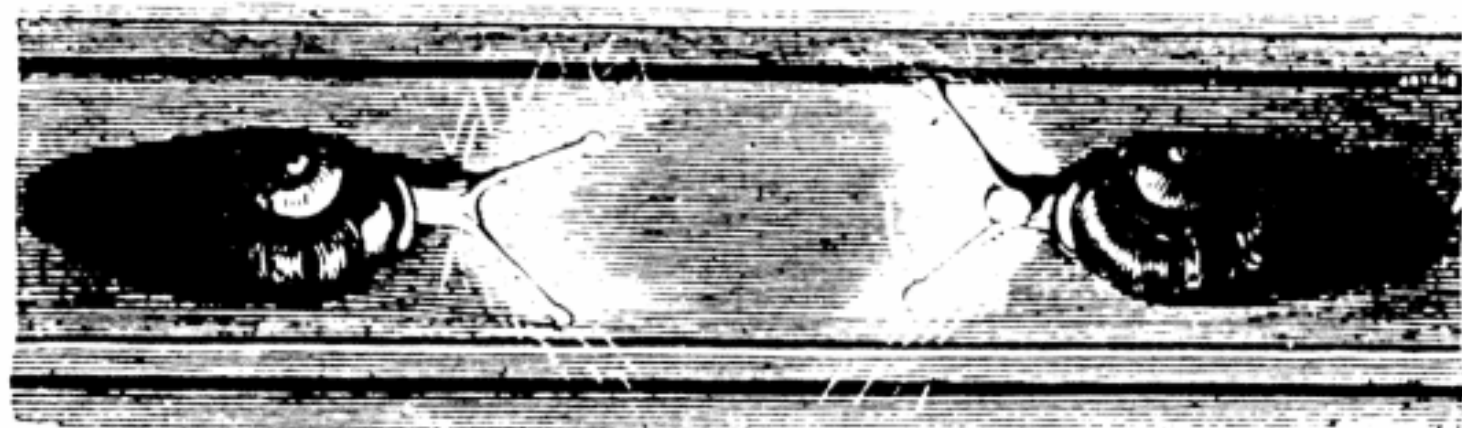
前足に腕輪をつけ、耳に金色の耳輪をはめた老ワニのペテサコスはクロコディロポリス神殿にほど近い聖なる湖に棲んでいた。エジプト中東部、ファイユム地方の人びとはエジプト神話の神セベクの化身であることのワニを信仰して、ワニ神の凶暴な怒りを鎮めるためにお菓子や蜜でつくった酒を捧げた。ワニは大蛇や竜と同じく知の象徴とされ、信者にとっては全知の象徴であった、神の化身であるワニは、透明な膜でおおわれた目ですべてを見とおすが、自分自身を見ることはできなかった。ワ

ニの歯は凶暴だが一年の日数と同じ数があるという、アピスの神聖な七日間はだれをも傷つけなかった。
　プルタークによれば、ワニは「舌のない唯一の動物であり、神の御言葉のように言葉を必要とせず」力と美徳によってのみ雄弁に物語るゆえに、エジプトの人間の崇拝を受けたのである。プラトンやグノーシス派による創造主デミウルゴスが、世界を創造するために浮かび出てきたように、大地と水のあいだのどこかに棲み、ぬかるんだ河岸を産卵のためによじ登ってくるワニは物事の始まりと多産の力を象徴するのである。またタロットの二十一枚目のカードのように、時として、ワニは「物質的な生活」の固い陸地から、霊的な体験の「神秘の深み」に没入することを表わすとされる。
　ペテサコスすなわちワニは、その後何世紀にもわたって原住民の畏敬を受け、報復以外の目的で殺されることはなかったが、食物を捧げ、崇拝する者もいなかった。ところが、今日アフリカ中央部のヴィクトリア湖の湖岸にルテンビと呼ばれる老ワニが棲んでおり、世々代々毎朝毎夕、ルテンビは漁師の呼び声にこたえて、人びとの手から供物を受けとるという。

カタツムリ

Snail

カタツムリ、カタツムリ
角だせ
パンやるぞ
大麦もやるぞ、角をだせ

作者不詳
『わらべうた』

カタツムリをおびきだす唄は世界中のほとんどあらゆる言語に存在し、ヨーロッパ全土、ロシア、中国にわたって民話にも登場する。また、スコットランドやイングランドの各地にはカタツムリを手にのせて蠟燭（ろうそく）のあかりにかざし、繰り返し唄を歌って殻からさそい出すという伝承遊びがあった。カタツムリが唄に応じて出てくれれば好天の予告である。カタツムリはしばしば作物を食い荒すが、おそらく、天気がよければカタツムリも出てくるし、また豊作になるという意味をもつ

のであろう。

キリスト教徒は、カタツムリと、その棲処であり餌であるじめじめした泥とを結びつけて考えた。泥水はまた豊饒の源であることを忘れ、怠惰の罪の象徴、そしてまた精神の堕落の象徴という汚名をカタツムリにきせたのである。しかし、メキシコのアステカ族はキリスト教徒が罪あるものとしたカタツムリに栄冠をかぶせた。彼らにとって大巻貝は月の神であり、真珠や貝殻とともに、海、月、女性から出現する出産の聖なる力を表わした。

カタツムリが背負う螺旋形の家もまた意味深い。螺旋模様は古くからさまざまな装飾芸術に見られ、単純な曲線であったり、また右巻きの、あるいは左巻きの渦巻きに似た形になったりする。これは宇宙の進化の表象であり、無限の環であり、カタツムリにとっては背負いつづけねばならない崇高なお荷物である。

イルカ

Dolphin

イルカのような死
苦悶にあえぐたびにイルカは新たな色に染まり
この上なく美しい最期のひと息
ついに——死がきて
そしてすべてが灰色になる

バイロン卿
『ハロルド卿の巡遊』

海にあるもののうちで、もっとも強く、もっとも速いものの一つであるイルカは救済を象徴し、また人間の友である。嵐のあと海が凪ぐとイルカは船を導くかのように船乗りたちのまえに現われる。水面をかすめるイルカの色は、いっそう明るく鮮やかに見えるのである。海の王国を支配する海神ポセイドンは感謝のしるしにイルカ

を天空の星座とした。それというのも、デルピニオス（イルカ座）が熱弁をふるってポセイドンの言いわけを弁護し、説得しなければ、美しい海の精ネレイスのひとり、アムピトリテは、ポセイドンの妻にはならなかっただろうから。

キリスト教美術では、イルカは海をわたって天国へ死者の魂を運ぶものとして描かれることが多い。そのためイルカの意匠は教会や、ときにはキリスト自身を表わすようになった。しかし当時の画家たちはクジラを見たことがなく、ヨナを呑み込んだ「大魚」はイルカの姿で描かれクジラと同じくキリストの復活を意味した。錨に絡みついた形で描かれるイルカは、一時的にその速さが抑えられるので、この場合は慎重や抑制の象徴とされる。

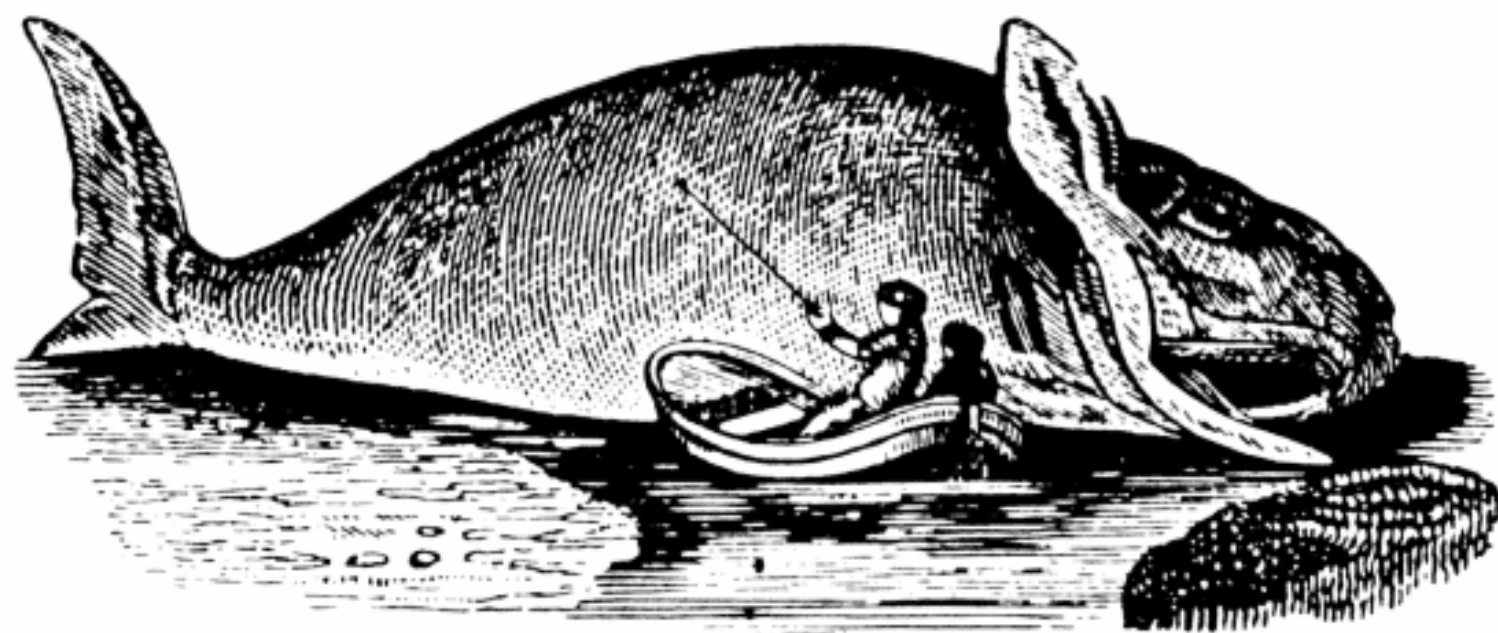
一方が上をむき、もう一方が下をむいてつながる二頭のイルカは回帰を表わし、自分の尾を咬む蛇と同じく、時間の連続性を意味する。輪になったこのイルカは、フランス中西部ヴィエンヌ伯爵ギー九世の紋章であったが、その後イルカの紋章は王族のものとされるようになった。ブルボン家やヴァロワ家の時代、フランスの王位継承者はル・ドウファン（皇太子、イルカの意）の称号をもっていた。これはおそらく永続する君主制、家臣にとっての救世主、またフランスの王位を象徴するものだったのであろう。

クジラ

Whale

針に竜のしっぽの餌つけて
それから岩に立ち、クジラめがけてひょいと糸をなげた

サー・ウィリアム・ダヴェナント
『ブリタニア・トライアンファンズ』

大きくあいた口は、さながらぽっかりとあいた地獄の門。昔、水夫たちをあざむいて島かと思わせた巨体。殺し屋、クジラはいまも太平洋沿岸ではもっとも馴染みぶかく、もっとも恐れられる海洋動物である。船を転覆させ、獲物を荒らすクジラは、漁師にとっては脅威であり、邪悪な怪物であったが、インドの神話にはしばしば高貴な動物として登場する。クジラの類は陸をはなれ、海に逃れることによって進化した唯一の哺乳類である。イルカとは非常に近い類縁関係にあるが、象徴としてはあまり類似していない。

何世紀にもわたってクジラは漁の対象として追われ、人間の強敵であることを証明してきた。クジラの骨、脂、皮、歯はいつの時代も人間にとって貴重な品々であり、こうしたものを人間に提供するからには、マダガスカルであれ、シベリアであれ、グリーンランドであれ、どこにあっても神聖視されるのは当然であった。エスキモーの人びとは白鯨を殺すことに関して多くのタブーをもっている。白鯨の魂は死後も四日間はその体にとどまると信じられているのである。クジラの魂は目には見えなくてもあたりにいて、驚いたり傷ついたりするのかもしれないので、村人はそのあいだ仕事をやすみ、物音をたてず、鋭いものや鉄の道具の使用を禁じられる。

クジラは寓意として海の怪物であり、その巨大な姿は世界を象徴し、ヨナを受け入れて隠し、三日後に吐きだしたその口は墓を象徴する。このようにクジラもまた復活したキリストの聖なる墓であり、そして再生のためにこそ受け入れるとする母なる大地のもつ普遍的な意味を表わすのである。

亀

Turtle

それから女に二匹の亀をもってこさせよ……
一匹は贖罪の献げ物として、もう一匹を
焼き尽くすべく献げ物として主にささげる
そして、祭司は女のために贖いをし
女の罪は赦される

旧約聖書『レビ記』

ヒンドゥー教の神話では、亀は背に象をのせ足をふんばって支えている。そして、その象は世界を支えているのである。これは世界の秩序と永遠の存在を象徴している。陸と水にかけて安住の棲処をもつ動物のうちで、亀だけが大地の本質である安定性ならびに物質性という特性をもっている。ときに何十年にもおよぶ亀の長

命、悠揚せまらぬ動き、そしてまたその曖昧さまでが、ひっくるめて地球の進化を象徴するかのようである。

東洋ではまた、亀を方形の上に位置する円に見たてて宇宙を表わすとした。丸みをおびた亀の甲羅は、触れば実体のあるこの世界のうえをおおう天を意味したのである。しかし、エジプト象形文字では方形は偉業を意味し、これこそ亀の本質をもっともよく表わしている。世界の安定と秩序の源はすべて方形とつながりをもつ。方形は建築の基礎であり、実際的、合理的な思考の象徴とされている。四季があり、土・水・風・火の四大元素があり、四つの方位がある。これは不変であり、生命の本来的な平衡を保証するものである。亀が四角あるいは大地を表わし、大地は本質において女性であるとすれば、亀によって女性を清めたという聖書の挿話はさらに深い複雑な象徴性をもってくる。

虫

Worm

王様を食った蛆虫を餌にして魚を釣って
その餌を食べた魚を食べる男もいる

シェイクスピア
『ハムレット』

虫は死を象徴する。かつて虫という言葉は北欧の神々と戦った大蛇や蛇を表わした。虫は、これら脚をもたない生きものと同じように、地を這いずって生をむさぼり、災いをまきちらすのである。しかし、もはや「虫」は畏怖すべき怪物ではなく「神を讃えなかった」ヘロデを貪り食ったあの蛆虫、卑しく這いつくばる虫けらの姿になった。文学や聖書では隠喩として虫を死、堕落、軽蔑に結びつけ、ダビデは我が身の卑小さにうちひしがれて祈るとき「わたしは虫だ。人ではない。他人にそしられ、民に侮られる」と叫んだ。

シェイクスピアの時代には、怠惰な女の使用人の指には小さなまるい虫が巣くっているとか、あるいはニチニチソウとニラネギの束に巻きついたミミズは、強力な愛の護符であるなどという俗信があった。しかし、ウィリアム・ブレイクにとっては、吹き荒れる嵐にのって飛んでくる目に見えない虫が、その暗い秘められた愛によって薔薇を台なしにするのである。

腹部に巣くう寄生虫の特効薬として、薬草医はニガヨモギを処方する。ニガヨモギは苦い体験の象徴であり、ヨーロッパ全土の荒地に育ち、アブサンの原料の一つである。英語で「虫の木」を意味するニガヨモギの名は、楽園を追われた蛇が這い去った跡に生えたという古い伝説に由来する。

昆虫——

昆虫は、動物界でもっとも原始的な種類として軽んじられているが、神話や伝説の世界では他の動物に劣らない勢力をもっている。昆虫の習性を見て、その複雑怪奇な存在に想像力を刺激された人間は、昆虫に見たものを人間独自の世界観に重ねあわせたのである。寄生虫のシラミから攻撃的な雀蜂や蟻、また中国では喜びや結婚の幸せの象徴とされる繊細で優雅なチョウにいたるまで、昆虫にはさまざまな種類がある。独自の進化様式をたどってきたその世界は、人間の生き方よりも優れているとさえ言えるような面をもっている。多くの昆虫は自分たちの住む町をつくりあげ、それぞれが社会の協力的な一員であり、また子供の養育と一族の保護については、きわめて巧みな手段をもっている。コロニーをつくる蟻のなかには、キノコの栽培をしたり、自分では働かずに奴隷蟻を使うなど、他を支配することによって生きる手段としているものも多い。

昆虫は、死んだものだけではなく、生きているものをも餌食にするので、人間の暮しにとっては一大脅威となることが少なくない。バッタの大発生やハエの大群は森を破壊し、穀物を食い荒して人間を絶望におとしいれる。一匹のイエバエは三カ月のあいだに八十万匹の子を生み、ハエが三匹もいれば、ライオン並みのはやさで馬の死骸を片づけるとも言

われている。はかなくもか弱いハエの力は、数が多いことによって発揮されるのである。したがって、昆虫の大群は衰退と災厄の象徴であり、昔これを避けるには魔王ベルゼバブとキュレネのアコルを祀るほかなかった。

昆虫はある一つの形で生まれ、別の形で死ぬことが多い。エメラルド色の羽をした古代エジプトの聖なる甲虫スカラベも、地中にあるときは似ても似つかぬ醜い芋虫の姿をしている。そして一方はさまよう魂を象徴し神聖視されていたが、他方はただ生きているだけの節の塊であり、死と腐敗につながるものであった。ルネッサンス期にはいるまで、人びとは昆虫の一生の劇的な変化についてあまり知識をもたなかった。天才アリストテレスでさえ、それに気づいていたという程度にすぎなかったのである。人間の精神的、心理的な欲求は現在の状態を変える方向に向かうものであり、この欲求を象徴するものとして、昆虫の生活環は絶好であった。生を認める死の逆説は、また悪を善に、憎しみを愛に、破壊を創造の力に変えることをも可能にする。対立するものは結合し、たちまち融合し、変換をとげることによってこの要求をみたすのである。聖アンデレの十字架、すなわちXの字はこのような変換の象徴であり、動物では、雀蜂と蜜蜂、あるいはサソリとスカラベのような相反するイメージをもつ昆虫がそれにあたる。

蜜蜂

Bee

蜜の由緒など
蜜蜂にはどうでもいい
いつもクローバーが特級品

エミリー・ディキンソン
『詩集』

エジプト史の始まりから蜜蜂は高貴な昆虫であり、労働、秩序、富みの象徴であった。いつの時代も、蜜蜂の巣は理想的に機能する社会の見本であり、人間が木から滴り落ちてくる蜜によって生きていた、黄金の神話時代の名残りであった。古い伝説によれば、ユピテル（ジュピター）は蜜蜂に養われていたし、テーベの叙情詩人ピンダロスは蜜以外のものを口にしなかった。またプラトンの爽やかな雄弁は、まだ揺り篭にいた赤ん坊のときに彼の口にとまった蜜蜂の大群に授かったという。またオルフェウス伝説によれば、蜜蜂は深く魂にかかわる意味をもっていた。巣に甘い滋養のある蜜をのこして飛び去る蜜蜂の群れのように、人間の魂もこの世

を離れ、群れになって天国へと飛び去るという。だからこそ、モハメッド（マホメット）も蜜蜂にイスラム教の楽園にはいることを認めたのである。キリスト教の例では、天与の「蜜の言葉」をもって説教したという聖アンブロシウスはその著作で教会を蜜蜂の巣にたとえ、勤勉なクリスチャンを巣のためにせっせと働く蜜蜂にたとえた。

かつてアテネは蜜の名産地であり、二番目に大きいデルポイの神殿は蜜蜂の大群によって建てられたとされている。そしてギリシャ神話で傑出した養蜂家はシチリア島のエリュックス山で養蜂の技をふるっていたブテスであり、彼はどんな蜂蜜よりも甘いその蜜をオリュンポスの神々に送った。しかしローマの詩聖ウェルギリウスによれば、アルカディアの人びとに新しい養蜂の技術を教え伝えたのは農業の神と讃えられたアリスタイオスであった。彼が飼っている蜜蜂の群れに病気

がひろまって死んだとき、ニンフである母親のキュレネは、四頭の若い牡牛と四頭の若い牝牛を犠牲に捧げ、そのまま九日間祭壇に置いておくようにと教えた。サムソンやヘラクレスの物語によれば、腐っていくその犠牲から新たな蜜蜂の群れが涌きだして、近くの木々に巣を造ったという。

古来、蜜蜂とそれを飼う人のあいだには何か特別な絆があったようで、地方によっては、蜜蜂は飼主の運命にきわめて敏感だと伝えられている。喪のときは巣に黒い布を結び、喜びや祝いのときは赤い布をつけてやらないと、蜜蜂は繁栄しないのだという。悪魔学の研究者たちによれば、魔女は女王蜂を呑み込んでおくことによって拷問や裁判で自白をまぬがれ、死をまぬがれたという。

ユリがブルボン家の紋章となったように、ナポレオンは蜜蜂を紋章に選んだ。ナポレオンの皇帝即位に先だつ百五十年前、チャイデリックの墓所は三百匹の小さな金色の蜜蜂像で飾られていた。ナポレオンは戴冠式のガウンを蜜蜂で飾るように命じ、ここに蜜蜂は再び君主と富と秩序を象徴することになった。

サソリ

Scorpion

悩みといってても身からでた錆
火にかこまれたサソリのように
たったひとつの哀しい救いは
敵にそなえて磨いてきた毒針

バイロン卿
『邪宗徒』

裏切り者のサソリは絞首刑執行人の徴(しるし)である。蜂蜜をもたらす蜜蜂とはちがって、毒をもつサソリの針は死の前兆であり、決定的な「崩壊」を象徴する。ところが古代エジプトの石棺には内側にサソリの女神セルケトが描かれているものがあり、女神は、あたかもミイラにした遺体を永遠の死から護るかのように翼をひろげ、手をさしのべているのである。サソリは無慈悲ではあるが、ここでは再生観念と結びついている。聖書には、先端に真鍮をつけた皮紐は「サソリの懲らしめ」と呼ばれ、その鞭に打たれることによって犯した罪があがなわれた

と記されており、またサソリは体内に治癒の力を秘めているとも伝えられている。サミュエル・バトラーは『ヒューティブラス』に次のように記している。

　これは本当だそうだが
　さそりの脂は傷を癒すそうだ。
　その毒液がこしらえた傷を
　武器は傷薬を備え
　あたえた傷を癒すそうだ。

この脂薬はサソリから抽出され、その他の薬としても用いられるが、とくに腎臓結石に効用があるとされていた。またサソリは、火に囲まれると自分の尻尾の針で自分を刺して死ぬと信じられていた。

サソリは黄道十二宮の八番目に位置し、またジュピター（ユピテル）によって天空にあげられサソリ座になった。神話によれば、オリオンは地上のいかなる動物をも打負かしてみせると豪語して神の怒りをかい、サソリの毒針で罰せられた。そのため、空では今もオリオン座はサソリ座から逃げまわっているのだという。しかし占星術では、サソリは水に属しており、そもそも世界が形成された源であった混沌の、神秘の深淵から現われたとされ、活発で、情熱的で、激しい存在なのである。

クモ

Spider

大きく張りめぐらした巣の真中に坐る
鋭敏な蜘蛛にたとえようか
糸の端に何かがちょっとでも触れれば
たちまち蜘蛛は全身で感じる

サー・ジョン・ディヴィス
『霊魂の不滅』

クモの巣は人間のはかなさや幻を象徴する。そしてクモは、その巣のまんなかに坐って獲物を待つのである。時として、クモはキリスト教徒の魂を罠にかける悪魔であったりするが、それよりは夜の闇のなかでのみ廻(めぐ)る月や、人間の運命の永遠の紡ぎ手を表わすことが多い。アメリカ・インディアンの神話では、大熊座の星々を、クモの巣をときほぐして天国に昇っていく七人の勇者になぞらえている。クモは破壊力を象徴するが、同時にあらゆる創造活動を象徴し、宇宙存在そのものがよってたつ、交流するエネルギーを表わす。

クモは猛毒をもつとされるが、それは黒魔術に類するような迷信による呪詛であった。一六一三年に行われたサー・トーマス・オーヴァベリー毒殺事件の公判で、ある証人はもっとも強力な毒を求められて大グモ六匹を渡したと証言している。しかしクモは一方では薬としてもつかわれ、黄疸の治療に、生きたクモをバターにくるんで飲むことは一般によく行われていた。またお守りとして首にクモをさげることもあった。十七世紀の著述家ロバート・バートンはその著『メランコリーの分析学』で次のように述べている。「絹につつまれ、木の実の殻におさまったクモのお守りをはじめて見たのは、わたしが熱病にかかったときであった。母があてがってくれたのである。わたしとしては、まったくもって無意味であり、ばかばかしい代物としか思えず、何の正当性も見出せなかった。ところが、その後、何気なく文献をあさっていると、薬物学の始祖ディオスコリデスの著書に、まさしくこの同じ薬を発見したのである。これについてはマティオロスも認めており、またアルドロヴァンディも昆虫に関するその著書のクモの章で同じ事を述べているのを知って、わたしは考えを改めはじめたのである」

カブトムシ　*Beetle*

みだれ咲く花園をこえ
たちのぼる麝香のうえを
甲虫がぶーんと暗がりを降りていくと
やがて夕暮につきあたる

ジェームズ・ホィットカム・ライリー
『甲虫』

カブトムシは、自然にあって永遠に更新を続ける生命の循環を象徴する。これは遡って古代エジプトの黄金虫や糞虫に由来するものである。エジプトの古代都市ヘリオポリスの人びとは黄金虫の顔をもつ神をケプリと呼び、これは何かが「成る」ことを意味した。またカブトムシの図は「成る」という言葉の代わりに用いられた。黄金虫は地上で卵をうみ、それを後ろの二本足で糞や泥にくるみこむ。そのために後の足は長くて鉤のように曲っている。そしてギ

リシャ神話のシシュポスさながらに、極度の辛抱強さをもって卵のはいった荷を転がして、やがて自分の体より大きくなり、卵が十分に保護されたとなると、よい場所をみつけて放置する。同じように、天空では巨大な黄金虫、すなわちケプリが、日の出とともに太陽の輝く球を転がしはじめ、日没とともに地平線のかなたに押し沈めるのである。

カブトムシはまた、糞、つまり腐敗分解する物質との関連から、錬金術における「腐敗期」すなわち新しい生命の発生にそなえるための消失や霊的衰退の状態に符合する。エジプト人が黄金虫をあがめ、死骸をミイラとし、その姿をファラオの記念碑や神殿に描いて不滅のものとしたのも不思議ではない。美しく磨かれた石でつくられ、貴金属にはめこまれた黄金虫を、首にさげるお守りとして、また指環として身につけたのは、その黄金虫が永遠の生命の秘密を秘めるものと見なされ、太陽神ホルスの聖なる目を表わすものとされていたからである。

バッタ

Grasshopper

あめんどうの花は咲き
いなごは重荷を負い、アビヨナは実をつける

旧約聖書『コヘレトの言葉』

バッタやイナゴは破壊を象徴し、現に今でも大群をなしてパレスチナやエジプトを移動し、見渡すかぎりの作物や草木を食い荒すことがある。旧約聖書によれば、イスラエルの民がエジプトを出ることを許さなかったパロ（ファラオ）に、神はその徴（しるし）をあらわしてイナゴの災厄をもたらした。また聖ヨハネは「いなごの姿は、出陣の用意を整えた馬に似て、頭には金の冠に似たものを着け、顔は人間の顔のようであった。また、髪は女の髪のようで、歯はライオンの歯のようであった。また、胸には鉄の胸当てのようなものを着け、その羽の音は、多くの馬に引かれて戦場に急ぐ戦車の響きのようであった」と語っている。

パロ（ファラオ）の娘は緋色の糸と三匹のバッタを使って呪術をおこない、ソロモン大王を誘惑しようとした。また金色のイナゴあるいはバッタは、太陽神アポロンを表わすとされている。これは旱魃をもたらし、すべての植物を壊滅させる強烈な太陽の光を畏怖するところからきたものであろう。時をへてイナゴの意匠はエリザベス朝時代に再び登場し、創立時の王立取引所の建物を石造りのイナゴが飾ることになった。イナゴは創立者トマス・グレシャム卿の紋章であり、おそらくは卿を記念するためのものであろう。しかしイナゴの紋章がその後もロンドンの金細工師や銀行の看板に残っているのは、トマス卿を讃えるとともに、経済上の災いを避けることを願ったものであろう。

蟻

Ant

蟻の一足は力はないが
夏の間にパンを備える

旧約聖書『箴言』

旧約聖書の『箴言』やイソップの寓話を通じて不朽の名声をえた蟻は、倹約と忍耐の見本とされてきた。「怠け者よ、蟻のところに行き、その道を見て、知恵を得よ」と聖書は語る。これはイソップが、怠け者のキリギリスの物語で伝えようとした寓意とまったく同じである。モロッコの一部の地方ではこれを文字どおりに解釈して、衰弱した病人が活力をとりもどすことを願い、忙しく動きまわる小さな蟻を病人にのませる。

古代ローマの農耕の女神ケレスは蟻との間にとりわけ深い繋りをもち、その神殿では蟻の動きや仕草で吉凶の占いが行われていた。また半透明の琥珀(こはく)に蟻その他の昆虫が閉じ込

められていることがあり、これを哲学者フランシス・ベーコンは「王家の墓にまさる墓」と言っているが、こうした琥珀はお守りや魔除けに用いられた。未開の社会では悪魔も人間と同じように痛みには敏感に反応すると考えられており、アパライ・インディアンには肉体と魂を浄めるために、黒蟻に体を嚙ませて苦痛に耐えるという風習が残っている。またヒンドゥー教の神話では蟻は存在のはかなさ、卑小さの象徴とされるが、アメリカのスティーヴン・ヴィンセント・ベネットによれば「蟻は一フィート四方の地面のなかに王国を見出す」のである。

ハエ

Fly

死んだ蠅は香料作りの
香油を腐らせ、臭くする
僅かな愚行は知恵名誉より高くつく

旧約聖書『コヘレトの言葉』

ソロモンの神殿には一匹のハエもいなかったと言われている。ハエは疫病や疫病の保持者であり、したがって悪と罪の象徴とされていたからである。ローマ人は勝利者ヘラクレスの神殿のハエに生贄（いけにえ）を捧げ、ギリシャ人は、生命の守護神ゼウスを、この油断ならぬ昆虫からの守護神に選んだ。イスラム教の伝説では、蜜蜂に似たツリアブ以外のハエはすべて滅ぼすべきであるとし、キリスト教初期の美術には、病んだ霊の救い手を象徴するゴシキヒワとともにハエが描かれている。

しかしハエに関しては、魔王ベルゼブルこそ最大の知名の士であろう。この悪魔は、元

来「ハエの王」を意味するペリシテ人の神であった。また中世の『大魔術全書』に登場する三大悪魔のひとりであり、呪術師に呼びだされると巨大なハエとなって現われた。キリスト在生時代のユダヤ人はエクロンの市のペリシテ人の神と結びつけて、偽りの神であり「悪魔の王子」であるとした。「ハエの王」は「ハエを退ける王」の意であるとの説もあり、あるいは、そもそもは「家の神」を意味し、エクロンの神官が占いの儀式にハエを用いたためにこの名で呼ばれるようになったのか、それは明らかではない。いずれにせよ、悪しきものを意味する伝統によってミルトンは悪魔にこう言わせている。

「権力を極めれば罪をも極め、はるか後の世、パレスチナにはベルゼバブありとして知られた」

草と木——

自己をとりまく世界との同化を追求しつづけてきた人間は、自然界の草や木に自分の似姿を見出した。おおかたの動物と違って直立する人間の姿は、むしろ灌木や木の幹やトウモロコシの茎によく似ている。そしてなによりも、年毎に成長と衰退をくりかえす草は、人間にとって死と復活の神秘を象徴するものだった。農耕の豊かな稔りは、物質、宇宙、霊の再生というもっとも根源的な概念を生み出した。また民話や伝説で語られる森は暗闇、未知のもの、無意識、女性的なものを象徴している。森は植物がほしいままに恐るべき勢いで繁茂する場所であり、古代ケルト族のドルイド神話では、生命力や男性を象徴する太陽の、理想的な結婚の相手であった。

木に対する信仰は時を超えて存在し、ある種の木がある神を表わすべく選ばれたということはあるにしても、どんな木も等しく不滅を象徴するものであった。樹木は地に根を張り、幹を世界の巨大な軸とし、天に向かって枝をひろげ、冥界、地上界、天界の統一を象徴するのである。ケルト人にとって樫の木が神聖な木だったように、スギはオシリスの、月桂樹はアポロンの聖樹であり、ぶどうはバッカスに霊感を与え、聖なるイチジクの木、すなわちインドボダイジュは釈迦に啓示を与えた。墓に木を植えるという習慣は中国に始

まったもので、豊かな常緑樹の活力が、さまよう死者の霊に力を与えると信じられたのである。また中国では梅と竹と松を合わせて「三友」と呼び、一組として飾られることが多いが、これは繁栄と幸福な長寿を象徴する。

樹木を宇宙の枢軸の象徴と考えたのは旧石器時代の人びとであり、以来、木は連綿として宇宙の中心に座を占めてきた。北欧、ゲルマン神話の宇宙樹（イグドラシル）、アラブ人や東ローマ帝国の人びとによって、極東や西洋にもたらされたメソポタミア人の「ホウマ」神木、キリスト教徒の贖罪の十字架、また、バラモン教の奥義書『ウパニシャッド』やモーセの五書の『ゾハール』に書かれている、天に根を張り地に向かって立つ「逆さの木」はいずれもその例である。また聖書によればエデンの園には生命の木もあったが、アダムとイヴは生命の木ではなく、知恵の木からリンゴを盗んだので、善悪の知恵は得たものの、不死の存在にはなりえなかったのである。バビロニア伝説のギルガメッシュ王が海底を捜し求めて得られなかった不老不死の木と同じように、生命の木はアダムとイヴから隠されていたのであろう。永遠の存在に至る道は至難の道なのである。

木が絞首台に用いられるようになったのは中世以降であるが、聖書の時代でも、木は処罰を見とどけるものとして処刑の傍にあり、犯罪者の遺体はその木の枝から吊されて人びとの目に晒（さら）された。水に覆われたバビロニアの低地やパレスチナの砂漠地帯では樹木は乏しく、ヘブライ人にとって木は神の贈り物であった。なかでもオリーヴは実をつけるだけ

でなく、老いて枯れる前に新しい芽が出て生命をつないでいくため、神聖な木とされた。『レビ記』の律法では、神への感謝のしるしとしてオリーヴの初収穫を神に捧げ、四年間はその実を食べることを禁じた。しかし、イスラエルの十二支族のアセル族はカナンの住む丘陵地帯に豊饒の女神を隠し、そこでは多神教の樹木崇拝が広く行われていたため、イスラエルの多くの預言者はその樹木信仰を非難し、イザヤは「慕っていた樫の木のゆえにお前たちは恥を受け、喜びとしていた園のゆえに嘲られる。お前たちは葉のしおれた樫の木のように、水の涸れた園のようになる」と予言した。

月桂樹

Laurel

アポロンの月桂樹は
すくすくとのび、繁ったであろう小枝をきりはらわれ
大枝を焼きすてられた
折々に賢者アポロンの内に枝をひろげた月桂樹は

クリストファー・マーロー
『フォースタス博士』

月桂樹の常緑の葉は不滅、勝利、征服の象徴である。古代ギリシャやローマでは、競技の勝者の頭に月桂冠が戴せられた。使徒パウロはこれをよきキリスト教徒が受ける栄誉になぞらえて「あなたがたは知らないのか。競技場で走る者は、みな走りはするが、賞を得る者はひとりだけである。あなたがたも、賞を得るように走りなさい。彼らは朽ちる冠を得るためにそうするが、わたしたちは朽ちない冠を得るためにそうするのである」と言っている。またローマ神話では、月桂樹は

「ウェスタの処女」とも呼ばれた「かまどの女神」ウェスタへの信仰を司る女祭司たちに捧げられたことから、純潔と結びつけられている。

　月桂樹は詩歌の神アポロンの聖樹であり、霊感の源とされていたが、アポロンは、この聖樹のもつ力を自分につき従うミューズたちに注ぐことが多かった。ミューズたちがよく楽しませ、よく仕えると、アポロンは月桂冠を与えてそれに報いた。デルポイの神殿で神託を司るアポロンの巫女ピュティアは、月桂樹の葉をかんで陶酔状態におちいり、六歩格の詩で神託を授けたという。詩歌と月桂樹との結びつきは、月桂樹が永久不滅の象徴であるだけでなく、強烈な陶酔作用をもつことによるのである。ラビ・エリバズはその秘術（オカルト）に関する著作で、呪術の秘儀を行なうに際しては、月桂樹の樹液と樟脳（カンフル）と塩を燃やすと記している。これによって、呪術師は猛烈な興奮状態に導かれるのである。十七世紀のイギリスの聖職者ロバート・バートンは「ヒューニリウスによれば、月桂樹は憂鬱症の強力な治療剤の一つである。プリニウスはこれに月桂樹の実十五粒を飲物に加えるのがよいとしている」

イチイ

Yew

イギリスで生まれた弓
真生の木材、イチイの木の弓
長弓（イングリッシュ・ボウ）のための木材

サー・アーサー・コナン・ドイル
『弓の歌』

古代ギリシャおよびローマで女神ヘカテーの聖樹であったイチイは死を意味し、その枝は、ヘカテーに仕える亡霊たちの渇きを血で癒した、生贄（いけにえ）の牛のための冠として使われた。イギリス原産のこの木はゆっくりと生育し、大変に寿命が長い。ローマ人は、堅くて弾力に富むこの木材が強力な長弓（イングリッシュ・ボウ）にうってつけであることをイギリス人から学んだ。このことから、イチイの木のもつ凶のイメージはますます強くなった。イチイは常緑樹であり、しばしば教会の墓地に植えられ、亡骸（なきがら）の口に一本ずつ根を張ると言われている。また家のそばに植えると、そ

の家の者に死を招くといわれる。ダービシャー州のダーリー教会の近くにあるイチイの古木は樹齢二千年をこえると伝えられている。
古来、イチイの実は毒とされ、ケルト人はこれを「有毒なヘレボルス根茎、悪魔の食べもの」と混合して矢じりに塗りつけた。シェイクスピアは「二重に致命的なイチイ」と呼び、『マクベス』の魔女の大釜には「月蝕のときに手折ったイチイの一枝」などが投ぜられた。とはいえ、ローマの歴史家、スエトニウスによればクサリヘビに咬まれたときの唯一の治療薬はイチイの樹液であるという。確かに、これは毒をもって毒を制する類似療法（ホメオパシー）というもので、今日でも広く用いられている。

イトスギ

Cypress

私が死んでも、いとしい人よ
私のために悲しい歌を歌わないで
私の頭上にバラを植えないで
木陰をつくるイトスギの木も

クリスティナ・ロセッティ
『歌』

イトスギは死の木であり、その濃い常緑の枝は一度切ってしまうと二度と茂らない。イトスギは冥界の神プルトンに捧げられ、ローマ人の棺は最上のイトスギ材に彫刻をほどこしたものであり、イトスギの枝を墓に投げ込んで死者の霊がすみやかに冥界への道をたどり、楽園（エリュシオン）（幸運の島）にいくことを願った。聖書も一度だけイトスギについて言及している。ヤコブがバビロン滅亡の予言をうけたとき、イトスギは「異教徒の偶像」を刻む木

であると戒められている。

ギリシャ神話では、キュパリッソスがかわいがっていた雄鹿を、誤って弓で射殺してしまったとき、この若者をたいそう愛した神アポロンは、若者の願いをかなえて永遠に嘆き続けられるようにイトスギに変えたという。イトスギはまた、アポロン同様、突然の死を司る女神アルテミスの聖樹でもあり、マルセイユがギリシャの属領だった当時、アルテミスを讃えてマルセイユに聖なるイトスギの森がつくられた。ローマの詩人ルカヌスはジュリアス・シーザーのガリア制圧について論じているが、そのなかで、イトスギ、樫、榛の古木をあえて伐り倒そうとする者はいなかったと述べている。しかし、マルセイユに砦を築くとき、イトスギの森が邪魔になった。そこでシーザーは、部下の兵たちが神聖を侵す行為におよぶ前に、自ら進んで斧をふるったという。

シダ　*Fern*

わたしは
透明人間になる薬など持っていなかった
シダの種などポケットにはなかった

ベン・ジョンソン
『新しい住い』

偉大な誠実と謙虚の象徴であるシダは、つつましい魔力を秘めて、小暗い森や林のなかに人知れずひっそりと忘れられている。しかし、年に二度、クリスマスと、それから夏至の太陽が元の軌道に戻る前に一瞬停止するとき、シダは輝く黄金か、あるいは炎のような伝説の花を咲かせるという。古いドイツの民話では、一人の狩人が夏至の太陽を射て、手に落ちてきた太陽の血の滴りが三粒の光るシダの種になったという。このため、この神秘の二日間の真夜中に、ヨーロッパおよびロシアの森では、たちまち萎んでし

まうというシダの花探しが行われる。金色の太陽から生じたシダの種はまた、地上の黄金を見出すものでなければならない。伝説によれば、シダの花や種を見つけた者は、それをただ空中に放ることによって隠された財宝のありかを知るという。

別の伝説では、シダの花は善良な正直者にしか見つからず、見つかれば、あらゆる悪の力から彼を守ってくれるという。しかし、またシダの種はめったに見つからないことから、見つけた者の姿をまったく見えなくさせる力があるとも伝えられていた。十五世紀の『アルバヌス主教の書』には、「あたかもシダの種を食べたかのように」姿が見えなくなる秘法が書かれている。

ギンバイカ

Myrtle

その風土の営みを糸杉と銀梅花が象徴する国
禿鷲の憤りや亀の愛が
熔けて悲しみとなり、かりたてて罪をなす国
そういう国が現にあるんだ

バイロン卿
『アビュドスの花嫁』

白い花と芳しい実をつけることで愛でられるギンバイカは、地中海沿岸付近にもっともよく繁茂する。ギンバイカはウェヌス（ヴィーナス）の聖樹であり、ヴィーナスは心地よいこの木陰でアドニスに求愛した。またその枝は、ヘブライ人の「荒野放浪記念の秋祭」の「仮小屋」造りに用いられた。預言者イザヤは信者たちに呼びかけて「茨に代わって……銀梅花が生える」そして「野の木々も手をたたく」と語り、ギンバイカに歓喜のイメージを与えている。

しかし、ギンバイカの陰は王の死の影とされていたこともあった。またつねに緑を失わ

ず、治癒力のあるその葉は再生の象徴であり、新たな土地に移住するギリシャ人はこの木を携えていった。ギンバイカのラテン名はミルトゥス、英名はマーテルであるが、この木にちなんだ名をもつミュルティロスはヘルメスの息子であり、エリスの王に仕えていたが、王の娘を得ようとするペロプスに買収されて王の戦車の車輪を弛ませた。おかげで首尾よく王女と結婚したペロプスは、しかしミュルティロスを裏切り、彼を海に突き落として溺死させた。ヘルメスは息子の死の報復として、ペロプスとその一族に呪いをかけて恐しい苦しみや犯罪をもたらした。ギンバイカは、また殺されたトロイの王子ポリュドロスとも関連がある。ローマの詩人ウェルギリウスによると、トロイの勇士アイネアスが生贄の石の飾りにこの木の枝を折ろうとすると、地面から情けを乞うポリュドロスの声がして、ギンバイカが血を滴らせたという。ポリュドロスがそこに埋められていたのである。

スギ　*Cedar*

わたしは高いレバノン杉の
梢を切り取って植え
その柔らかい若枝を折って
高くそびえる山の上に移し植える

旧約聖書『エゼキエル書』

　スギの木の気高さと美しさ、とりわけレバノン杉のそれは、預言者エゼキエルによって、救世主とその王国の象徴として用いられている。スギは長い年月をかけて非常にゆっくりと生長するので、バシェーレに近いカディッシャ峡谷の奥地には、今もなおスギの原生林が残っている。太い幹は白い霧がかかったような赤味をおびた樹皮におおわれ、常緑の枝々が樹高に匹敵するほど大きく張り出している。
　この神聖な木の香煙はヒンドゥー教の預言者たちに霊感を与え、黒魔術では、父なる天であり、恵みの雨をもたらすユピテルは、甘くいぶるスギの芳香をユピテルだけに属する

ものと主張した。木目が粗く、丈夫で腐りにくいスギは、芳香があるだけでなく磨けば美しい光沢をおびて、楽器や彫刻、棺などの材料に用いられてきた。スギはダビデ王やソロモン王の称賛をえて「ティルスの王ヒラムはダビデのもとに使節を派遣し、レバノン杉、木工、石工を送ってきた。彼らはダビデの王宮を建てた」。そして「ソロモンが建てた『レバノンの森』の家は……レバノン杉の柱を四列に並べ、その柱の上にレバノン杉の角材を渡した。……神殿の内部にあるレバノン杉の壁面は、ひょうたんと、花模様の浮き彫りで飾られていた。全面がレバノン杉でできていて、石はまったく見えなかった」のである。

スギの山林についてはバビロニアのギルガメシュ神話にも語られている。ギルガメシュ王は壮麗なスギの大森林に住む勇者フンババと戦って、これを打ち倒したと伝えられている。古代バビロニア人は、神殿建造に不可欠だった杉材や石材を、ユーフラテス川を遡ってアマヌス山地に求めていた。そのことからして、伝説のスギの山林は、シリアと小アジアの間に横たわるアマヌス山地を指しているものと思われる。

オリーヴ *Olive*

今、不確かなものが、確かな王冠を戴き
そして平和がオリーヴの永遠を称える

シェイクスピア
『ソネット』

オリーヴの枝はつねに平和の象徴と見なされてきた。オリーヴの葉の冠は古代ギリシャにおける最高の栄誉であり、オリンピック競技会で熱望された褒賞であった。伝説によれば、ケクロプス王の時代、アテナとポセイドンがアッティカの支配権を争ったとき、ポセイドンはアテナイの人びとに馬を贈り、これに対してアテナはオリーヴの木をアクロポリスの丘に植えた。争いはアテナの勝ちと決まり、彼女はこの地を平和に慈悲深く統治し、オリーヴの木は人びとに富をもたらし、そしてペルシャのクセルクセスの侵略にも奇跡的に生きのびたと伝えられる。

パレスチナにはオリーヴが豊かに茂っていたので、モーセはこの地を「油の国」と呼んだ。豊富な油は、とりもなおさず豊かさを表わすものであり、まさに聖書の木と呼ぶに価

するオリーヴは、イスラエルの子孫たちへの神の加護の象徴であった。『士師記』におけるヨタムのたとえ話によると、樹木たちは自分たちの王を選び香油を塗ろうとした。「木々が、だれかに油を注いで自分たちの王にしようとして、まずオリーヴの木に頼んだ。『王になってください』オリーヴの木は言った。『神と人に誉れを与えるわたしの油を捨てて、木々に向かって手を振りに行ったりするものですか』」

オリーヴの木は人間の何世代にもわたって生きつづけるが、良質の実を得るためには接ぎ木をほどこし、手あつく世話をする必要があるため、オリーヴの栽培には平和が必要不可欠である。ノアの洪水の物語では、鳩が嘴（くちばし）にオリーヴの葉をくわえてきて、神が人類と仲直りされたことをノアに知らせた。また同様に、オリーヴの小枝と鳩は、死者が神の賜物により心の平和を得て召されたことの象徴としてよく使われる。

シュロ・ヤシ　*Palm*

金槌も振るわれず、重い斧を打つ音もせず
丈高い棕櫚の木のように神秘の布が拡げた
大いなるこの静寂！

レジナルド・ヒーバ
『パレスチナ』

シュロ・ヤシの英名パームの名は、その形が掌を思わせることに由来する。シュロやヤシの木には枝がなく、幹から直接指に似た葉が扇のように広がっている。聖書時代には繁栄の象徴であったシュロは「シュロの町」と呼ばれるエリコの町のようなオアシスに生える「善き木」であった。「善き木」シュロは砂糖、油、タンニン、それにアラック酒の原料になる樹液をもたらし、葉によって屋根が葺(ふ)かれ、篭がつくられた。ヘブライ人にとって、シュロの葉のそよぎは歓喜と祝福を表わすものであった。このことは「荒野放浪記念の秋祭」や「棕櫚の日曜日」、イエスのエルサレム入都についての聖マタイの記述などと結びつけて語られる。ローマでは勝利をおさめた剣闘士を表わしたシュロの葉は、また死

と罪に対するキリストの勝利を表わす。こうしてローマ人にとって勝利の象徴であったシュロはキリスト教徒へと引きつがれていくのである。

　繁栄の象徴とされる物は多いが、そのなかで重要な位置をしめているシュロは、バビロニアの楽園（エリュシオン）では生命の木である。伝説の不死鳥もシュロの木で生まれ、シュロの木で再生すると言われている。またシュロの木は海岸でもっともよく育つ。頂きは太陽にとどかんばかり、根はあらゆる生命が生まれた母なる宇宙を表わす海に浸らんばかりに育つゆえに、シュロは生誕の象徴とされることもある。シチリア島では「棕櫚の日曜日」に神の祝福を受けたシュロの葉を吊しておくと雨と豊作に恵まれると伝えられ、その他のカトリック国にも「棕櫚の日曜日」のシュロの灰を作物の種に混ぜ、復活祭の日に撒く習慣が残っている。

ポプラ

Poplar

彼女に
ポプラの葉のような
風をうけて、緑から銀の色へと変わる
木の葉のような
美しい姿と心を与えたまえ
そんな彼女にまさる美女がいるだろうか

ウィッター・ブリナー
『美への祈り』

キリスト教の伝説によれば、キリストの「十字架」に選ばれた白ポプラの木は、なぜ自分が切り倒されるのか、その目的を悟ったとき、白ポプラの葉は震えだし、以来、震えつづけているのだという。そもそも「十字架」はエデンの園の「生命の木」によってつくられたという説があり、さらにポプラの葉は表面が暗い色、裏面は明るい銀色をしていることが、生命の木としてのイメージをいっそう強くしている。この対称的な配色、すなわち

明と暗は宇宙を支配する月と太陽の特質を象徴的に表わしているのである。ギリシャ神話では、ポプラはヘラクレスの聖樹であった。アウェンティヌスの丘の洞窟で三頭の巨人カクスをみごとに斃して出てきたヘラクレスはポプラの枝を拾ってそれを頭に巻いていた。しかし、その後冥界にくだったとき、ポプラの葉の表側は炎のため黒ずみ、裏側は汗で白茶けていた。

この伝説はまた、黒ポプラと白ポプラの違いを説明したものとも受けとれる。ヘレニズム以前のギリシャでは、黒ポプラは英雄の木とされていた。同時に死を予兆し、母なる大地に属する木であった。また、古くはポプラで楯をつくったともされている。一方、白ポプラは美の象徴であり、楽園（エリュシオン）の木であった。プルトンに愛された美しい妖精レウケは死後、彼によって白ポプラに変えられた。アポロンの息子パエトンが日輪の車から落ちて死んだとき、彼の姉妹たちの悲嘆ははげしく、神々はそれを哀れんで彼女たちをポプラの木立に変えたという。

柳

Willow

意気地なしの柳の下では
愛しい人よ、もう拗ねるのはおやめ

W・H・オーデン
『この島で』

柳の木は、そもそも月の女神であり、のちには冥界に君臨する女王となったヘカテーの聖樹であった。彼女は悪霊を統治し、死者を統轄し、魔力をふるって地上界を苦しめた。魔女もまた、とりわけ北欧では柳の木と同一視されて、古くから俗に「ウィッカー（柳の枝）」と呼びならわされていた。帽子にさした柳の葉は片思い、あるいは失恋を表わすとされ、これはおそらく、月の女神の嫉妬に対する密かなまじないの名残りであろう。柳は水辺を好み、水辺によく育つが、ここにも水と月の関わりが見られる。一部のジプシーによれば、柳はまた生命力や繁殖の源とされている。とりわけ出産を助け、病人や老人を

ぎに生えては繁る旺盛な生命力に由来するものであろう。
　失恋の痛手をうけた詩人には、シダレヤナギは悲嘆と哀しみの象徴にうつる。また五十余年にわたってイスラエルの民がバビロニアに囚われて以来、柳は喪を象徴するようになった。伝説によれば、柳の枝はイスラエルの悲運を哀れんで垂れさがったのだという。『詩篇』は次のように記している。「バビロンの流れのほとりに座り、シオンを思って、わたしたちは泣いた。竪琴は、ほとりの柳の木々に掛けた」と。

花と果実――

生命のはなやかさについて、預言者イザヤは「肥沃な谷の頂きにある壮麗な美しさも、しおれゆく花や、夏を待たずに時を急いだ果実のようなものとなろう。頂きを見上げる者が目にする美は、果実がまだ手のなかにあるうちに食べられてしまうだろう」と言っている。果実は花に依存し、束の間、ただ種をつくるだけの役目を果たして終るが、種は潜在する希望と秘密を象徴する。自然のままに放置された森林や草原の野生の植物とはちがって、果樹園や花園で育てられる花や果実は、選ばれ、囲われて保護される。民話や神話の世界では、花や果実は禁じられた宝物であり、ひそかな欲望の対象である。文学の世界では、生殖や性欲の象徴として大いに利用されている。たくさんの種があるイチジクは官能の誘惑を表わし、まるくて凹みのある桃は女性の神秘性を表わす果実とされている。またルネッサンス期のキリスト教画家は、あらゆる美徳と悪徳にそれぞれ象徴をつくり、たとえば梨はキリストの人間への愛を表わし、プラムは忠誠や独立心を表わすものとした。

古代ギリシャでは、多くの花が神話でそれぞれの役を与えられ、「母なる大地」を意味するデメテルとその娘コレをまつる名高いエレウシスの秘儀にも花が使われた。またナルキッソスはその自惚れゆえに紫と白の花にかえられ、アポロンは亡き美少年ヒュアキント

スの血から咲きでた花を見て、春がめぐってくるたびに、その宿命的な愛の記憶をよみがえらせるのだった。ギリシャ人も、またローマ人も祭りには花の冠をかぶって祝い、同時に死者の亡骸を花で覆った。これは死者への供物というよりはアナロジー（類比）であり、人生の喜びの短さを忘れぬように、祝宴の席に骸骨を持込んだエジプトの風習と同じ意味をもっている。

花は、その形から「中心」を象徴し、隕石を「天の花」と名づけた錬金術師にとっては、花もまた太陽の術（わざ）なせる化身であった。エジプトに豊富な蓮の花は、ナイルの園でもてはやされ、第五王朝の名高い蓮華模様柱頭の模様になっている。そして八百年後、ギリシャのイオニア式都市の中心に、その同じ模様の柱が建てられた。花の色もまた意味をもっていた。ある一つの色がもつ意味は、何世紀ものあいだに固定したものなのか、それとも、花の色自体にそなわる力によるものなのか、神秘学の世界でも結論が出ていない。しかし、オレンジ色や黄色の花は、きまって太陽になぞらえられているし、同様に血や情熱や愛の色である赤は、古来バラやケシの色ときまっていた。空と水を連想させる青い色の花は、伝説などでは、あり得ないことを象徴するが、これはおそらく、空と水の「神秘の核心」を暗示しているのであろう。

イチジク *Fig*

世界よ消えろ、世界よ失せろ
心痛には無花果を、悲嘆には無花果を！
それも一文無しの身には手に入らぬ道理
だが、死は身分を問わない

ジョン・ヘイウッド
『愉快な友達であれ』

冬のあいだ、イチジクの木には一枚の葉もついていないが、二月か、あるいは三月になると果芽が出はじめる。果芽のほとんどは落ちてしまうが、やがて熟した果実は風味をめでられ、ローマ人は『早生(わせ)のイチジク』をメルクリウス（ヘルメス）に捧げた。にもかかわらず、多くの諺はこの果実をあまり評価しておらず、肉欲と亡恩を象徴するものとしている。

食用に適した、種の多いこの果実は、人間が手をかけなければなかなかうまく育たな

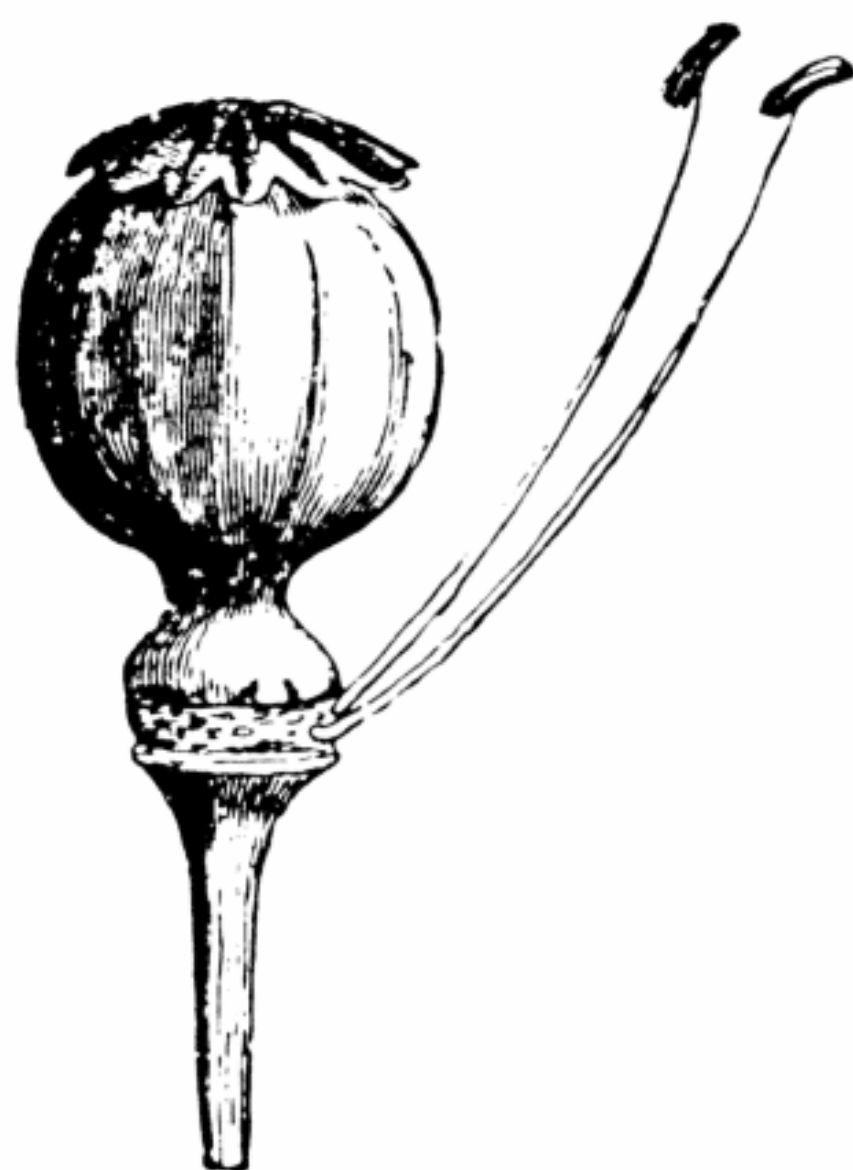
い。ギリシャや小アジアでは、栽培しているイチジクの結実をうながすために、枝に野生の小さな実をぶらさげるようなこともした。イチジクの野生との結合を刺激するために、男女によって性を暗示する儀式が行われることもあった。人間が堕落したのち、アダムとイヴは「イチジクの葉をつづり合わせ、腰を覆うもの」とし、これにならって、慎みが重んじられたヴィクトリア時代には、裸体の絵画や彫刻もイチジクの葉をもって「腰を覆うもの」とした。

寄生種のイチジクは、たくさんの気根でからみついて宿主を締め殺してしまうことがあり、またイチジクの木で首をつったというユダの物語もあり、イチジクの木は呪われた者、あるいは亡恩などの意味をもつようになった。「棕櫚の日曜日」は、かつてはイチジクの日曜日とも呼ばれ、この日には、イエスの言葉によって枯れてしまったイチジクの木にちなんでイチジクを食べる習わしがあった。すなわち、マルコによる福音書によれば、あるとき空腹をおぼえたイエスはイチジクの木に目をとめたが、近づくにつれて葉のほかは何もないことがわかった。「季節ではなかったからである」。そこでイエスは言われた。「今から後、いつまでも、おまえから実を食べる者がないように」そして翌日、イチジクの木は根本から枯れていたのである。

ケシ

Poppy

芥子の煙にまどろみ
からまりあった花ごと
そっくり刈り取るのもひと休み

ジョン・キーツ
『秋に寄せる』

イラクサが死の刺を象徴するように、まっ赤なケシは血と死のまどろみを象徴する。また、ルネッサンス美術ではキリストの受難を表わし、タロットでは、死者が天使のラッパで長い眠りから目覚めるという審判の日のカードに描かれている。イギリスでは、英霊記念日はポピー・デイとも呼ばれて、戦死者にケシの花を捧げる。

また、丸いケシの実にはいっぱいに種がつまっており、このために繁殖を象徴することがある。しかし、未熟な実から抽出される阿片は、苦い味と重苦しい匂いのある強い麻薬

であり、これを用いれば感覚を麻痺させ、精神を鈍らせるために、無知、無関心を意味することもある。妖術や呪術を行なう際に燃やすものは、おおむね昏睡、厳格、錯乱をひき起こすが、悪魔を呼びだす処方の一つに、毒人参、毒ゼリ、ナス科のヒヨス、それにケシを合わせて燃やす、とある。この混合物も痙攣や、一時的には精神錯乱さえひき起こす毒物として知られている。愛の魔力、すなわち媚薬は、ふつう催淫性のある薬草を粉にして、お目あての女性の食物にまぜる。しかし、ケシは欲望を誘発することはないし、呪術に使われるのも、ただ犠牲者を無力状態にひきこむ効果があるだけである。

ケシの花の赤は、浪費、虚飾、富を表わす色であり、ギルバートとサリヴァンの喜歌劇（コミック・オペラ）『我慢』のなかで次のように言わせたのも、あるいはこのケシの花の華麗な色だったかもしれない。「あなたのその中世風な雅（みやび）な手にユリの花か、それともケシの花でも抱いてピカデリーを歩けば、ペリシテ人はおしのけるだろうが、あなたは至上の美の使徒たちの仲間にはいるだろう」

リンゴ

Apple

盛りのときに獲るがいい
銀色の月の林檎を
黄金色の太陽の林檎を

A・B・イェーツ
『さまよえるアンガス神の歌』

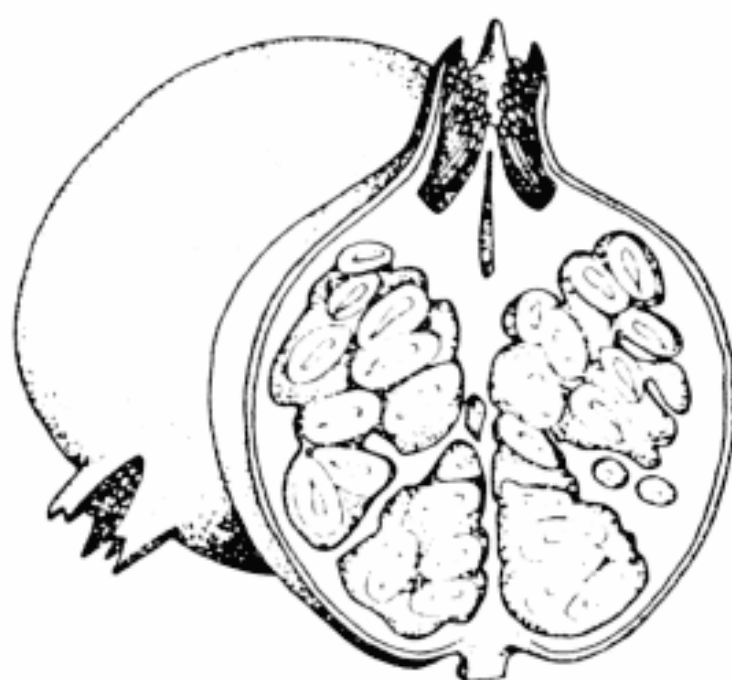
リンゴは口論、愛、欲望の象徴であるが、いずれにせよ、古くから多くの神話や伝説にたびたび登場してきた。しかし、神話当時にいう黄金の実とは、リンゴではなく、杏か花梨だったのではあるまいか。学者たちは、ソロモン王の時代に野生のリンゴがあったとするが、リンゴらしいリンゴはまだ知られていなかったはずである。リンゴを意味するラテン語「マロム」は同時に「悪」を意味する。エデンの園の知恵の木はリンゴの木とされてきたが、しかし、聖書はこの禁断の木の実の名には言及していない。リンゴは、伝説上ではむしろその丸い、左右対称の形に重要な意味を認めていた。不滅や完全を象徴する円や球

は、人間の物質的、精神的価値をそのなかに封じ込めていると考えられていたのである。そして美しいソドムのリンゴは「口にすれば忽ち灰になって」失望と幻滅をもたらした。
果実にまつわる話には善と悪の逆説がつきものである。ユダヤ教の聖典『タルムード』にはリンゴは健康によいと書かれ、リンゴの不滅性を強調している。また、アラビアンナイトでは、アーメッド王子のリンゴは万病を癒した。ところが、白雪姫がもらったのは毒リンゴであり、それを食べた白雪姫は昏睡に陥る。ソロモンの『雅歌』は「若者たちの中にいるわたしの恋しい人は森の中に立つりんごの木。わたしはその木陰を慕って座り、甘い実を口にふくみました」と書くのである。
これはリンゴの木をキリストになぞらえたものであり、リンゴは善と永遠の命を象徴する。そして、キリストが第二のアダム、すなわち罪の贖い主であれば、聖母マリアが手にするリンゴは救済の象徴であり、一方でイヴのリンゴは悪と誘惑の象徴なのである。
ケルト神話では、キュロア王の魂はリンゴのなかに隠され、そのリンゴは、七年に一度しか姿を見せないという鮭の腹におさめられていた。王の妃ブラスナットは愛人の英雄クークリンに王の秘密をあかし、二人してそのリンゴを手にいれようと謀る。そしてついに彼の剣がリンゴをまっぷたつにしたとき、あたりはにわかに闇につつまれ、リンゴのまんなかには五芒の星が輝いていた。それは不滅の象徴であり、宇宙と悪を人間のものとする神聖な力の徴(しるし)であった。

ザクロ

pomegranate

眩しい緑の宝石のような石榴
てっぺんには刺の刻みがあって、ちょうど王冠をのせたよう
おお、剣をならべたような緑色の金属製の王冠
この王冠はのびてゆく！

D・H・ロレンス
『石榴』

繁栄と和合を象徴するザクロの丸い果実のなかには、食用のみずみずしい種がぎっしりと詰まっており、とりわけ中東で好まれる。ギリシャ神話では、ザクロはゼウスとデメテルの娘ペルセポネの果実とされている。彼女は兄ハディスによって冥界に連れさられ、数粒のザクロを食べてしまったために半年を冥界で過ごし、毎年、春とともに地上に戻ってくる。またプリギュアのアッティスは、母ナナがザクロの実を食べて妊(みごも)った子であることから、ザクロは不滅、復活を意味するようにもなった。勇猛な戦(いくさ)の雌獅子であるエジプトのセクメットもザクロと関わりをもっている。戦場で敵を皆殺しにする彼女を見た太陽神

ラーは、人類が滅亡することを心配して、ザクロの果汁でつくった魔法の薬を七千の水差しに満した。この赤い液体を血とまちがえてむさぼり飲んだセクメットは、すっかり酔って戦（いくさ）どころではなくなり、人類は救われたのだという。

聖書時代のザクロはユダヤ教神殿の至聖所に持ち込むことを許された唯一の果実であり、古代ユダヤの大司祭の衣の装飾にも使われていた。またソロモンが建立したエルサレムの神殿では「柱の頭の上に、一列二百個の石榴がとり巻いていた」と言われる。ヨーロッパのユダヤ人はハヌカー祭りの燭台をダビデの星のうえにのせるが、元来はザクロで飾られたものであり、そのザクロは雨と子孫繁栄、すなわちイスラエルの「種族」の象徴であり、そしてザクロは虫のつかない唯一の果実とされていたからである。

ユリ

Lily

輝く百合を見たことがあるか
厚かましい手が触れる前に？
降る雪に目をとめたことがあるか
土に汚される前に？

ベン・ジョンソン
『彼女の勝利』

清らかで無垢なユリは聖母マリアの花であり、純潔の象徴である。またユリは、悔恨にうちひしがれてエデンの園を去るイヴの涙から咲きでたとする伝説もあり、聖クララ、聖ドミニクス、聖フランチェスコの貞潔をたたえる花でもある。ルネッサンスの絵画によく描かれる「受胎告知」はとくにユリと関わりがあり、ユリは大天使ガブリエルが手にしているか、あるいは花瓶に差してある図柄が多い。透明なガラスの花瓶も純潔の美徳を象徴し、そして、あらゆる容器は地上の生命の発

生、または女性の出産を表わすのである。
　エジプトで発掘される美術品には、ユリの紋様で装飾されているものが多い。紀元前二世紀にユダヤの宗教的、政治的独立をかちとったマカベア家の貨幣にもユリの図柄がしるされている。紋章としてのユリは、三匹のカエルを旗の印としていた中世のクロヴィス王にはじまった。王は隠者の言葉に従って、旗印を青い野に咲く三つのユリに変えたところ、勝運に恵まれるようになったのである。王はこの新しい旗印を「勇気の旗印」と呼び、のちにはフランス王室と正統の信仰の象徴となった。

アネモネ

Anemone

この世に咲くもっともみすぼらしい花が
涙もおよばぬ想いに気づかせる

ウィリアム・ワーズワス
『不滅の告示頌』

アドニスが荒々しい野猪に殺されたとき、愛人を失ったヴィーナスは悲嘆にくれて、悲しみのあまり、彼の傷ついた脇腹から流れる血を赤いアネモネの花に変えた。繊細なその花はたちまち、風に散ってしまい、それでアネモネは、その生まれでた若く美しい英雄と同様に短命なのである。アネモネは悲しみと死の象徴であり、アラブの人びとはこの花を「英雄の傷」あるいは「最愛の人」という意味の名で呼ぶが、それはアドニスを指してそう呼んでいるからである。フェニキアの港ビブロスでは、復活祭がくると川にアドニスの血が流れると言われ、彼の死を悼む女たちは、この復活の徴(しるし)を見て歓喜し、祝ったという。今日でもベイルートに近いジェベ

イルという村では、春になると雨によって山の赤土が流され、川の水が血のような赤い色に染まって、川岸はほんのいっとき、咲き乱れるアネモネにおおわれる。
　初期のキリスト教では、アネモネの三つにわかれた葉は三位一体の象徴であった。また、この花は、キリストの処刑が行われた地に咲きだしたとも言われている。キリストの死を悲しむ聖母マリアは、アドニスの死を悼むヴィーナスと同様に、しばしば受難と苦しみの花であるアネモネを手にした姿で描かれる。

豆 *Bean*

ここは古き良きボストン
豆とタラの故郷
ロウェル家はキャボッツ家と話をするが
キャボッツ家は神とだけ話す。

I・C・ボシディ
『一九一〇年ハーバードにおける晩餐会の乾杯の言葉』

豆は霊魂や亡霊と強い関係があるため、古代ギリシャやローマでは食用にすることを禁じていた。神話によれば、豆は女神デメテルの聖なる植物であり、デメテルはアルカディアの人びとに、ある種の豆類と穀物を植えることは許したが、いんげん豆の類だけは許さなかった。この豆は螺旋状にのびていくために復活と結びつけて考えられ、死者の霊魂は自由に豆のなかに入りこんで、ふたたび人間に再生できるとされていた。ピタゴラスも弟子たちに豆をあつかうことを禁じたが、当時、選挙は兜（かぶと）に豆を入れる方法で行われていて、これは政治に関わらないという意図を表わしているとする説もあり、またピタゴラス

は霊魂の輪廻を信じていたために豆を食用にしなかったとする説もある。それから二世紀後、プラトンの弟子たちは、まだ豆を遠ざけていたが、しかし、この場合は豆を食べれば腹にガスがたまるという合理的な根拠があった。

紀元一世紀、ローマの博物学者プリニウスが記したところによれば、死者の霊魂は豆のなかで生きつづけており、悪霊や魔女を除ける最善の方法は、豆を投げつけて霊魂が再生する機会を与えることであった。ローマ人は死者の悪霊にひどく悩まされていた。悪霊はレムレースと呼ばれ、生きている者を苦しめるために戻ってくるのである。レムレースを払うには、一家の父が真夜中に起きあがって指を鳴らし、三度手を洗い、そして、口いっぱい豆を含んで後に向かって吐きだしながら「この豆を撒き、豆をもって自らと家族を救いださん」と唱えるの

である。

豆にかかわる神話はローマ人とともに滅びたわけではなかった。一五七七年、スコットランド王室から桂冠を授けられた詩人アレグザンダー・モンゴメリーによれば、魔女は豆の茎に乗って宴会にくるのだという。また、クリスマスの行事の最後の日、十二節の前夜祭にも、豆は名誉ある役を与えられていた。ケーキのなかに豆がかくしてあり、その豆にあたった幸運の持ち主は豆の王様と呼ばれて、好天と豊作を祈る行事を司る役にあたるのだった。今日では『ジャックと豆の木』の物語がよく知られている。ジャックが牝牛ととりかえた豆はみるみる天まで伸びて、豆の木のてっぺんには人食い鬼の姿をした、凶悪このうえない大男がいたという話である。

バラ
Rose

赤い薔薇はあつい情熱をささやき
白い薔薇はそっと愛をささやく
おお、赤い薔薇は鷹
白い薔薇は鳩

ジョン・ボイル・オライリー
『白薔薇』

バラはヴィーナスの花であり、歓喜、勝利、完全を象徴する。ただ一輪のバラが、ちょうど曼陀羅のように神秘の核心を表わすのである。花言葉では、バラの花冠は美と報われた美徳を表わす。しおれたバラは美のうつろいやすさを意味し、大きくて鋭い刺のある野バラは快楽と苦痛を意味する。キリスト教では、聖母マリアは原罪に汚されることなくこの世に生まれ、そのゆえに「刺なき薔薇」とも呼ばれる。しかし、同じバラでも黄金造りのバラは信仰の成就を表わし、教皇に属するものとなった。麝香（じゃこう）とバル

サム香がかおりたつ黄金造りのバラは、古くからカトリック教会への奉仕に対する褒賞であった。ローマ教皇の祝福とともに、この黄金のバラを最後に授かったのは一九五六年ルクセンブルク大公妃であった。しかし、いかなるバラにもまして紅白のバラこそ深い意味をそなえている。古代の錬金術では、相反するものは紅白の二色において結合を果たすと考えられていた。赤は情熱の象徴であり、白は純潔の象徴であり、錬金術に使われていた不思議な紅白のバラは火と水の融合の象徴であった。この融合は生命あるものの理想的な状態であり、ソロモンの『雅歌』は完全無欠のキリストを「わたしの恋しい人は白く、赤く、赤銅の色に輝き、ひときわ目立つ」とたたえている。

古代ギリシャやローマでは、招かれた先のテーブルにバラの花が吊りさげてあれば、そこで話されたことは他言無用であるとの意味だった。そして、後には会議室、宴会場、告解室などの天井には思慮の象徴としてバラの花が刻まれるようになった。ラテン語で「秘密の」を意味する「スブ・ロサ」という言葉の語源ははっきりしないが、あるとき、キューピッドが沈黙の神ハーポクラテスにバラの花を贈って、母ヴィーナスの情事を他言しないように頼んだことに由来するとも伝えられている。

文明の所産——

文明の所産とは人間の避難所である家屋であれ、敵から身を守る武器であれ、食物をいれる鉢であれ、いずれにせよ人間が造りだした物である。人間は自分をとりまく世界に順応しなければならず、生存をはかるためには、精神に関しても、また肉体に関しても秩序ある感覚や概念を必要とし、こうした基本的な要求に応じて、さまざまな物を作りだしてきた。このような日常の生活に密着した物は、時の経過とともに、その起源や象徴的意味は次第に失われ、消え去り、変貌していった。しかし、人間の努力によってつくられたあらゆる物の形や機能、性質は、それが実用のためにつくられた物であれ、あるいは造り手の楽しみのために造られたものであれ、そうした具体的な目的を越えた何かを内包していた。

古代人にとって、空から降ってくる隕石は天界の力や神性と結びついており、人間が使った最初の鉄はこの隕石に起源をもっていたため、鉄から造られたあらゆる物に神聖な意味があった。鉄の剣は人を殺すための道具であるばかりでなく、同時に神の恩寵をそなえているがゆえに、悪霊や悪魔から身を護るための武器でもあったのである。たとえば篭にしても、何かをいれる容器であるだけでなく、子宮や母体を象徴するがゆえに、実用性

をこえる重要な意味をもっていた。神話では、しばしば原初の創造の源である水と結びつけて考えられていた。だからこそ、バッカスを宿したセレメは篭に入れられて川に投げこまれたし、モーセは葦の揺り篭にいれられてナイルの葦のなかを流されていったのである。なかには、ある種の神秘的な力がそなわっていて、おのずから高い象徴的価値を生ずるような物もあるようである。しかし、それほど複雑でないものは、たんに男性的要素なり、女性的要素なりを表わすに過ぎない。たとえば、大地の受動性を表わす鉄床(かなとこ)は、ハンマーによってはじめて活動を起こして生産に貢献する。また、他の何かとの関連によって象徴性を得る物もある。すなわち、多くの聖人や殉教者、神、神話に登場する怪物などを表わす象徴がそれである。たとえば、櫛は船乗りを誘惑するセイレンにも、また鉄の櫛で拷問されて殺された聖ブレイズにも関連を持つのである。

芸術の分野では、超現実派やダダイズム運動が、事物から伝統的意義や日常的用途をはぎとって、遡ってその源の姿をさぐり、象徴的な意味を指摘しようと試みた。ただの盃が聖杯でもあれば、生贄(いけにえ)をのせる器や、原始的な太鼓でもありうるのである。画家のマックス・エルンストは扇を描いて宇宙とし、絶えず変化し動いている状態の世界を表現した。古代中国では、扇は死者の霊を蘇らせる風と空気を表わし、西洋では、伸びたり縮んだりするという機能から、月とならんで、潮の満干や想像力と結びつけられた。また、細長い物から完全な円にまでなりうることから変化の象徴ともされている。完結した円を形成す

る腕輪や指輪は、明らかに排他性をもち、全体性、連続性や永遠にくり返される生命の周期を表わす。矢に射抜かれた心臓は結婚と愛の象徴としてよく知られているが、原始的信仰では、これは天と地の神聖な結合を意味していた。

また、物の紛失は悲しみや嘆きに結びつけて考えられていた。神話や伝説では、物の紛失は自分自身を失うことであり、したがって自己の魂の永遠性を失うことになり、死に等しい状態になることである。紛失自体は偶然や、やむをえぬ事情によるものであっても、その根底では自己の存在を存在たらしめている源を忘れること、あるいは遠去かることなのである。神話や伝説の重要な主題である宝物探しの物語では、求める物は金の羊毛であったり、一大財宝であったりするが、いずれにせよ、それは象徴であって、失われた物を探し求める旅にこそ意義があり、探索とそれに続く再発見、あるいは再会もまた人間の死と復活のアナロジー（類比）なのである。

鐘

Bell

けたたましい目覚しの音を聞け！
真鍮の鐘の音を！
なんと　恐しい物語を
今、騒がしく轟かせていることか！

エドガー・アラン・ポオ
『鐘』

天と地のあいだに、絶妙の弧を描いて吊りさがる鐘は、神秘的な保護の力を象徴する。四世紀にノラの主教によってカパニアの教会に鐘がつけられて以来、キリスト教徒は大いに鐘を導入した。しかし、『出エジプト記』にユダヤ教の聖職者の衣につけられた音をたてる装飾品、すなわち鈴について言及されているものの、キリスト教以前の鐘や鈴については、ほとんど何もわかっていない。古代ローマ時代、公衆浴場や祭列に人びとを呼び集めたのは、おそらくシンバルか、キュベレの祭祀に使われた鈴つき太鼓か、あるいは、ガラガラに似たエジプトのシストルムであったろう。以来、鐘は死や危険や喜びを伝えて、

兵士を戦場へ、キリスト教徒を教会へと招集した。幾多の流血の章が鐘によって始まり、鐘によって終ったのである。一五七二年の聖バルトロメオの日、フランスではユグノー派大虐殺の先触れの鐘が響いた。十九世紀、チェスターの大聖堂の鐘はトラファルガーの勝利を告げ、喜びの鐘声が響きわたったが、たちまち、それはネルソンの死を告げる一点鐘に変わったのだった。

多くの場合、宗教上の鐘の使われ方は古い風習や俗言と結びついている。日本人は、死を迎えようとしている者の霊魂は寺に赴き、「霊鐘」を鳴らして旅立ちを僧に告げると考えていた。そこで、かつては死にゆく者のために鉦を鳴らしたが、今では死後にのみ鉦が鳴らされるようになった。キリスト教の世界でも、死者の魂から悪魔を追い払うために葬

儀で弔鐘を鳴らすことが一般に行われていたが、これは清教徒時代に禁止された。しかし、この俗信は根強く残り、他の形で生きつづけている。

悪霊を脅かし、追い払う鐘の力については、あらゆるところで信じられているようである。アフリカのいくつかの部族では魔除けとして鈴を身につけており、とくに病人のまえでその鈴を鳴らして、弱った体に悪魔が入り込むことをふせいだ。また、鐘は聖アントニウス・アボットと関連があり、ルネッサンス美術では、神に授かった悪魔払いの力を象徴する鐘を持つ姿で描かれている。六世紀にはユスティニアヌス二世がトルコ人と和平を結ぼうとしたとき、その使者は鐘を鳴らし、タンバリンを打ちたたく祈禱師たちに迎えられた。これは歓迎の挨拶ではなく、むしろ未知の者が運んでくるかもしれない悪霊を払おうとしたのである。神に献納された鐘は悪魔を払うだけでなく、火を消す力、嵐や疫病をしずめる力をもっていた。時代は下って一八五二年、マルタの司教は教会の鐘を鳴らさせて「強風(あらし)を鎮めた」という。

冠

Crown

愉しい夢をもつ者一人
敢然と王冠を奪う
新しい歌の節をもつ者三人
帝国を蹂躙する

アーサー・ウィリアム・エドガー・オショーネシー『頌(しょう)』

花や葉の冠は神の頭上にあって、その神たる所以をしろしめすものであった。やがて、冠は王位を象徴するようになったが、高く聳えたつ樹木を象徴するという、そもそもの意義はいくぶんなりとも今に伝わっている。ちょうど樹木の頂きのように、頭に頂く冠は世俗の成功だけでなく、人間の精神に関わる成功を表わした。ローマ共和国では勇者に授けられるもので、さまざまな冠がそれぞれ異なる意味をもっていた。金でつくられ、柵をめぐらせた形の「戦陣の栄冠」は、敵の砦に一番乗りを果たした兵士に与えられた。敵兵を殺

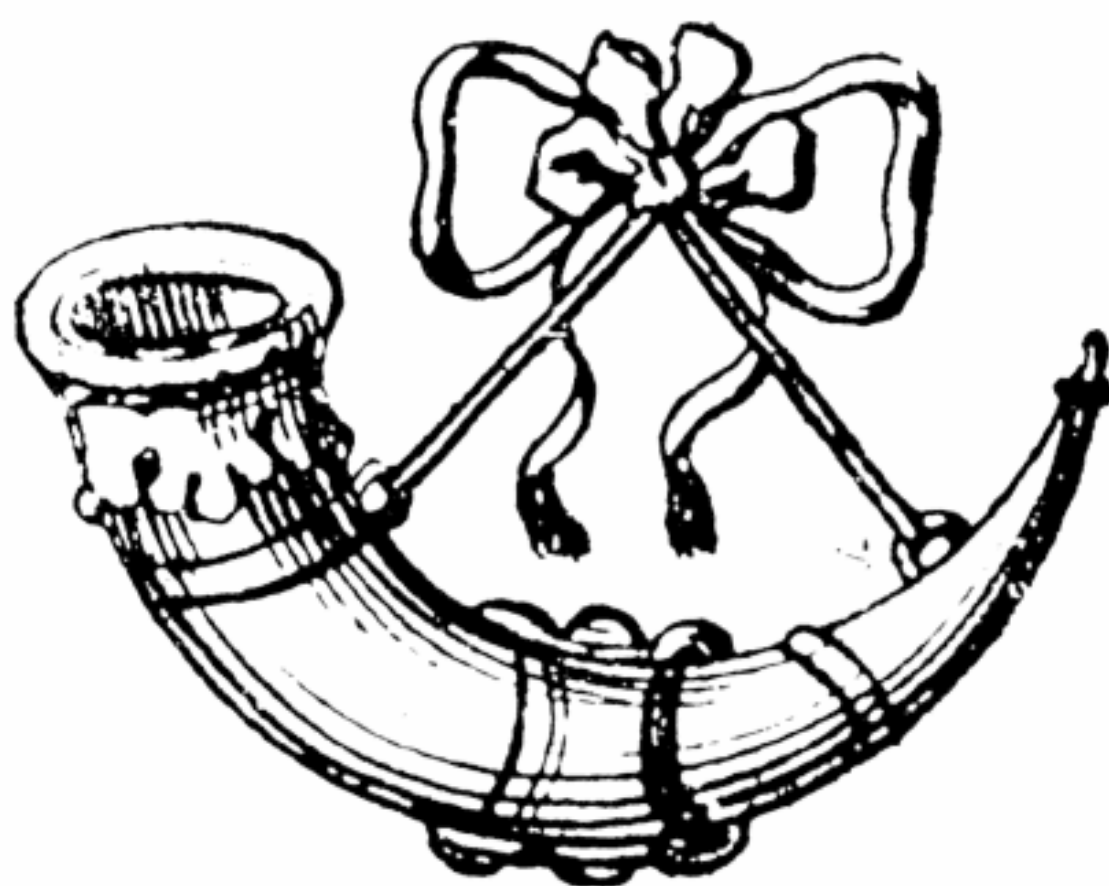
し、ローマ市民の命を救った者が受ける「市民の栄冠」は樫の葉でつくられていた。また、おそらく現存するヨーロッパ最古の冠である「ロンバルディアの鉄の冠」は、イエスが処刑された十字架の釘をうちのばした鉄が一部に使われていると伝えられている。この冠を七七四年にカール大帝が、また一八〇五年にナポレオンが戴冠した。「ロンバルディアの冠」は、のちにイタリアに返還され、モンツァの大聖堂に安置された。

錬金術師にとって、錬金の秘密は、すなわち神の恩寵のしるしであった。母材金属が金に成ることは錬金術師自身が精神上の展開を果たすことであり、それは永遠の生命を表わして燦然（さんぜん）と輝く宝冠によって象徴された。古い呪術教本では母材金属を金や王で表わし、主人に頭を下げる無冠の奴隷の姿で表わし、やがて、錬金が成ったことは頭を上げ、冠を頂いた奴隷の姿で表わしている。

角 *Horn*

見よ、海から立ち現われるプロテウスを
聞け、花で飾った角笛を吹くトリトンを

ウィリアム・ワーズワス
『世界は我等の身にあまる』

ディオニュソスの聖獣である牡牛の角(つの)にせよ、悪魔の化身である牡山羊の角にせよ、あるいはモーセの頭の角にせよ、有史以前から中世にいたるまで、角は偉大な力と強さの象徴であった。角のある神ケルヌンノスは、元来はケルトの神であったが、広く信仰されて、イタリアで紀元前四世紀の岩に刻まれた像が発見されたほか、ローマ時代やケルト文化の像があり、アイルランドの砂岩にも刻まれている。この神については不明なことが多いが、牡鹿のようなその角は、おそらく稔りの周期を表わすもので、また悪魔と同じように蛇や地下の世界とも関連があったとされている。

角は、何らかの逆転の過程を経て、とくに神秘学の世界で邪悪な力を意味するようになったが、おそらく、これには去勢や犠牲を象徴する去勢牛と混同されたことも考えられる。昔、凶事を表わすには、手の指の中三本をまげて隠し、外側の二本を立てて頭に生えた角の形をつくった。二という数は結束を表わし、神を表わす一という数を越える初めての数であり、悪魔にとっては神聖な数である。また、伏せられた三本の指は三位一体の否定を表わしている。

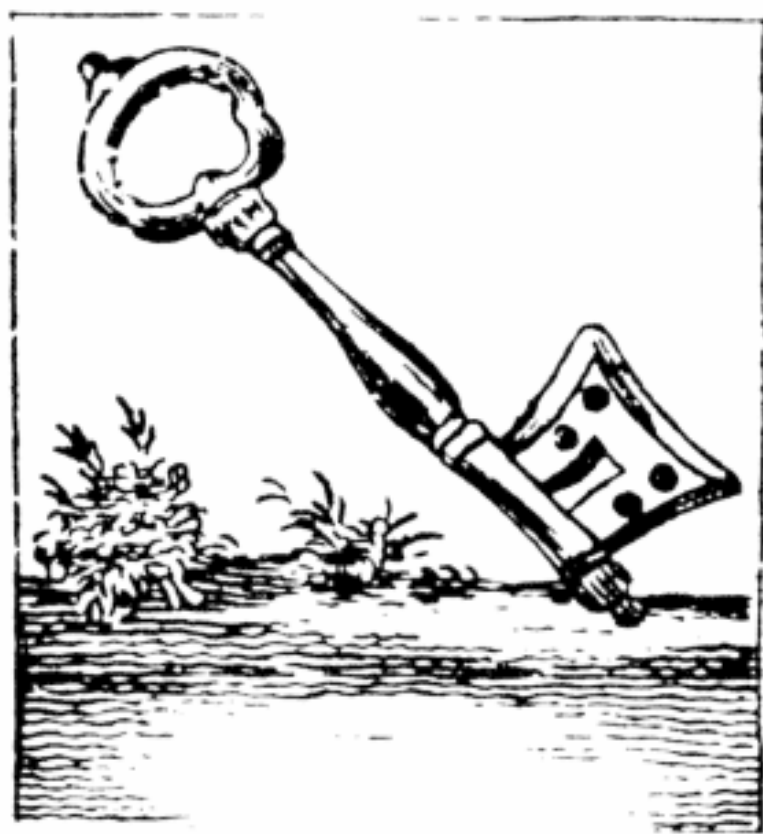
他方で、角は栄光、勝利、力を表わす神聖な象徴であり、戦場の兜(かぶと)や楯を飾った。古代エジプト人にとって角の形は「頭上」を意味し、すなわち神聖なものを表わした。また突破口をひらく破城槌のように「道を開く」ことも表わした。占星術では、牡羊座、すなわち白羊宮は黄道十二宮がちょうど一巡して新たな周期を迎える時にあたり、牡羊がその角で新たに「道を開く」ことは象徴的である。古代ヘブライ人の祭壇は角で飾られていた。起源ははっきりしないが、その角に犠牲の動物を吊したとも考えられる。屠殺された犠牲獣の血に染まった角は神聖なものであり、手を触れた者はみな免罪を得たのである。『列王紀』には、ダビデの息子アドニアが兄弟から王位を奪おうとして「ソロモンの面を恐れ、起ちて行き祭壇の角を捉えた」と記している。

一本だけの中空の角は「豊饒の角」と呼ばれ、善きもの、豊かさを意味する女性的神秘の器である。伝説に名高い一角獣はこの「豊饒の角」のもつ力と関わりがありそうである。

中国では犀の角で盃をつくったが、これは繁栄と力の象徴であった。聖書の時代には聖油や薬液をいれる器として中空の角が使われた。また礼拝にヘブルの人びとを呼び集めた、ショファール喇叭は最古の楽器の一つであるが、これは牡羊の角を熱して平たく伸ばしたものであり、おそらくは、その昔アブラハムによって生贄（いけにえ）に捧げられた牡羊に由来するものであろう。

鍵　*Key*

ガラリヤ湖の水先案内人
ずしりと重い金属製の、鍵を一対もっていた
(金の鍵は開けるときに、鉄の鍵はがっちり閉めるきに)
ジョン・ミルトン
『リシダス』

鍵は常人には知りえない或る事柄を象徴するが、その事柄は人が死ぬ間際か、あるいはごく少数の選ばれた者だけに知らされる。おそらく、その事柄の意味するところは、古代エジプトの「アンク」、いわゆるエジプト十字架で表される「永遠の命」に関係するものであろう。上部が輪になって鍵に似た形のこの十字架を手にしたエジプトの神々の姿は、死者を弔う祭儀の場面でしばしば描かれている。キリスト教徒はそれを受けて、永遠の命へと導く門を開ける、聖ペトロの鍵とした。聖ペトロの後継者である教皇の紋章は金銀の鍵を交差させた意匠であり、これは聖職の最高権威を象徴する。ロマネスク美術では鳩をあしらった鍵がよく見ら

れるが、これも天国へいたる門を開く聖霊を表わしている。
民話や伝説では、鍵は何らかの隠された知識の象徴である。長い探究ののちに鍵を見つけて、そこではじめて、秘宝になり、あるいは魂の真理なりの発見にいたる第一歩を踏み出すのである。このような探究の進行過程は、しばしば銀の鍵、金の鍵、ダイヤモンドの鍵で開かれる三つの扉に象徴される。金銀の二つの貴金属の鍵は理解と知恵を表わし、ダイヤモンドの鍵は、神秘の核心につながる光と輝きを表わす。また鍵は、剣などの刃物とともに疫病や憑依（ひょうい）除けのお守りでもあった。元来これらのものは鉄でつくられていた。そして、鉄は神の金属だったからである。昔、占いの一種のクリドマンシーを行うときには、『詩篇』第五篇のところに鍵をはさみ、その聖書を処女のガーターでしっかりと縛って釘にぶらさげたという。名を呼びあげていくうちに盗人の名がでると聖書が揺れだすと信じられていたのである。

梯子　*Ladder*

われわれは梯子をつくって登る
低い大地から、弧を描く天空へと
一段、一段、弧のてっぺんへと登っていく

ジョサイア・ギルバート・ホランド
『一歩、一歩』

神と人間が平和に調和して暮していた黄金時代の言い伝えは、どの神話でも語られている。人間が神を怒らす以前のその頃、天と地をへだてるものは梯子（はしご）と、山と、樹木だけだった。ところが人間が犯した原罪によって越えがたいへだたりができ、梯子は神の許に戻りたいという人間の願望を象徴するようになった。梯子を登ることとは楽園にいたることであり、地の下に降りていくことは地獄に行きつくことであった。『コーラン』によれば、モハメッド（マホメット）は「正しき者、善なる者が神の許に登る」梯子を見たといい、聖書はヤコブの幻想として「そして彼は夢見、地上に置かれた梯子を見た。そのてっぺんは天にまで届いており、神の御使いたちがそれを登り降りしているのを見た」と記してい

る。ある世界から別の世界へ至る道をひらき、あるいは、別の段階に踏みこむことを表わす梯子は、同時に、天の美徳にも、また地獄の罪にも関わりをもたざるをえない、この地上界を象徴することもある。

また、古代エジプトの墓からは梯子を刻みつけた魔除けが多数発見されている。エジプト人は、死後、偉大なる神オシリスの許にいたるには、九段の階段を登っていかねばならなかった。九段の階段は九人の神を表わし、オリシスの神と合わせて十という神聖な数、すなわち周期をまっとうして不変の一体化にいたることを意味する数字であった。『エジプトの死者の書』には「神は彼に梯子をつくり、これによって天にいたる」と書かれている。弔いの儀式で梯子をつかうという風習は、アジアの素朴な宗教などに現在も残っており、いずれも霊魂の蘇りに関係がある。

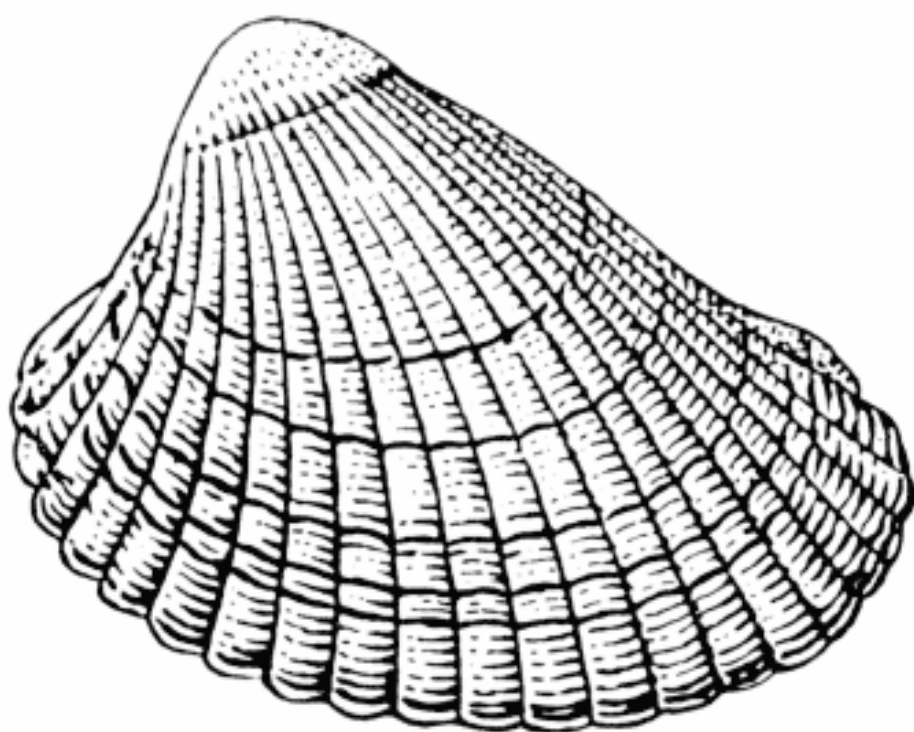
古代ローマ時代のキリスト教と競合する、ほとんど唯一の宗教だったミトラ教の秘儀を授かる者は、神秘の七つの階段を登ることによって、はじめて光の神との一体化を果たすのだった。この祭儀用の梯子の各段はそれぞれの星座に属する異なった金属でできており、最上階の七番目は太陽の座であり、その金属は金であった。秘儀を授かる者は梯子を登っていくにつれ、七つの天界をめぐっていくのである。それは、ちょうどバビロニアの階段状神殿の七つの段を登って究極の天に達し、また仏教寺院の幾層ものテラスを登っていくことが宇宙界を通りぬけることを意味するような意義をもっていたのである。中世にいたっても、錬金術では、全き状態にいたるには段階を踏むべきものとされ、究極の聖なる物質「賢者の石」を造りだすにあたっても、いくつかの局面をへて成された。このように、梯子は上昇の象徴であり、しばしば十字架や天使、あるいは星などの神を表わすしるしを上にのせた図柄で描かれている。

貝殻

Shell

渚にまき散らされた貝殻を集め
その唇に耳をあてよ
どの貝殻も同じ願い、同じ神秘を囁く
大海原の語る声のこだまを

ダンテ・ガブリエル・ロセッティ
『海原の果て』

アプロディーテ（ヴィーナス）が帆立貝から立ち現われるよりも、トリトンが波間から巻貝を吹きならすよりもさらに古くから、貝は神秘的な再生を象徴していた。古代エジプト人は、紅海がもたらす貝殻でネックレスやブレスレット、また女たちを不妊や災いから守るお守りをつくった。王朝以前のエジプトの墓には、希望と復活を象徴する神聖な貝の模様が刻まれている。貝は原初の海に生まれ、また女性の形に似ていることから真珠や牡蠣とともに出産を助ける力があるとされた。貝に神性を見ることは、有史以前からいたるところで行われていた。ヒン

ドゥー教のヴィシュヌ神の象徴の一つは巻貝であり、ヒンドゥー教では結婚を告げる喇叭（らっぱ）に巻貝が使われた。他の大陸では、南米のアステカ民族は貝を霊的再生の崇高な象徴と見なし、信仰上の儀式で重要な役を果たしていた。また古代の日本には、再生を確実なものとするために、遺体に貝殻の粉を塗る風習があった。中国では、巻貝を安置して裁判が行われた。広く宇宙に関わって生命の象徴とされる巻貝は、宇宙的リズムの破壊や、社会への犯罪を解明する力をもつと考えられていたのである。

キリスト教徒は、エジプト、ローマから帆立貝のもつ象徴性を継承した。中世には、巡礼、とりわけスペインのコンポステラにある聖ヤコブ寺院への巡礼の印であった。その由来には、巡礼たちがコップ代わりに貝を使かったことによるという説もあり、またコンポステラが海岸であることによるとする説もある。しかし、たとえ貝の由来は忘れられても、巡礼の目的は、やはり霊的再生にあったのである。

矢 *Arrow*

心の一目の何という速さ！
飛ぶようなその速さには
風さえも遅れをとる
ひらめく翼のような、光りの矢さえかなわない

ウィリアム・クーパー
『伝アレグザンダー・セルカークの詩』

矢は、天界の射手であり太陽神であるアポロンの神聖な武器である。アポロンの矢は、足の悪い鍛冶神ヘーファイトスによってつくられ、太陽の光と輝きを象徴する。この的を外すことのない矢は正義と死を行うのである。太古、矢尻は燧石(すいせき)でつくられ、木の葉の形をしていた。これは、おそらく聖なる命の木に由来するものであろう。そして、天から下ってくるものである矢は、人間や家畜を雷光からまもる魔除けとされていた。また、アメリカのインディアンは、日蝕が太陽を滅ぼすことを恐れ

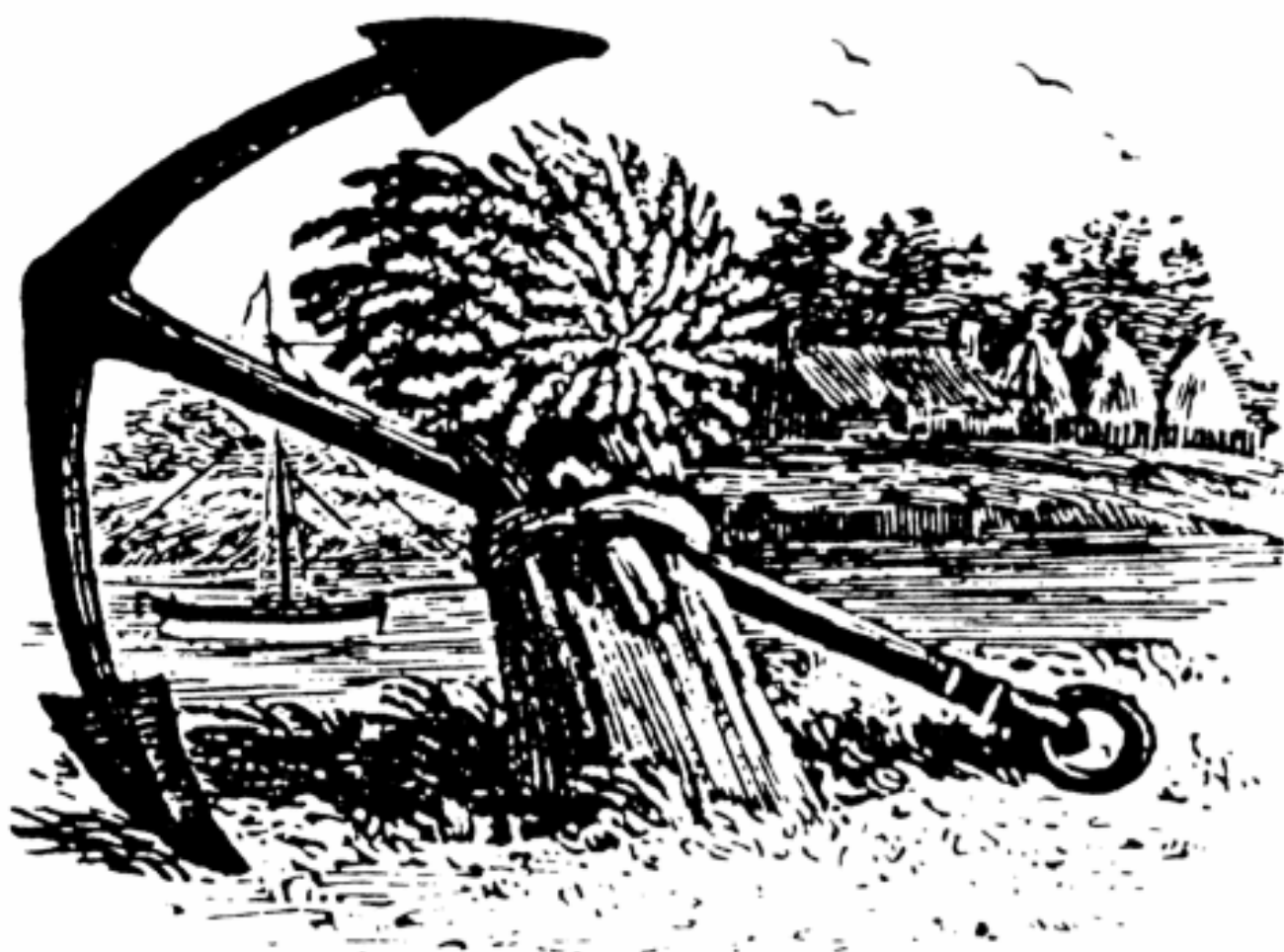
て、天の光を取り戻すために火をつけた矢を天空に向かって射たという。キリスト教徒にとっても、矢は聖霊の武器であり、神の使途に奉ずるものであった。しかし、一方では多くの殉教者に死をもたらす武器であった。信仰を捨てることを拒んだ聖セバスティアンは、ローマ皇帝ディオクレティアヌスの衛兵の放った矢によって射抜かれた。のちに聖セバスティアンは疫病におののく人びとの守護聖人となったことは不思議なようであるが、これは、恐るべき病はアポロンの矢によってもたらされると信じられていたことに関連するのである。

さらに矢の神聖性を遡れば、古代のギリシャやアラブで行われていた占いであるベロマンシーの道具に使われていたことがあげられる。のちに『コーラン』はこれを禁じたが、たとえば、進むべき方向を占うには、多数の矢を空に向かって投げ、落下した矢によって方向が示されるのであった。『エゼキエル書』は「バビロンの王二つの道の分かれる地点に立ち、そこで占いを行う。彼は矢を振り、テラフィムに問い、肝臓を見る」と記している。

錨 *Anchor*

気懸りはすべて神にあずけよ
錨が留めている神に

アルフレッド・ロード・テニスン
『イノック・アーデン』

はじめ、錨は、初期キリスト教信者のひそかな礼拝所であった古代ローマ時代の地下墓地に、魚とともに刻まれていた。その後は上下逆さまの形であったり、星や三日月、十字架をそえて描かれたりして神秘性を表わし、希望、不動、救済を象徴するようになった。また宝石や貴石に錨が刻まれることもある。その由来は、「神が偽ることはありえません。わたしたちが持っているこの希望は、魂にとって頼りになる、安定した錨のようなものであり」というヘブライ人にあてた聖パウロの手紙に

みることができる。

俗にサンタクロースの名で親しまれている聖ニコラウスは聖地パレスティナに向かって航海の途上、錨の徴(しるし)を身につけて海を鎮めたと伝えられる。今日でも、つねに錨をかたわらにした聖ニコラウスの像は世界各地の港で見ることができる。また、聖パウロの後継者と目されていたローマの聖クレメンテは、信仰を捨てることを拒み、弟子たちとともにクリミア半島の大理石採石場へ流刑される身となったが、水の欠乏に苦しむ弟子たちのために奇跡を行って彼らの渇きを癒した。このために、聖クレメンテは首に錨をくくりつけられて海に投げ込まれたと伝えられている。キリスト教の美徳を人格化して描いたルネッサンス期には、錨の象徴性は広く知られるようになり、たとえば「希望」は翼をもつ女性が錨を足元にして、両手を空高く掲げた姿で表現されている。

蹄鉄

Horseshoe

釘がなけりゃ蹄鉄がない
蹄鉄がなけりゃ馬がいない
馬がいなけりゃ乗り手がいない

ジョージ・ハーバート
『ジャコラ・プルーデントム』

古代人は馬の蹄をサンダルやソックスのようなもので保護していたが、紀元前二世紀頃には蹄鉄ができ、中世にはいって一般に広く知られ、使われるようになった。蹄鉄はよくお守りとして用いられるが、これは、馬が象徴する神秘的な力の一部を、蹄鉄も分ち持っていると考えられていたためであろう。ちなみに馬は人間の友であり、予言の力をもつとされていた。十七世紀の古物蒐集家ジョン・オーブリーによれば、蹄鉄は魔女除けに効果があったという。蹄鉄は鉄でできており、鉄は戦(いくさ)の神マルスの金属であり、マルスの星である火星は魔女の神サタンの敵であるというわけ

である。また、蹄鉄は子宮の形をしており、子宮は善きもの、豊饒、豊富を象徴するところから、すなわち悪霊を払うものとする説もある。あるいは、ヨーロッパの国々にさまよいこんだジプシーたちが、蹄鉄は保護の力をもち、幸運をもたらすものとして、他の妖術や黒魔術とともに持ちこんだ可能性も考えられる。

象徴のもつ力は、それを表わす物体そのものにあるだけでなく、物体に投射された観念にも力を及ぼすため、それがやがては悪になる物体、善なる物体をつくり出すのである。蹄鉄はナポレオンの艦ヴィクトリー号のマストにもつけられていたし、また、戸口の上に蹄鉄を開いたほうを上にして打ちつけ、幸運を逃がさないようにするなど、今なお蹄鉄は幸運のお守りとして非常に人気がある。

訳者あとがき

昔々、というほどではないが、一昔を三つ重ねたほどの年月がたった。
日本美術史のゼミで「六大寺巡礼私記」を読んでいた。
「ナギコッ」わたしの名前である。安藤更生先生は、女子学生の場合、つねに姓ではなく名をよばれた。姓のほうは早晩変わるが名前のほうは変わらん、という深慮遠謀だったのかもしれない。
「ハイッ」
「舎利ってなんだッ」
「仏さまの骨のことですが、仏舎利塔にはルビーやサファイアなんかの宝石がはいっているそうです」
「もひとつあるだろッ」
「……」
「銀シャリを知らんかッ」
「……」
「ハッハッハッハッ」

もちろん知っている。わたしがよほど口惜しそうな顔をしたのだろう、先生はじつに嬉しそうに笑っておられた。さも愉快気な先生を、わたしは睨みつけていたにちがいない。それより前だったか、後だったか、学校帰りの古本屋街の一軒で（駅に向かって右側だった）思想家としてのお名前だけは知っていた福本和夫氏の「唯物論者のみた梟」という本をみつけた。最近になって改訂版がでたようだが、その時に買い、長年の愛読書となったこの本は一九五二年版である。精神の自由が横溢したこの本は、学者の遊び、いわば余技であるにしても、その実、もっと深い、もっと根本にある、その人の精神の発露に思えた。

それから十数年後、ロンドンに遊び、大英博物館に近い、これまた古本屋で何冊かの本を買った。そのうちの一冊がこの本の原書〈THE BOOK OF SYMBOLS〉である。つれづれに読むうちに、この楽しみを多くの人と分かちあいたくなった。

私事を書きつらねたが、以上が本書日本語版の成立事情である。

本書冒頭の「はじめに」で著者はシンボル（象徴）、イメージ（心像、概念）、サイン（表象）、アナロジー（類比）などの用語について定義し、解説している。関心のあるかたはそこを読んでいただくとして、いずれにせよ、要は、人間がそれに（動物なり、植物なり、物なりに）何を見たか？　ということであろう。言うまでもないが、問題は人間であ

る。

著者は、人間の心にうつるイメージはもとより、それを具象化したシンボルも、神に似せて造られた人間が生まれながらにもつ、人知をこえた神秘だとしている。わたしは人間を神の似姿とは考えず、したがってこの説をとらない。むしろ、シンボルとは現に存在する事物の抽象だと考える。しかし、たとえば大半の人間が（そして大半の哺乳類が）ヘビやクモにたいして感じる嫌悪や恐怖のように、にわかには説明のできない現象を考えれば、遠い先祖から受けついだ記憶の神秘を思わないわけにはいかない。

現実のヘビやクモは人間にきらわれているが、人間は、その厭わしいはずのヘビやクモにも尊いもの、神聖なもの、人間の力を越えたものをみている。ヘビの場合は、まだしもわたしたち日本人にもうなずけるところがある。白いヘビはしばしば神の使いとされるし、身近かには、ヘビのぬけがらを財布にいれておくと金持ちになる、というような言いならわしもある。だが、クモとなると不気味なばかりで、わずかに魔性を表わすところに畏敬の念がみえないではないが、積極的な評価はみられない。ところが、西洋、とくにイギリス製のブローチなどにクモの形をしたものがある。大きくふくらんだお尻の部分が宝石なりプラスチックなりでできていて、細い金属の足がついているクモの形をしたアクセサリーはいかにも悪趣味に感じられる。かねがね不思議でならなかったところ、なるほど、そういうことだったのかと、本書クモの項を読んで不思議はとけた。あれはお守りに

由来するものだったのだ。そうした先人たちの目や心は、わたしたちの日々の暮しの細部にわたって生きつづけている。それを探りだし、探りえた目や心をもって、ふたたびその対象である、たとえばヘビやクモを見なおしてみれば、そこに新しい寛やかな世界が現われるにちがいない。

翻訳にあたっては、さまざまな引用のうち、聖書をのぞいては既訳をつかわなかった。聖書については、原則として新共同訳をつかわせていただいた。ただし、前後の関係から一部言葉を変えたところもあり、かならずしも新共同訳のままではないことを記しておく。とくに、原書では、一七世紀はじめに完成したジェームズ一世の欽定英訳聖書から引用しているようで、ヘブル語、ギリシャ語から直接日本語にした新共同訳とは、細部をみれば異なる箇所がある。たとえば、宝石の項、イスラエルの子らの名を表わして十二個ある胸当ての宝石の並び方は新共同訳とは異なっている。さらに重要なのは亀の項である。レビ記のその箇所は、新共同訳（だけでなく）では「二羽の山鳩、または二羽の家鳩」となっている。長い複雑な聖書翻訳史上にこのような例はままあるらしく、ヘブル語から英語に翻訳される過程で野牛が一角獣になり、のちに改訂されたというような例もある。この亀の場合にもそのような事情があったのだろう。ちなみに、山鳩の一種、コキジバトは英語では turtle dove (Streptopelia turtur) であり、古くはたんに turtle とよばれていた。

さて、ここらで著者について語らねばならないが、残念ながら不明である。問合せてみたが、どうしたことか返事がおくれている。日本の東京で可能なだけの手をつくして調べてみたが、いかなる人名録にも名はなかった。ガライという名はアングロ・サクソン系の名前ではない。スペイン系、それもバスク地方の名前である。あるいはハンガリー系という可能性もある。しかし、この本は英語で書かれ、ロンドンで出版され、また、内容からしても、著者は間違いなくイギリス的教養のもちぬしである。今後もさらに手をつくして調べ、幸いにして版をあらためることがあれば報告したいと考えている。

最後に、やっかいな校正を担当してくださった五所英男さん、この本の産婆役をつとめてくださった浦田伸二郎さん、ありがとうございました。

一九九〇年九月二六日

中村凪子

訳者略歴

中村凪子（なかむら　なぎこ）

1936年　東京に生まれる

1959年　早稲田大学文学部卒

《現在》　翻訳業

《訳書》　R.H. ピアソン「アザラシは海の犬」(草思社)，A. ラバスティール「自然とともに生きる女たち」(晶文社)，L.I. ワイルダー「大草原の小さな家」(角川文庫)，G. オーディッシュ「チョウの季節」(教養文庫)，P. ハイスミス「動物好きに捧げる殺人読本」(創元推理文庫)，L. ライン & F. ラッセル「オーデュボンソサイエティブック　野生の鳥」(共訳，旺文社)，他

〈お願い〉

☆現代教養文庫の定価は，すべてカバーに明記してあります。

☆万一，落丁乱丁の場合は，直接小社にお送りくだされば早速お取替致します。

現代教養文庫　1356　シンボル・イメージ小事典

1990年10月30日　初版第1刷発行

著　者　J・ガライ

訳　者　中村凪子

発行者　宮川安生

発行所　株式会社　社会思想社

東京都文京区本郷3の25の13

電話（03）813─8101（代表）

振替東京 6-71812　〒113

ISBN 4-390-11356-9

横山印刷・田中製本

教養文庫

中嶋　隆訳注
江戸の風俗小説　世間子息気質(むすこかたぎ)・世間娘容気(むすめかたぎ)
息子の浪費・放蕩、娘の浮気・淫奔など江戸時代中期の生態を描く。現代語訳と原文。

横山源之助
立花雄一編
下層社会探訪集
本書は『日本の下層社会』の成立前後の作品群。明治社会の風物や庶民生活を活写。

シュペルヴィエル
三野博司訳
沖の少女《シュペルヴィエル幻想短編集》
生と死、動物と人間、現実と夢想……夢幻の世界の広がりと妖しい快感を誘う作品集。

M・スパーク
小辻梅子訳
ポートベロー通り《スパーク幻想短編集》
現実と幻想の交錯した超自然の世界をモチーフとしたミステリアスなファンタジー。

D・コーエン
岡　達子訳
世界謎物語
太古から現代まで幾世紀にもわたって人々を魅了しつづけた不思議な事柄のレポート。

F・V・ラビザ
藤川　誠訳編
君の家にある宇宙●宇宙科学の実験
宇宙の諸現象に関係のある各種実験を身のまわりにあるものを使ってできる本。

関　楠生
西洋史エピソード集
有名な歴史上の人物の、意外と知られていない面白い話、うそのような本当の話…。

シンボル・イメージ小事典

J・ガライ著
中村凪子訳

教養文庫
1356
D
022
￥520
(505)

ISBN4-390-11356-9 C0190 P520E

社会思想社　定価520円（本体505円）

●教養文庫異界シリーズ

ギリシア神話小事典　B・エブスリン
妖精の誕生　フェアリー神話学　T・カイトリー
フェアリーのおくりもの　世界妖精民話集　T・カイトリー
エピソード魔法の歴史　黒魔術と白魔術　G・ジェニングス
SF&ファンタジーガイド　神月摩由璃
スパーク幻想短編集　ポートベロー通り　M・スパーク
シュペルヴィエル幻想短編集　沖の少女　J・シュペルヴィエル